

太宰府・佐野地区遺跡群 18

佐野土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
日焼遺跡第3次調査・前田遺跡第12次調査

平成16年

太宰府市教育委員会

序

佐野地区遺跡群は本市の南西側を占め、大佐野、向佐野区で実施されている土地区画整理事業に伴う発掘調査により、その詳細が明らかになりつつあります。

今回の報告書は大字向佐野字日焼および前田で実施した調査の報告であり、本遺跡では古墳や奈良・平安時代の流路の跡や大宰府と鴻臚館を結ぶ官道（公道）などが発見されており、古代大宰府の構造を考察する上で貴重な成果を得ております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

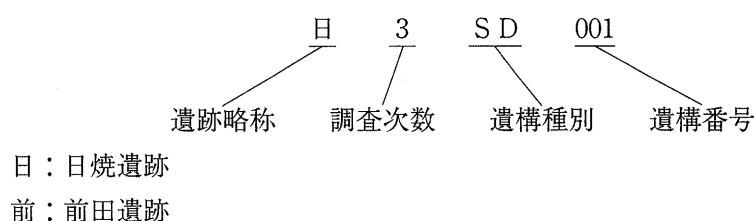
最後になりましたが、文化財に対してご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成16年3月

太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は日焼遺跡第3次調査および前田遺跡第12次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 日焼遺跡第3次調査は太宰府市大字向佐野338-1番地ほかに位置し、調査を平成15(2003)年3月5日から11月28日に実施した。調査実施面積は7062m²である。前田遺跡第12次調査は太宰府市大字向佐野717番ほかに位置し、調査を平成15(2003)年11月25日から12月19日に実施した。調査実施面積は398.76m²である。
3. 発掘調査は、太宰府市教育委員会の指導のもと(株)玉川文化財研究所(所長 戸田哲也)が行った。
4. 遺構の実測は中山豊、佐々木竜郎、遺構の写真撮影は佐々木竜郎、空中写真撮影は(有)空中写真企画、遺物の写真撮影は赤間和重が行った。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって図中に記載される方位は特に注記のない限り座表北(G.N)を指している。
6. 報告書作成業務は(株)玉川文化財研究所において行った。
7. 本書の執筆は戸田哲也・河合英夫の指導のもとに佐々木竜郎が行い、編集は小松清、玉川久子が行った。
8. 縄文土器の拓本図は断面の左側に表面、右側に裏面を置いている。
9. 付札状木製品の墨痕の観察にあたり荒井秀規、望月 芳(藤沢市教育委員会)の両氏からご助言とご協力を賜った。
10. 木製品の保存処理は(株)東都文化財保存研究所に委託した。
11. 木製品の樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果を付編として掲載した。
12. 本書に掲載される遺構番号は以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SB掘立柱建物、SD溝、SI住居、SXその他の遺構などであり、詳細は『佐野地区遺跡群Ⅰ』に記載している。



13. 本文・挿図・表・写真図版については付属のCD-ROMに収容している。詳細はCD-ROM内のテキストデータ「はじめにお読みください」を参照のこと。
14. 出土遺物、図面、写真等の記録類は太宰府市教育委員会が保管している。
15. 本書に掲載した遺物の分類は以下に記載された分類によっている。
 - 土 器 太宰府市教育委員会(1983)『大宰府条坊跡Ⅱ』
 - 太宰府市教育委員会(1992)『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡篇』
 - 陶磁器 太宰府市教育委員会(2000)『大宰府条坊跡Ⅳ』

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査組織	1
第Ⅲ章 日焼遺跡第3次調査	4
第1節 調査の概要	4
第2節 検出された遺構と遺物	7
1. 遺 構	7
1) 竪穴住居	7
2) 掘立柱建物	8
3) 土坑	11
4) 溝	13
5) 旧河道	16
6) 自然流路	27
7) 遺物集中区	28
8) その他の遺構	29
2. 遺 物	32
1) 土 器	32
2) 木製品	47
3) 縄文土器	49
4) 石 器	49
第Ⅳ章 前田遺跡第12次調査	75
第1節 調査の概要	75
第2節 検出された遺構と遺物	75
1. 遺 構	75
2. 遺 物	80
第Ⅴ章 ま と め	88
付 編 日焼遺跡第3次調査出土木製品の樹種同定	90
報告書抄録	巻末

第Ⅰ章 位置と環境

日焼遺跡・前田遺跡を包括する佐野地区遺跡群は太宰府市の南西に位置し、背振山系から北東に延びる丘陵または裾部に展開している。地形的には大佐野川・鷲田川によって形成された低位段丘面・沖積段丘面にあたる。調査地内の地盤は、丸山神社側の一部で八女粘土・鳥栖ローム層（第四紀層）由来の粘土層が確認される以外は、すべて砂層または粘質土を主体とする河川の堆積作用による二次堆積土である。

日焼3次調査区の現況は南側の一部が宅地であった以外は、水田または畑の耕作地であり、西側に面する竹林の生い茂る山側から東側に低く、地表面での標高は34～36mを測る。日焼・前田両遺跡の境界部分に位置する前田12次調査区は旧道の道路部分で、南から北へ向かって低く標高33～35mである。

昭和62（1987）年から実施された太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴い、現在（平成15年度）まで18遺跡87次にわたる発掘調査が継続して行われ、これまで旧石器時代から近世にかけて多くの遺構・遺物が検出されてきた。今回の調査区の隣接地では東側に前田遺跡、西側に宮ノ本遺跡が存在する。宮ノ本遺跡の調査回数は13次を数え、古墳時代から平安時代の墳墓、須恵器窯等が検出されている。出土遺物中には副葬品として埋納された鏡や鉛製買地券があり、遺物の内容もさることながら古代から律令期にかけての古代大宰府の土地利用において墓域としての性格的位置づけが認識されたことは大きな成果といえる。

前田遺跡は今回の調査を含め12次にわたる調査が行われ、弥生時代を主体とした竪穴住居群および貯蔵穴等が検出されている。古代では竪穴住居や掘立柱建物の他に水城西門へ通じる直線道路が存在し、側溝間の心々距離が10mを測ることから古代官道として推定されている。本調査区が、その延長線上にあることから、官道側溝の検出が期待された。また近年では無遺物層として認識されていた土層下から縄文時代の遺構・遺物の検出例も増加しつつあり、条坊外地域における律令期以前の生活痕跡が序々に明らかにされてきたと言える。なお、調査地周辺の調査および詳細については各報告書を参照されたい（第1図）。

なお、現地調査は耕作土または盛土を機械力によって遺構確認面まで除去し、それ以外は人力で作業を行った。調査・整理の方法についての詳細は『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』1989太宰府市教育委員会」をご覧頂きたい。

第Ⅱ章 調査組織

調査・整理を実施した平成14年度および平成15年度の調査組織は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会調査組織

（平成14年度／2002年度）

総括	教 育 長	關 敏 治
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文 化 財 課 長	木 村 和 美
	文化財保護係長	和 田 敏 信
	文化財調査係長	神 原 稔
	事 務 主 査	藤 井 泰 人
	主 任 主 事	大 石 敬 介

調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮(調査担当)
		中島恒次郎(試掘担当)
	主任技師	井上信正
		高橋学
		宮崎亮一
	技師(嘱託)	下川可容子
		森田レイ子
		柳智子
		渡邊仁

(平成15年度／2003年度)

総括	教 育 長	關 敏 治
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文化財課長	木 村 和 美
	文化財保護係長	和 田 敏 信(～15年6月30日)
	保護活用係	久保山 元 信(15年7月1日～)
	文化財調査係長	神 原 稔
	調 査 係 長	永 尾 彰 朗(15年10月1日～)
	事 務 主 査	藤 井 泰 人
	主任主事	大 石 敬 介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮(調査・整理担当)
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正
		高橋学
		宮崎亮一
	技師(嘱託)	下川可容子
		森田レイ子
		柳智子
		渡邊仁

(株)玉川文化財研究所調査組織

所 長	戸 田 哲 也
調査研究部長	河 合 英 夫
主任研究員	中 山 豊(調査担当)
主任研究員	香 川 達 郎
研 究 員	北 平 朗 久
研 究 員	佐々木 竜 郎(調査・整理担当)
調 査 員	前 川 昭 彦



遺跡名	次数	報告書名	発行年
日焼遺跡	3	太宰府・佐野地区遺跡群18	2004
	1・2・4～8	未報告	—
前田遺跡	1	太宰府・佐野地区遺跡群X（遺構編）	2000
		太宰府・佐野地区遺跡群XI（遺物編）	2001
	4～6	太宰府・佐野地区遺跡群14	2002
	7	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅶ	1998
	8～11	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅸ	1999
	12	太宰府・佐野地区遺跡群18	2004
	2・3	未報告	—
宮ノ本遺跡	1	宮ノ本遺跡	1980
	2	宮ノ本遺跡Ⅱ－古墳、墳墓編－	1987
		宮ノ本遺跡Ⅱ－竪穴編－	1992
	3・4	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅱ	1991
	7－1	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ	1993
	7－2	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅴ	1995
遺跡名	次数	報告書名	発行年
宮ノ本遺跡	9	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅶ	1998
	10・14	太宰府・佐野地区遺跡群17	204
	5・6・8・11・12・13	未報告	—
原口遺跡	1	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ	1989
	2・3	未報告	—
久郎利遺跡	1～4	未報告	—
篠振遺跡	1	篠振遺跡	1987
	2	未報告	—
長浦遺跡	1～3	未報告	—
上川久保遺跡	1・2	太宰府・佐野地区遺跡群16	2003
鎌川遺跡	1	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅵ	1996
	2	太宰府・佐野地区遺跡群16	2003
フケ遺跡	1～4	太宰府・佐野地区遺跡群Ⅶ	1997
	5・6	未報告	—

第1図 向佐野地区周辺の既調査区

第Ⅲ章 日焼遺跡第3次調査

第1節 調査の概要

日焼遺跡第3次調査区は、南側の一部が宅地である以外はすべて耕作地（水田・畑）であった。本調査区は、西側に面する丘陵側から東側に向かって低くなり、現代に至るまでの度重なる耕作の結果、削平や盛土等の地形改変を受けている。

調査は北端部より開始し、機械力を用いて耕作土および盛土の除去を行い、遺構並びに遺物包含層の確認を行った。作業の工程では、7月19日の記録的な豪雨の影響もあり作業の遅れもあったが、調査区を大きく3つのブロックに分け、北側部分および西側丘陵部を9月中旬、中央部分付近を10月初旬、南側部分を10月下旬まで遺構の調査を行った後、それぞれの空中写真撮影を実施した。

遺構検出面の概略は、調査区南端の一部で第四紀層起因の鳥栖ロームや八女粘土層が露呈する箇所を除けば、西側丘陵部からの流入と推定される黄褐色砂を主体とする花崗岩風化土による二次堆積土の地域と、河道の氾濫によって形成された沖積層の地域に分けられる。調査区の北西および南西から中央付近で合流して東側へと向かう旧河道（3SD001）が存在しており、旧河道範囲内の土壌は特に度重なる氾濫によって堆積していることから平面的な土層の違いを認識するには困難な状況にあり、地盤自体が砂質土を主体とする脆弱な土質なため、調査中は雨天の度に壁面の崩落や上方からの土砂が再堆積する状況が見られ、別地点の遺物が混入してしまう場合もあった。

旧河道を挟んだ調査区北側および西側部分の遺構検出面には花崗岩風化土を主体とする砂質土系土壌が広がっており、古代を中心とした遺構・遺物が検出されている。西側部分では耕作時の地割りによって段状に切られているものの、調査区西側に面する丘陵の裾部から旧河道にかけては概ねテラス状の緩斜面であったものと想定される。

調査区の東側は、耕地化された際に基盤層である緑灰色土まで地山を削平しており近代以降の農業関連の痕跡が確認されている。また、宅地であった調査区南端付近は建物の基礎による攪乱を受けている。

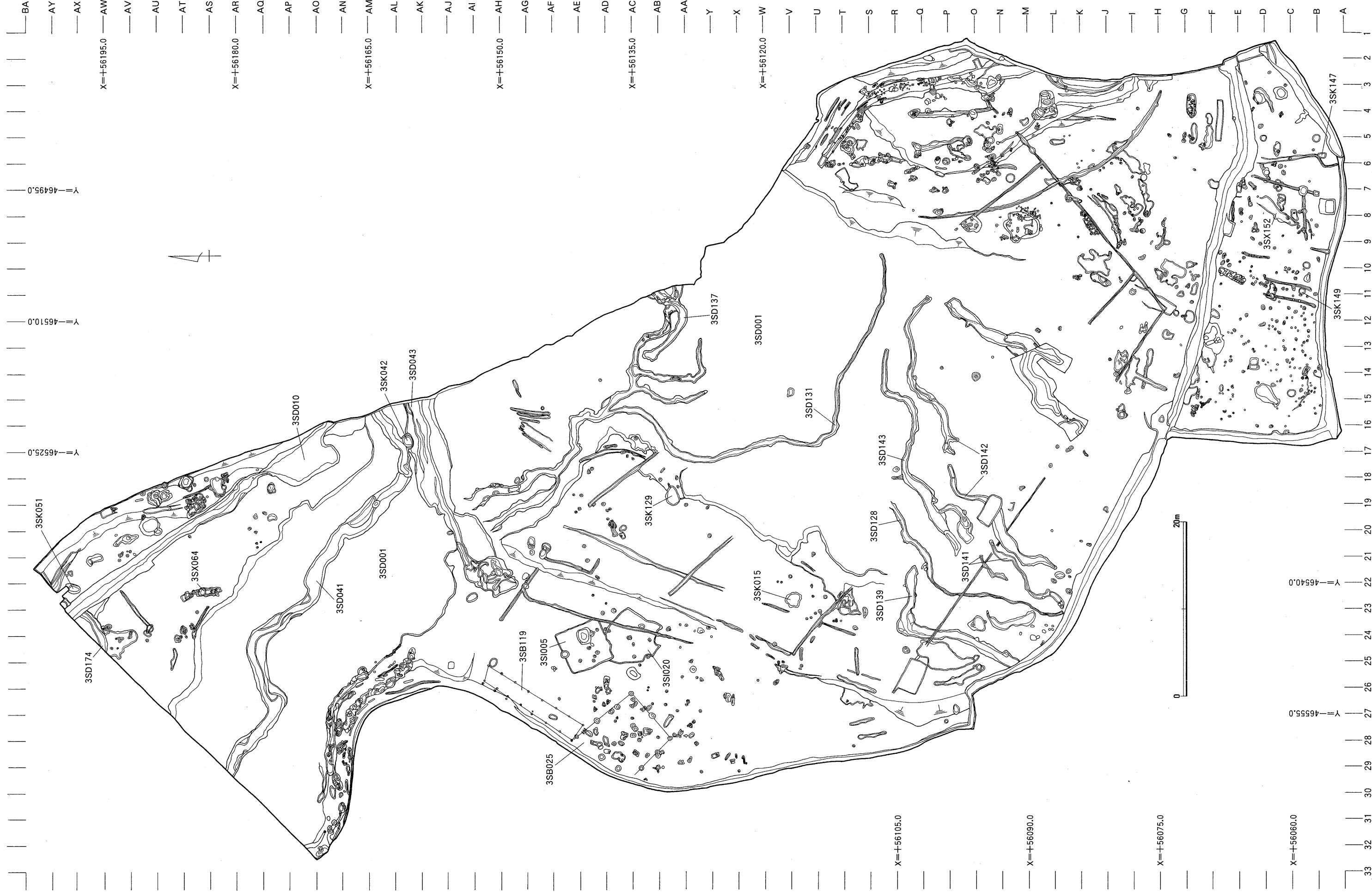
検出された遺構は、竪穴住居2軒、掘立柱建物2棟、土坑8基、古代官道の側溝ほか溝2条と全体の調査面積から見れば遺構密度は低いといえる。また、人為的ではないが豪雨等の自然作用によって形成された自然流路または小規模な窪みが旧河道に沿って多数見られ、それらの覆土中には遺物が包含される場合もあることから平面的に捉えられるものすべてについて調査を行った。

その他には、旧河道の範囲内で確認された奈良時代の須恵器を主体とする遺物集中区を3SX104としてトレンチ調査を実施し、遺物の平面的な広がりや流路の関係について調査を行った。

さらに遺構プランの確認時に剥片類を中心にした縄文時代以前の遺物が旧河道の範囲外で検出されていたことから、旧河道とその立地から便宜的に大きく4つのまとまり3SX169・171～173と把握して遺物を取り上げ、特に遺物点数の多かった調査区南側の3SX173では遺物包含層の堆積状況を確認するため7～10トレンチを設定し土層断面の観察を行った。

また、調査の行程上、北側・中央・南側に分けたそれぞれのブロックにおいて遺構調査が終了した時点でトレンチ調査を行い、旧河道の範囲および調査区全体の地形的景観の把握につとめ、縄文時代前半期以前に形成されたと考えられる干裂状地形の検出作業を行った。

以下、各遺構ごとの説明を行う。



第2図 日焼3次遺構全体図 (1/400)

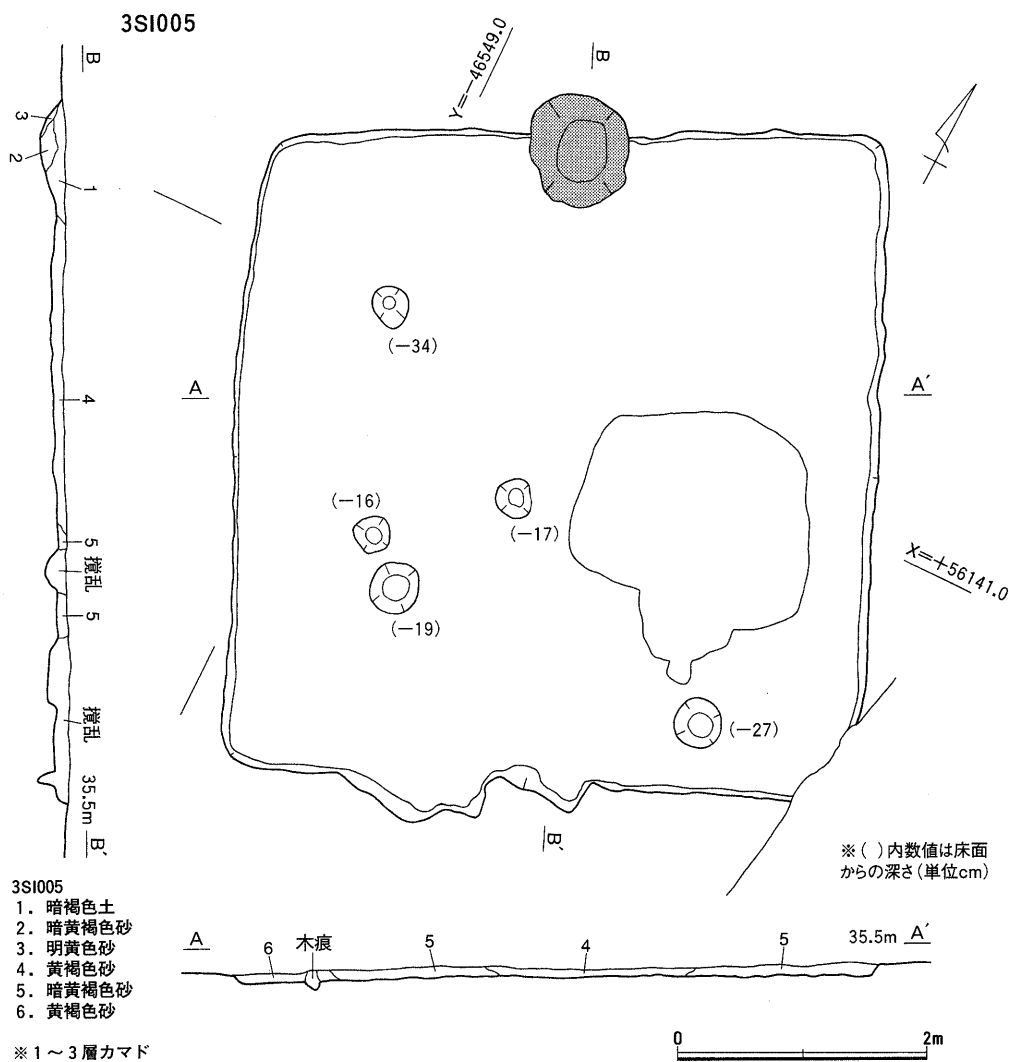
第2節 検出された遺構と遺物

1. 遺 構

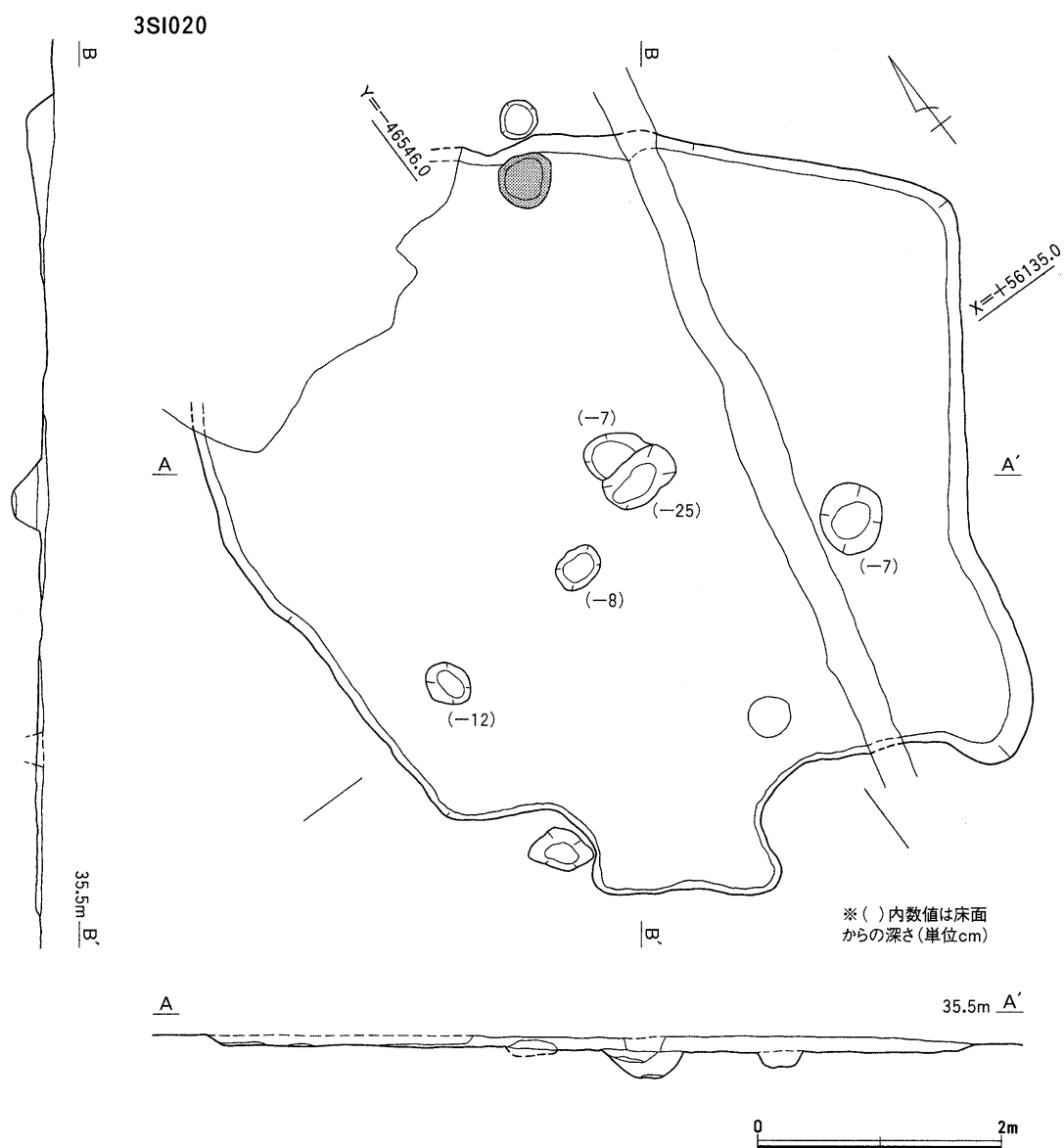
1) 竪穴住居

3SI005 (第3図、図版4)

調査区西側のテラス面に位置する。本址周辺は現代の耕作に伴う攪乱の影響により土層が乱れており、覆土の遺存状況はあまり良好ではない。平面形は方形を呈し、規模は5.13m×5.24mを測る。カマドは北壁のほぼ中央に存在し、本址に直行する十字ベルトを設定して土層ごとの掘り下げを行った。明瞭な床ではなかったためカマド部分の焼土の堆積から床面を認定した。その結果、床面を本来よりも掘りすぎてしまい土層断面から床面を復元している。カマドは焚き口や裾部などの構造が残されておらず、窪みが被熱により褐色化している様子から土器製の移動式のものを使用した可能性がある。柱穴は5本検出されたが支柱穴が特定できず3SI020と同様に床に直接据えたことも考えられる。主軸方向はN-24°-Wを指す。遺物は黄褐色砂で取り上げを行い、須恵器の小蓋1と坏c 3の小片が検出されていることから判断すると7世紀末から8世紀前半の所産と考えられる。



第3図 日焼3SI005実測図 (1/60)



第4図 日焼3SI020実測図 (1/60)

3SI020 (第4図、図版4)

3SI005と重複し、新旧関係では本址の方が古い。平面形は方形と考えられるが削平の影響によって不整形となっている。北東壁に隣接して焼土が薄く堆積する小ピットが確認されたが、これをカマドと推定した。住居の範囲は依存する床面より推定すると約6.1m×約6.2mとなり、床面までの深度は10cm程度である。また、カマドの位置から主軸方向を推定するとN-39°-Eを指す。出土遺物は須恵器の坏aがあり8世紀前半に比定される。

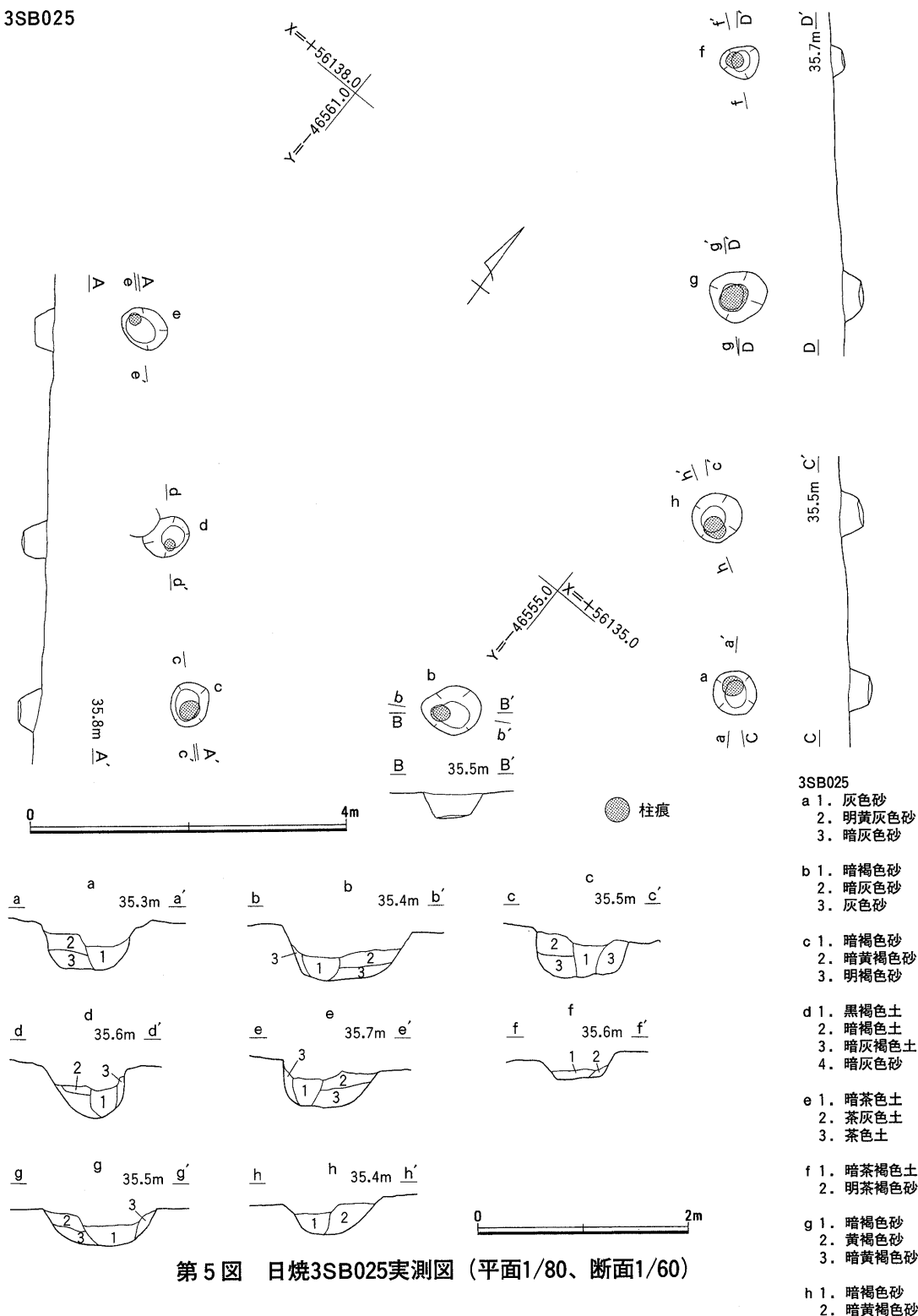
2) 掘立柱建物

3SB025 (第5図、図版5)

調査区西側のテラス面に位置し、2軒の竪穴住居の南西方向で検出された。南西側が調査区外のため全体の規模は明らかではないが、検出された範囲から2間×3間以上の側柱構造の建物址と想定される。

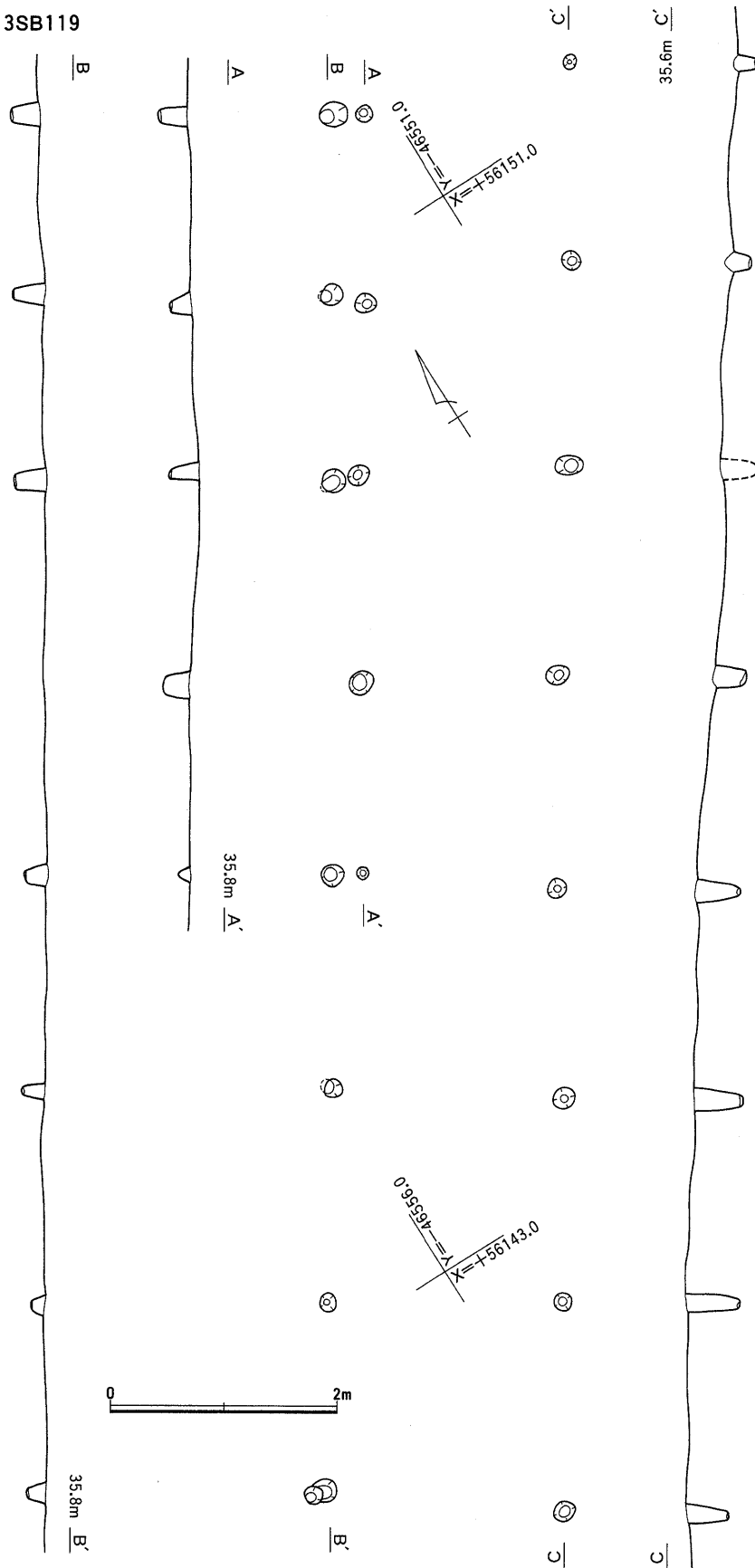
柱穴は8本が検出され、いずれも柱痕跡が確認がされた。柱穴の配置はやや不揃いであるが、側柱列の対応関係はおおむね良好といえる。柱間寸法は2.16~3.74mと一定していない。建物址の主軸方向はN-41°-Wを指す。遺構の時期の詳細は不明であるが、須恵器蓋の小片を手がかりとすれば8世紀以降の所産と考えられる。

3SB025



第5図 日焼3SB025実測図(平面1/80、断面1/60)

3SB119



第 6 図 日焼3SB119実測図 (1/60)

3SB119 (第6図)

本址は調査区西側境界のテラス面に位置し、北側には3SB025が存在する。柱穴は16本(内、5カ所で建替ないし重複)が検出されており、1間×7間の長方形の配置となる。掘り方内には柱が遺存するものもあり、先端部分は杭状の加工が施されていないことから、打ち込みによるものではない。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、柱穴の規模は20cm前後である。主軸方向はN-33°-Eを指す。遺物は出土していないが、覆土と柱痕の遺存状況からは水田に関わる近・現代の遺構と考えられる。

3) 土 坑

3SK015 (第7図、図版6)

調査区西側に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は東西164cm×南北175cm、深さ28cmを測る。底面は凹凸が著しく、覆土は灰色砂→黒褐色土→暗褐色土の順に堆積する。主に奈良時代前半の遺物が出土している。

3SK042 (第7図)

旧河道の自然流路(3SD041)を切って存在する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸196cm×短軸172cm、深さ36cmである。灰色粘土で埋没する。

3SK051 (第7図、図版6)

調査区北端部に位置する。平面形は楕円形を呈し、電柱の支線が存在するため北側部分は未完掘であるが、確認された範囲での規模は長軸186cm×短軸110cm、深さ49cmを測る。遺物は弥生土器甕の小片が出土している。

3SK129 (第7図、図版6)

調査区のほぼ中央に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸224cm×短軸157cm、深さ24cmを測る。覆土は赤褐色土→暗黄褐色土→暗褐色土の順に堆積する。

3SK147 (第8図、図版6)

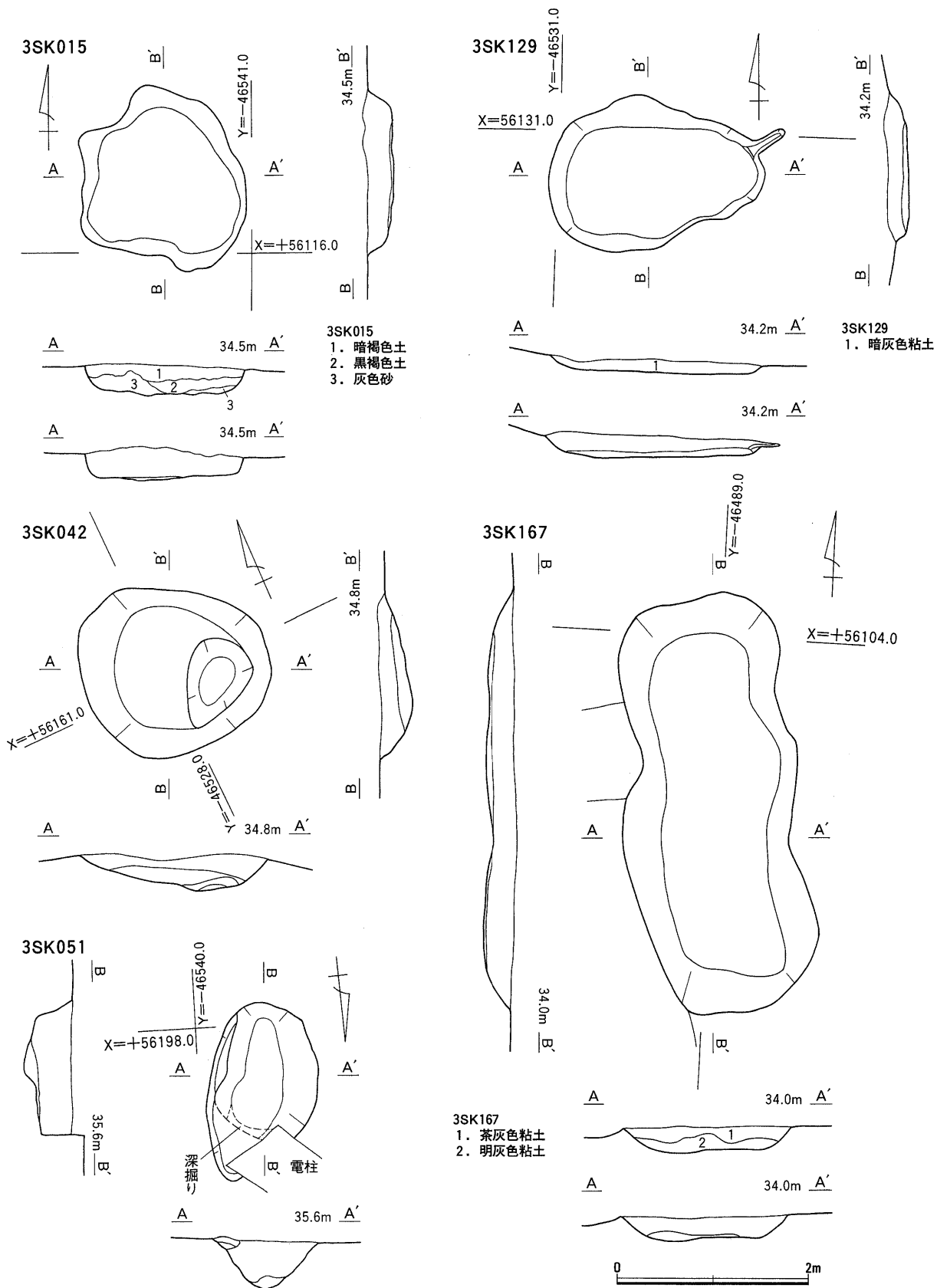
調査区南端部に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸100cm×短軸70cm、深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

3SK149 (第8図、図版6)

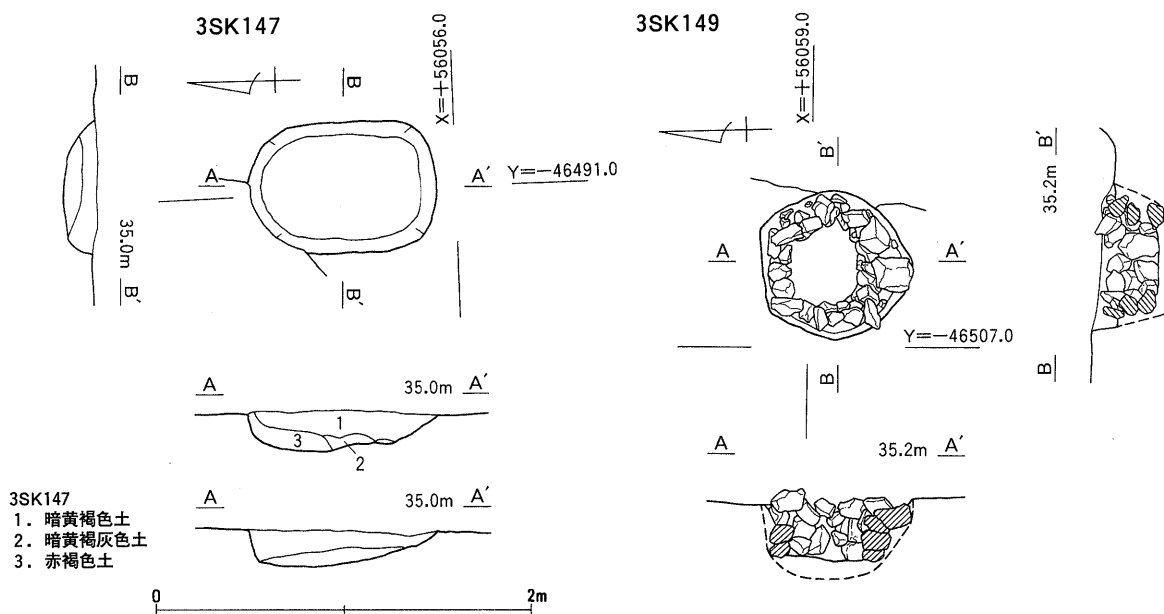
調査区南端部に位置する。直径80cmの略円形を呈し、掘り方底面までの深さは42cmを測る。土坑の壁面には人頭大前後の角礫によって石積みがされている。覆土は暗青灰色粘土→暗灰色粘土の順に堆積しており、最新の出土遺物には近代以降の国産陶器片がある。

3SK167 (第7図、図版6)

調査区東側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸426cm×短軸175、深さ30cm前後を測る。覆土は茶灰色粘土→明灰色粘土の順に堆積する。遺物は出土していない。



第7図 日焼3SK015・042・051・129・167実測図 (1/60)



第8図 日焼3SK147・149実測図 (1/40)

4) 溝

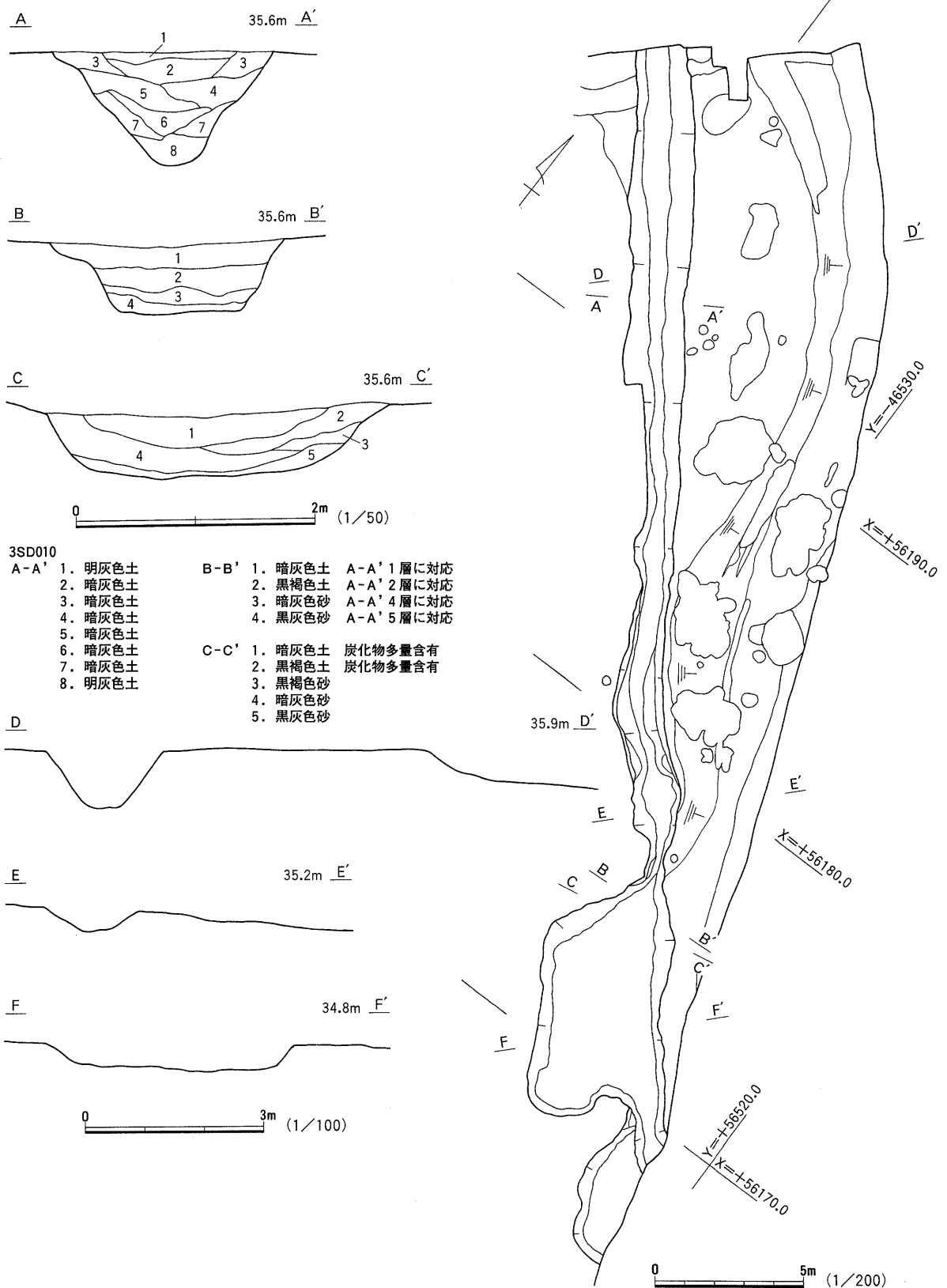
3SD010 (第9図、図版7)

本址は前田遺跡、日焼第2次調査等で検出されている推定古代官道の西側の側溝部分であり、本調査区では全長約40mにわたって検出された。断面形は北側の部分で緩やかな「V」字状、南側ではやや幅広の逆台形状を呈する。検出面からの深さは北側の最深部で93cmを測るが、南側に行くにしたがって浅くなり南端部付近では本来の形状を保っておらず溝のプランが不整形となる。その要因には旧河道 (3SD001) の縁辺付近にあたることから地盤が脆弱であったことが影響したものと考えられる。土層観察では下部に砂層が認められる水性堆積の様相を示すが、上位から中位にかけては粘質系土壌の堆積が主体である。A-A'セクション4・5層と6・7層の間、B-B'セクション1層と2層の間における堆積状況は、前田遺跡の第5次調査で検出された5SD100のテラス状部分の形状に類似することから、側溝の掘り直しによる溝幅の拡張が想定される。なお、路面の痕跡は全く検出されておらず、耕作等によって削平を受けたものと考えられる。遺物は北側部分で奈良時代を主体とする須恵器が検出されている。

3SD043 (第10図、図版7)

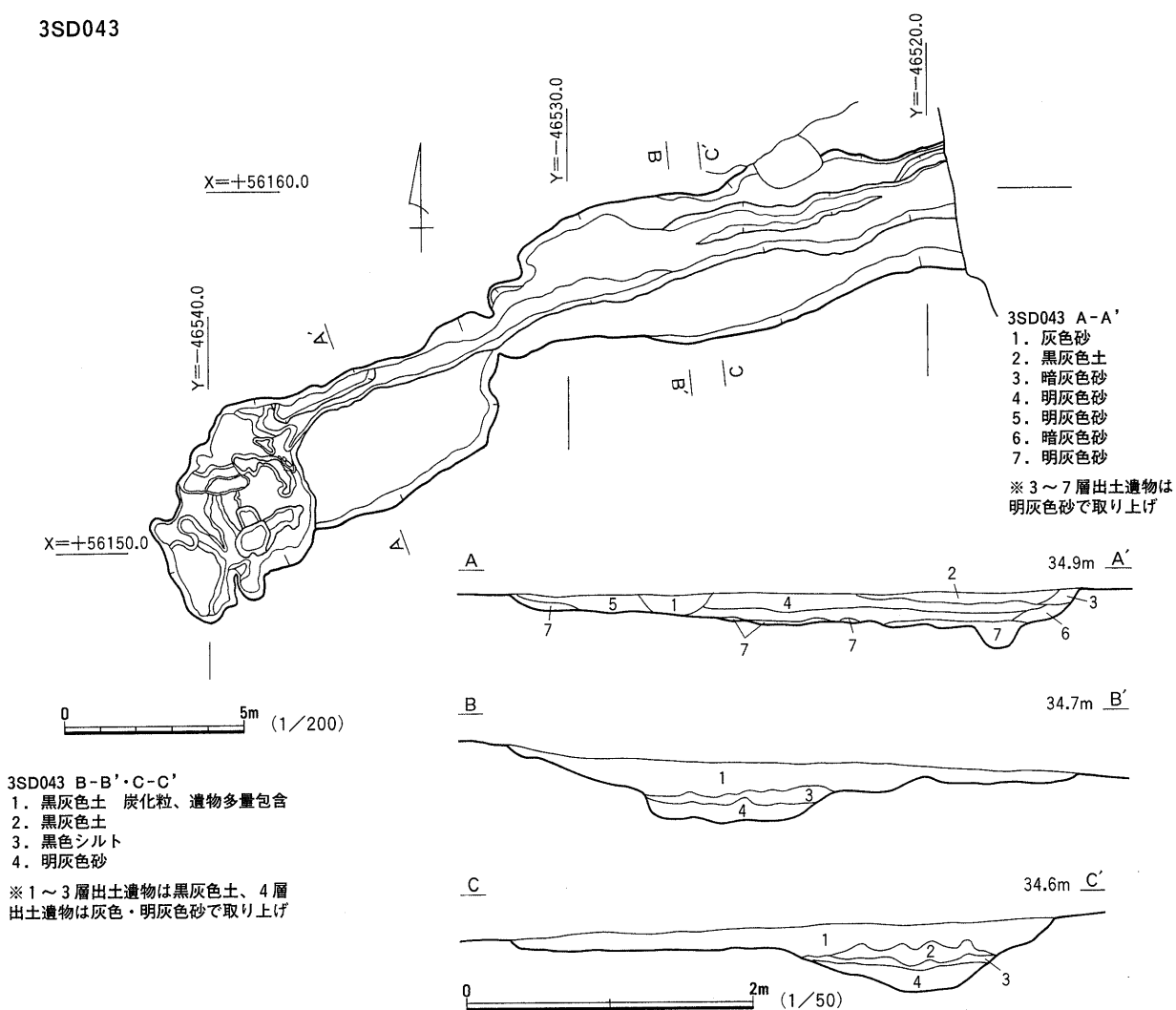
調査区中央のやや北寄りに位置する。東西方向で全長25mにわたって検出され、その延長部分は日焼第2次調査区へ続く。溝は西から東側に向かうにつれて深くなり、検出面からの最深部では43cmを測る。覆土では腐植土および砂層からなるラミナ状の堆積状況が認められることから流水性を示すものと考えられる。本址の断面形および平面形が不整形であるのは地山を砂質系土壌とすることから、流水の作用によって本来の形状が壊されているものと考えられる。遺物は、奈良時代の須恵器が主体をなすが、中世の瓦器や近世瓦が出土しており、農耕に伴う区画性を持つ水路と考えられる。

3SD010



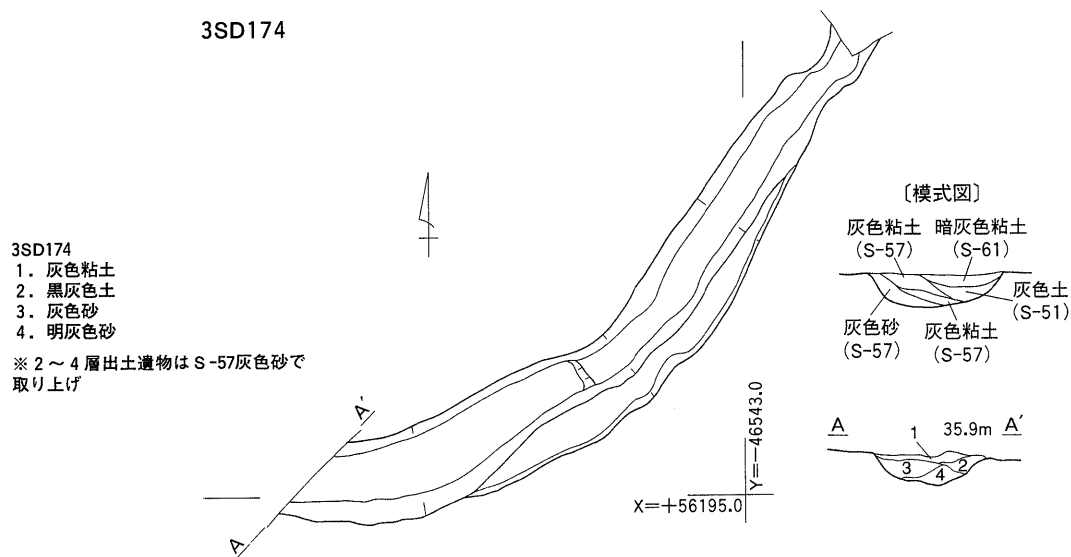
第9図 日焼3SD010実測図 (平面1/200、断面1/50・1/100)

3SD043



第10図 日焼3SD043実測図 (平面1/200、断面1/50)

3SD174



第11図 日焼3SD174実測図 (1/80)

3SD174 (第11図)

調査区北端部に位置し、官道の西側側溝(3SD010)よりも新しい。当初の平面プラン確認時にはS-56、S-57、S-61とし別遺構と認識したが、土層同士が潜る関係にあることから、報告時に統合して新たに3SD174とした。本址の周辺の地山自体が砂層を主体とする土壌であったことから掘りすぎてしまい、最終的に土層観察によって溝と判断した。灰色粘土層から「湊水」と記載された墨書が残る須恵器高坏が出土している。遺物は奈良時代の須恵器が主体であるが、最新の遺物に瓦質土器の鉢が検出されていることから中世に帰属する可能性もある。

5) 旧河道

3SD001 (第12～17図、図版8～11)

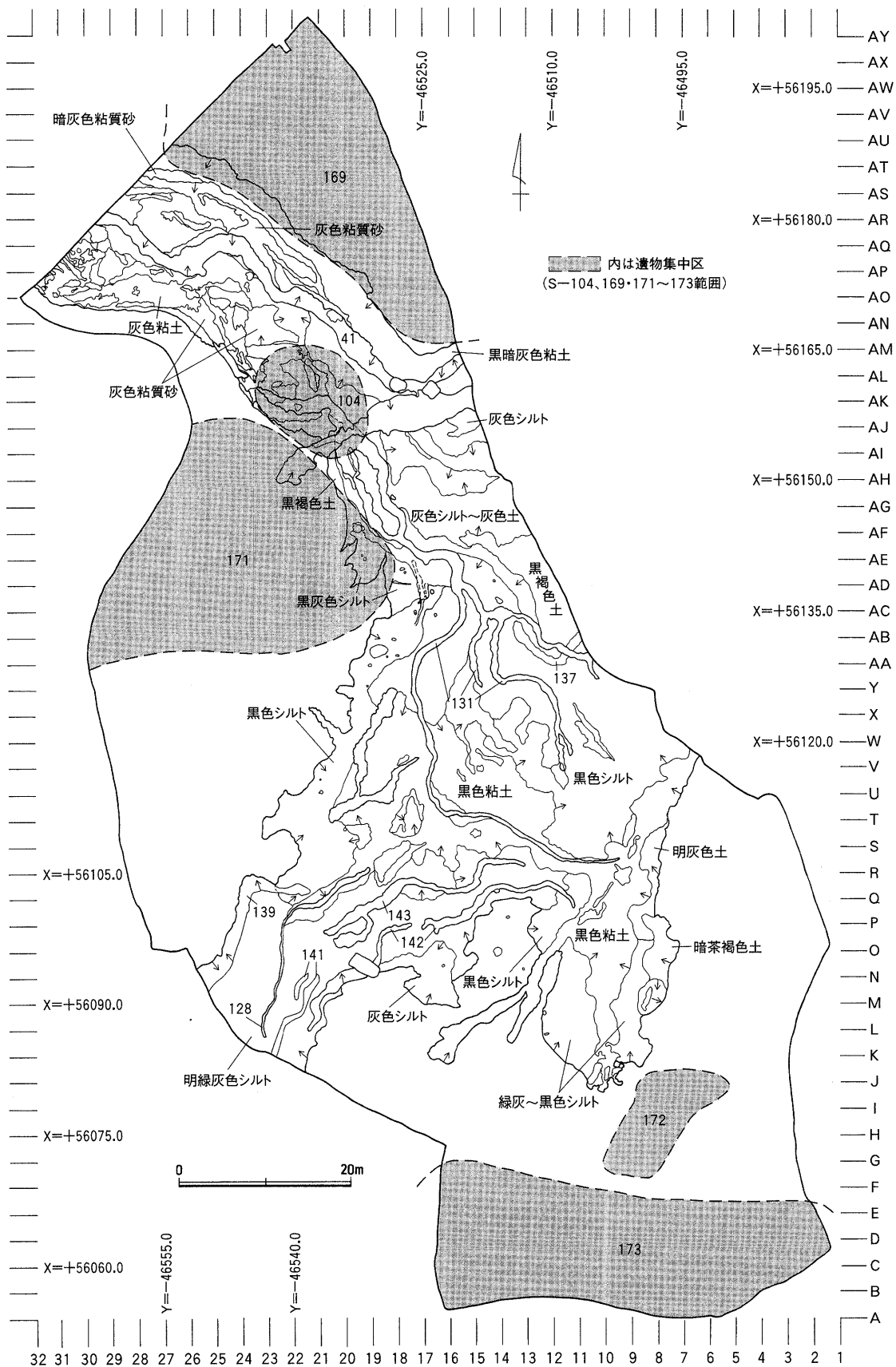
本調査面積の約 $\frac{1}{3}$ 程度を占める。調査区中央部付近が北西からの流れと調査区南西側に存在する丘陵裾部から発する流れの合流地点となる。以下、旧河道の時期的変遷およびトレンチ調査によって理解された自然地形についても併せて報告を行う。

旧河道(3SD001)の調査では、まず旧河道内覆土における遺構の平面プランの確認を行うと同時に堆積土層の先後関係を想定しながら略測図の作成を進めていったが、数cm下げただけでも土質が異なる砂質土・粘質土・単純砂層などが混在する複雑な土層堆積であり、また略測図の段階で土質の違いを細分化しすぎてしまっていたことから整理段階で混乱を生じる結果となってしまった。平面的に旧河道を認識する場合には河道の立ち上がりや土層の堆積状況の把握に限界があったことから、北側部分の遺構調査終了後、北西から流れ込む旧河道に対してほぼ直交する26～28ラインの南北方向に1トレンチを設定して土層断面の観察により河道の規模と時期的変遷について調査を行った。調査方法として1トレンチ周辺の平面で確認された各土層についてS番号を付けて人力による平面的な掘り下げを行っていき、検出面から150cm程下で基盤層である脱色化した風化花崗岩を主体とする河道の底面を確認した。

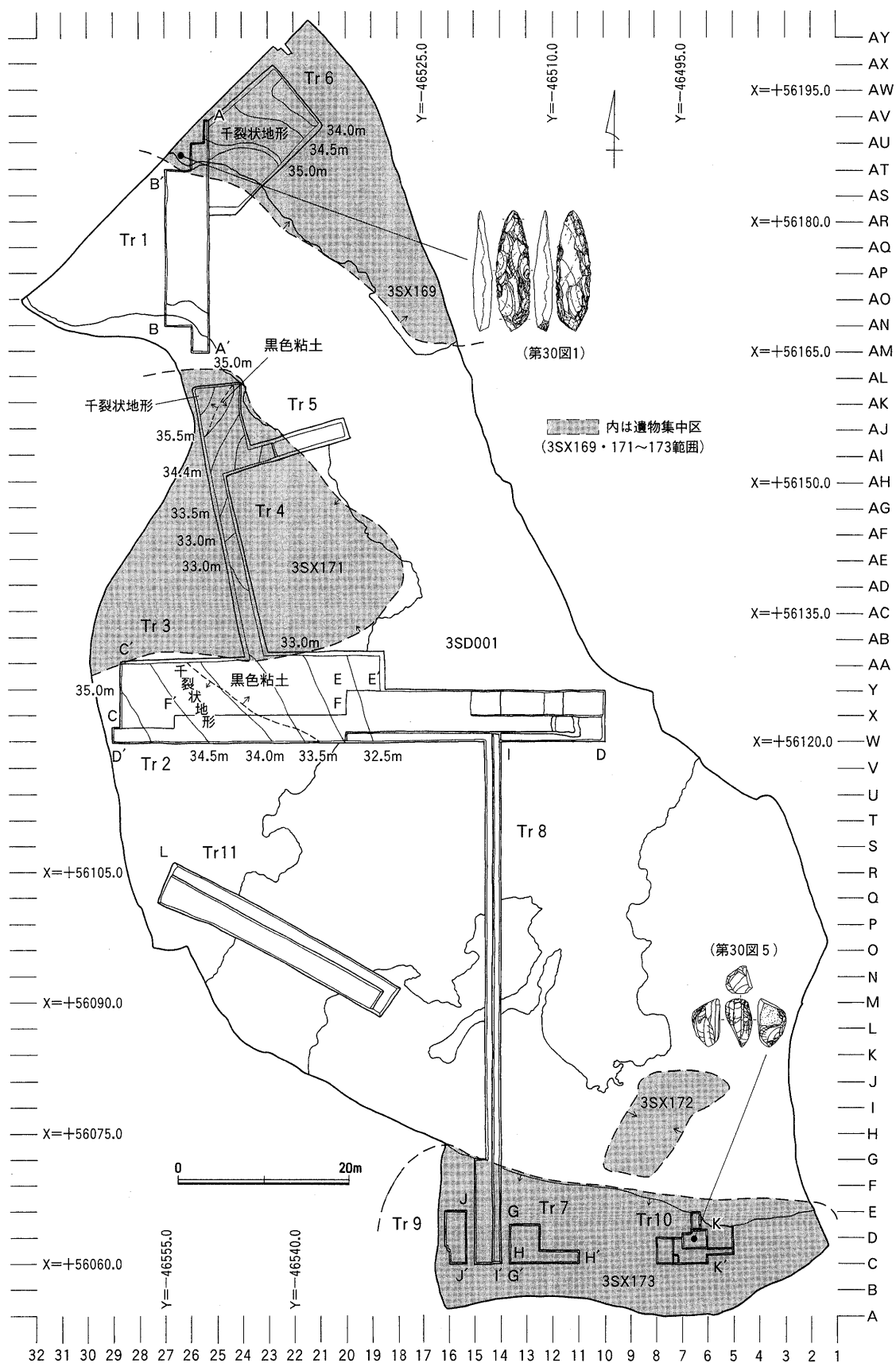
1トレンチ東壁および西壁のセクションでは砂層・シルト層・礫層・粘土層が複雑に堆積する状況が認められ、河道の氾濫ないしは流路の方向が激しく変動している様子が窺える。これらの堆積状況は出土遺物をもとにしておおむね3時期にわたる変遷過程を想定することが可能であり、第1～3層群として捉えた。ここで触れる遺物の番号については第15図および「日焼遺跡第3次調査遺物一覧表」を参照されたい。第1層群は古代以降(主に奈良時代)に属し、東壁セクション1～33層、西壁セクション1～12層である。遺物番号1・4・9・10・11の須恵器小蓋・坏c1・甕・壺bと縄文土器の粗製鉢が検出されている。第2層群は弥生・古墳時代が想定され東壁セクション34～67層、西壁セクション13～37層である。遺物番号は2・7・8・12があり、磨製石斧の欠損品を転用した敲石、古式土師器の脚付鉢、山陰系の壺、縄文土器片が検出された。第3層群は縄文時代後半期の河道で、東壁セクション68～114層、西壁セクション38～54層である。遺物番号3・5の安山岩および黒耀石の剥片が出土している。

また1トレンチ北端部においては北側へ傾斜する土層の堆積が認められ、接するAT26グリッドの灰色砂から尖頭器および鋤形鏃、縄文時代早期の押型文土器が検出されたことから、東壁115～121は旧河道形成以前(縄文時代前半期)の河道ないしは谷への堆積土と把握される。119層灰色砂から遺物番号6の黒耀石剥片が出土し、122層の茶灰色粘土上面では硬化の顕著な干裂状地形が検出された。

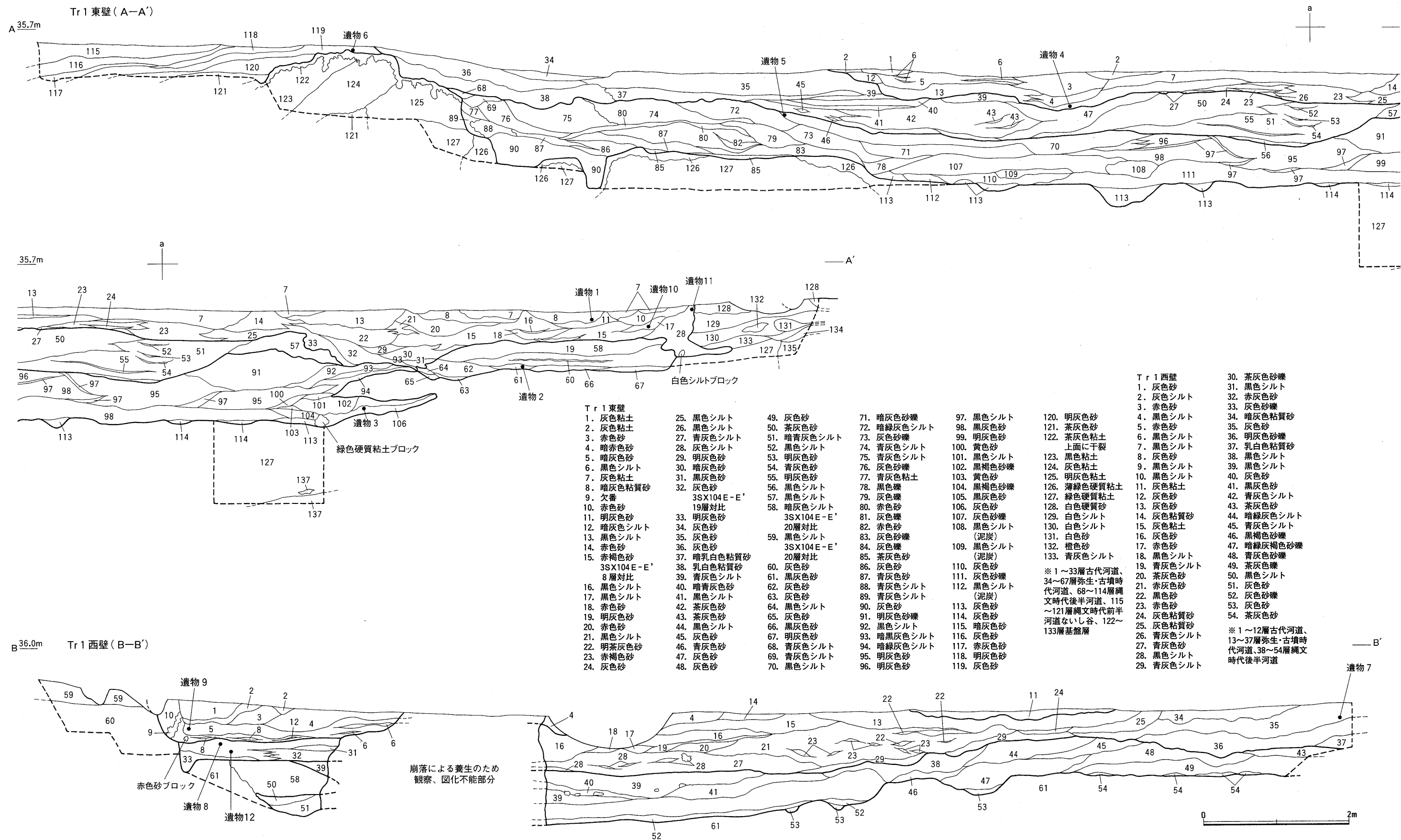
2トレンチは調査区の中央部でW・Xラインに沿う東西方向に設定してセクションの土層観察を行った。南壁セクションから65層下を旧河道の立ち上がりとして確認することができたが、1トレンチで見られた層群としてのまとまりで河道の変遷を捉えることは、遺物が殆ど検出されないため土層の帰属時期について明確にできなかったことや北西から流入する河道との合流地点であるため複雑な堆積状況で



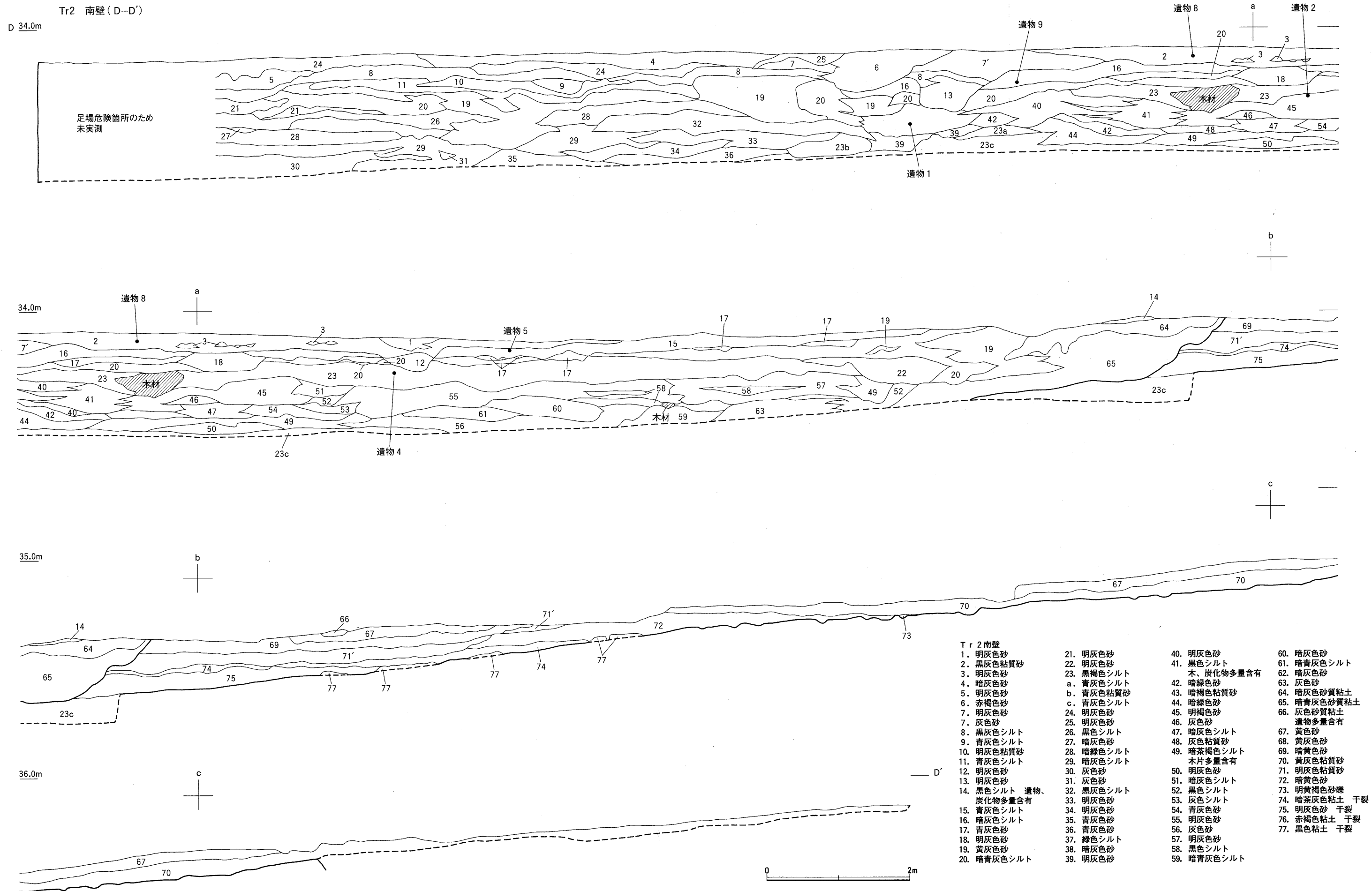
第12図 日焼3SD001略測図 (1/700)



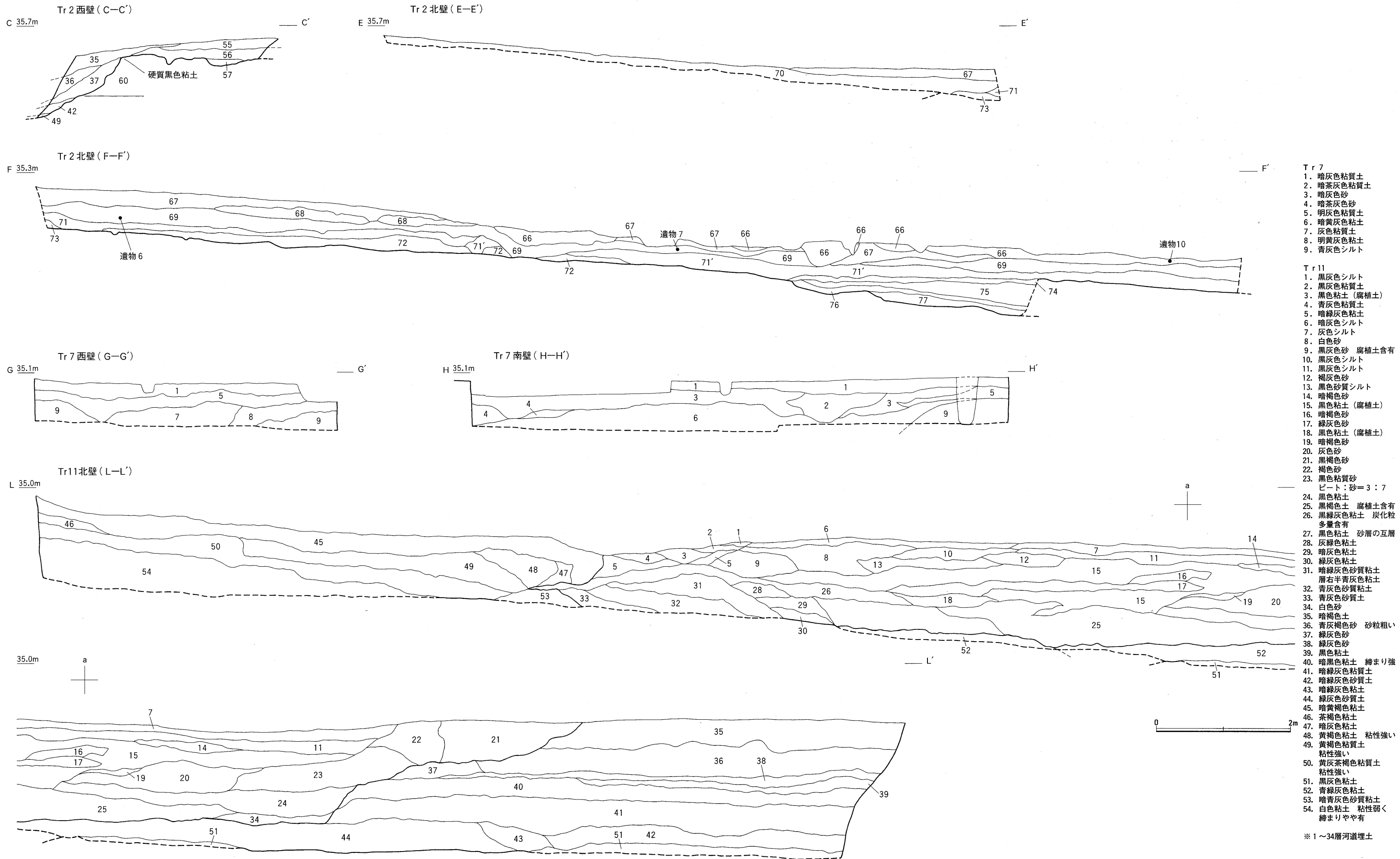
第13図 日焼3次トレンチ配置図 (1/700)



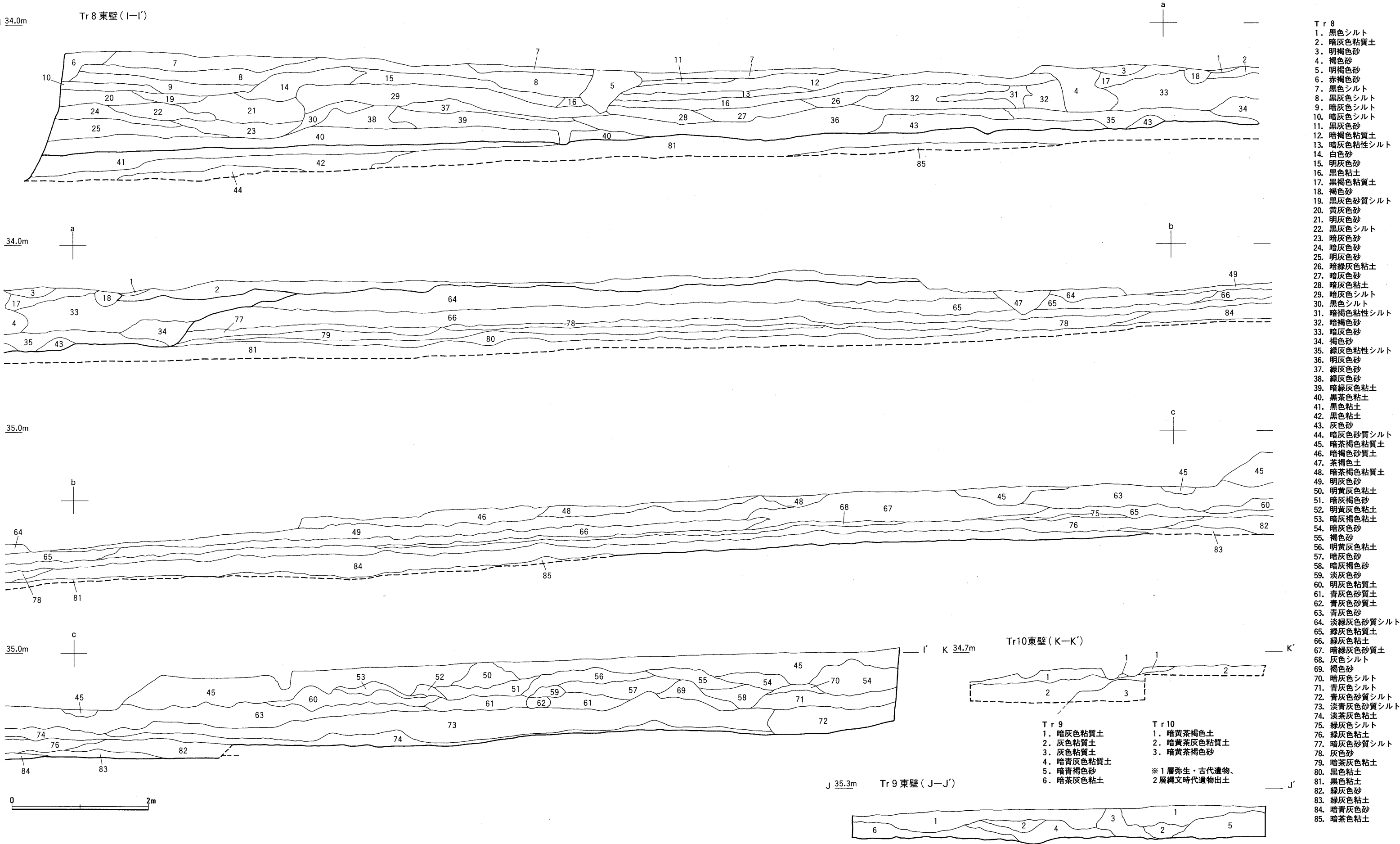
第14図 日焼3次1トレンチ断面図 (1/50)



第15図 日焼3次2トレンチ (南壁) 断面図 (1/50)



第16図 日焼3次2 (西・北壁)・7・11トレンチ断面図 (1/50)



第17図 日焼3次8～10トレンチ断面図 (1/50)

あったことから不可能であった。2トレンチ西側の74～77層上面において干裂状地形が検出されている。

3トレンチは調査区中央の西に位置し、2トレンチで検出された干裂状地形の広がりや縄文時代の遺構の確認を目的として2トレンチ北側を拡張して設定した。遺構は検出されなかったが、干裂状地形が標高33.5～34mを境に黒色粘土化していく谷地形が確認されたことから、1・3トレンチの間を結ぶ南北方向に4トレンチを、また4トレンチ北側では東方向に5トレンチをそれぞれ任意に設定した。その結果4トレンチ北端部でのみ干裂状地形が検出されたことから、谷頭は3・5トレンチに挟まれた西側部分のA E26地区付近にあることが想定される。

6トレンチは1トレンチ北端部で確認された干裂状地形の広がりや縄文時代の遺構検出を目的として1トレンチを拡張し、北東方向への傾斜を持つ干裂状地形が検出された。

8トレンチは2トレンチに直行する14ラインの南方向に設定を行った。東壁セクションから旧河道の立ち上がりが2・33・34層下にあることが確認されたが、ここでも2トレンチと同様に時期を決定する遺物が得られなかったことから層群として河道の変遷は捉え切れなかった。トレンチ中央付近では水平な土層堆積が見られるが、縄文時代の遺物集中区3SX173とした南側では再び不安定な土層堆積となる。

11トレンチは調査区の南西側に位置し、南西方向から流入する河道に対して直交する設定を行った。北壁セクションの1～34層が旧河道堆積土であり、西側の立ち上がりでは基盤層に再堆積状の不整合面が見られる。本トレンチからは明瞭な干裂状地形は検出されなかった。

旧河道(3SD001)における遺物の取り上げに関しては、トレンチ内の土層名をつけて取り上げているものは、各トレンチセクション図中の層名に同じである。S-71～89については先に触れたように平面の検出時にプランを想定して掘り下げを行ったが、結果的に大きな流れの中の小規模な堆積土壌であり、互層状をなす箇所や、同一に見える土壌同士が部位によって上下が逆転するケースも見られるため、大きな層群としてはS-1内の第1層群に集約して理解される。

6) 自然流路

旧河道(3SD001)内における小規模な水の流れについて自然流路としてここでは扱っている。覆土には褐色または白色系の砂が堆積しており、3SD041・131・137は北西から、3SD139・141～144は南西からの流水作用によって形成されたものと考えられる。各トレンチのセクションにおいても多数認められることから、旧河道が埋没する短期間に水流の強い部分が土層の脆弱な部分を浸食することで形成されるものと考えられる。これらの方向はおおむね旧河道内における水流の方向を示している。

3SD041 (第2図、図版2)

調査区北側に位置し、旧河道(3SD001)内を北西から南東方向に蛇行する。奈良時代の須恵器が最新の遺物であり、旧河道堆積土の第1層群中に含まれる短期間に形成された自然流路と考えられる。

3SD128 (第2図、図版2)

調査区南側の3SD139・141の間に位置する。調査区中央付近に至り消滅している。

3SD131 (第2図、図版2)

調査区中央付近に位置し、枝状に分岐する自然流路である。新旧関係では3SD137より新しい。

3SD137 (第2図、図版2)

調査区中央の東に位置し、重複する3SD131よりも古い。遺物は出土していない。

3SD139（第2図、図版2）

調査区南西側に位置する。旧河道（3SD001）である南西側からの流水作用によって形成されたものと考えられる。

3SD141（第2図、図版2）

3SD139の南に位置する。形成要因は3SD139と同じである。

3SD142（第2図、図版2）

3SD139と形成要因は同じであり、南西から流入する旧河道（3SD001）覆土範囲内の南側に位置する。

3SD143（第2図、図版2）

調査区南西側の3SD139・142の間に位置する。

7) 遺物集中区

本調査において旧河道（3SD001）の中央よりやや北西付近で確認された7世紀末から8世紀前半の須恵器を主体とする遺物集中区を3SX104とし、旧河道の縁辺部で検出された縄文時代以前の遺物分布地を便宜的に4つのまとまり（3SX169・171～173）として捉えた。以下、それぞれについて説明する。

3SX104（第18・19図、図版5）

遺構検出時に遺物の集中したA I～A N 19～25地区について、略測図を作成して平面的な土層の新旧関係を把握した上で、旧河道の西側の立ち上がりと埋没過程の確認を目的としてA～Eトレンチを設定した。各トレンチセクション図に記載した遺物番号の内容については「日焼遺跡第3次調査遺物一覧表」を参照願いたい。また、トレンチ内の遺物取り上げにおける注記は各トレンチの土層名と同じであり、同一セクション内に複数存在する場合は遺物の混同を避けるため土層名の後に番号を付けて区別した。

Aトレンチでは、15・16層が旧河道内に地滑り状に流入しているため1～14層が旧河道覆土である。1～9層は小規模な流路の単位として捉えられ、奈良時代の須恵器が検出されていることから旧河道の第1層群に属する。12層から検出された遺物12は古墳時代前期の壺、また17層から出土した遺物8は縄文時代の粗製深鉢である。遺物7は地山の二次堆積土に混入したものと考えられる。

Bトレンチでは、10層の灰色砂がAトレンチセクション10層の灰色砂②に対比できることから、1～9層までを第1層群として捉えることが可能である。13層からは土師器の甕が出土している。

Cトレンチでは20～25層が旧河道の地山となる。1～13層までの立ち上がりから小規模な流路の単位として捉えられ、第1層群堆積土と考えられる。11層はAトレンチセクションの8層に対比される。

Dトレンチでは1～13層までが第1層群と考えられる。1層の灰色粘土①からは多量の須恵器が検出されている。20層の立ち上がりから23～27層が地山と判断される。

Eトレンチの15層から古墳時代の甕が検出されたことから1～14層を第1層群とした。1層灰色粘土からは多量の遺物が出土している。

S-104は多量の土器が遺構プラン検出時に見られたものの、トレンチ内における中層から下層ではあまり出土しなかった。掘り方などを伴う人為性を考慮していたがセクションを観察した結果、旧河道（3SD001）の埋没段階では第1層群と捉えた奈良時代における堆積土内の小規模な流路内に遺物が多量に含まれていたことが判明した。また流路はその埋没過程の中で、徐々に旧河道の際にあたる西側に寄っていったものと理解される。

3SX169 (第12・13図)

調査区北側に位置し、旧河道(3SD001)の東岸で検出された遺物の分布範囲である。1トレンチのセクションで確認された旧河道の形成以前の堆積土中に含まれる(第14図Tr1東壁(A-A')115~121層)。1トレンチ北側のAT26地区灰色砂からは輝石安山岩製の尖頭器(第31図1)および鋤形鏃(第32図12)、縄文時代早期の押型文土器(第30図1)が検出された。また、この範疇に含まれる3SD010の覆土中からも細石刃1点と黒耀石の剥片類等が検出されている。

3SX171 (第12・13図)

3SX171は調査区中央の西側、旧河道西岸を遺物分布範囲とする。3~5トレンチで確認された東側に広がる谷地形に堆積した土壌中に包含される(第15図Tr2南壁(D-D')60~70層相当)。縄文時代早期の押型文土器および黒耀石製の石鏃、黒耀石または安山岩の剥片類が出土している。

3SX172 (第12・13図)

3SX172は旧河道の南東側に位置し、F~J5~9をその分布範囲とする。縄文土器片、黒耀石製の石鏃と剥片類が検出されている。

3SX173 (第12・13・16・17図、図版11)

3SX173は調査区南端に位置し、3SX172よりも一段高い検出面をその遺物分布範囲とした。縄文時代以前の遺物集中区とした中で最も多くの遺物が検出されている。細石刃(第31図4)も1点検出されていたことから、遺物包含層と遺構の確認を目的として7~10トレンチを設定した。なお、トレンチ内から出土した遺物に関する取り上時の土層名は各トレンチ内におけるセクションの土層と同一である。

7~9トレンチでは遺物を柱状に残しながら平面的に掘り下げを行ったが遺構は検出されず、遺物では縄文土器の小片や剥片類が数点検出されたのみである。セクションでは粘質土・砂質土が入り混じる二次堆積の状況が見られ、遺物はすべてこれらの土層中からの出土である(第16図Tr7西壁(G-G')・Tr7南壁(H-H')、第17図Tr8東壁(I-I')45・50~74層)。

10トレンチの南東の一部分にローム層が露出しているが北西部分には砂質系土壌が混在する二次堆積土である(第17図Tr9東壁(J-J')、Tr10東壁(K-K'))。暗黄茶褐色土からは古代の遺物が出土しており、円筒埴輪の小片も検出されている。また、暗黄茶褐色粘質土から細石刃石核(第31図5)が出土している。

8) その他の遺構

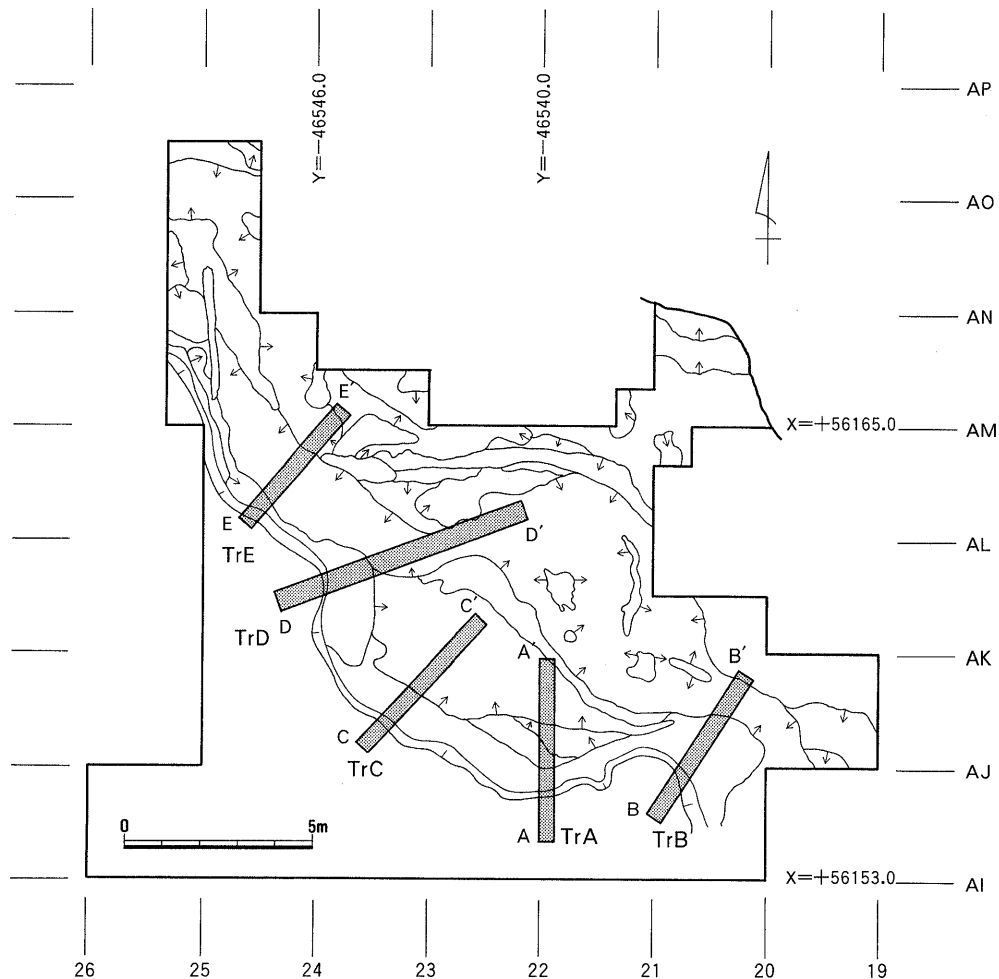
3SX064 (第2図、図版2)

調査区北側のAS22地区に位置する。不整形な平面形を持ち、底面は起伏が激しい。流水等によって形成された窪みが埋没したものと考えられる。

3SX152 (第2図、図版2)

調査区南端部分に位置する。平面形が不整形を呈する落ち込みに暗茶褐色土が堆積したもので、土師器甕、須恵器杯の小片のほかに円筒埴輪片が検出されている。

3SX104



第18図 日焼3SX104略測図およびトレンチ配置図 (1/200)

3SX104トレンチ断面

- Tr A (A-A')
1. 灰色砂① 遺物多量包含
 2. 橙褐色砂
 3. 灰色粘土①
 4. 暗灰色砂
 5. 明灰色砂①
 6. 明灰色砂②
 7. 灰色粘土②
 8. 灰色粘土③
 9. 黒色シルト
 10. 灰色砂②
 11. 橙灰色砂
 12. 灰色砂礫
 13. 橙灰色砂礫
 14. 灰色砂③
 15. 黄灰色砂
 16. 乳白色粘土
 17. 明灰色砂
 18. 乳白色粘土
 19. 明灰色砂
 20. 乳白色粘土

※ 1・2層出土遺物は灰色砂、
3層出土遺物は灰色シルト、4
～8層出土遺物は明灰色砂で取
り上げ

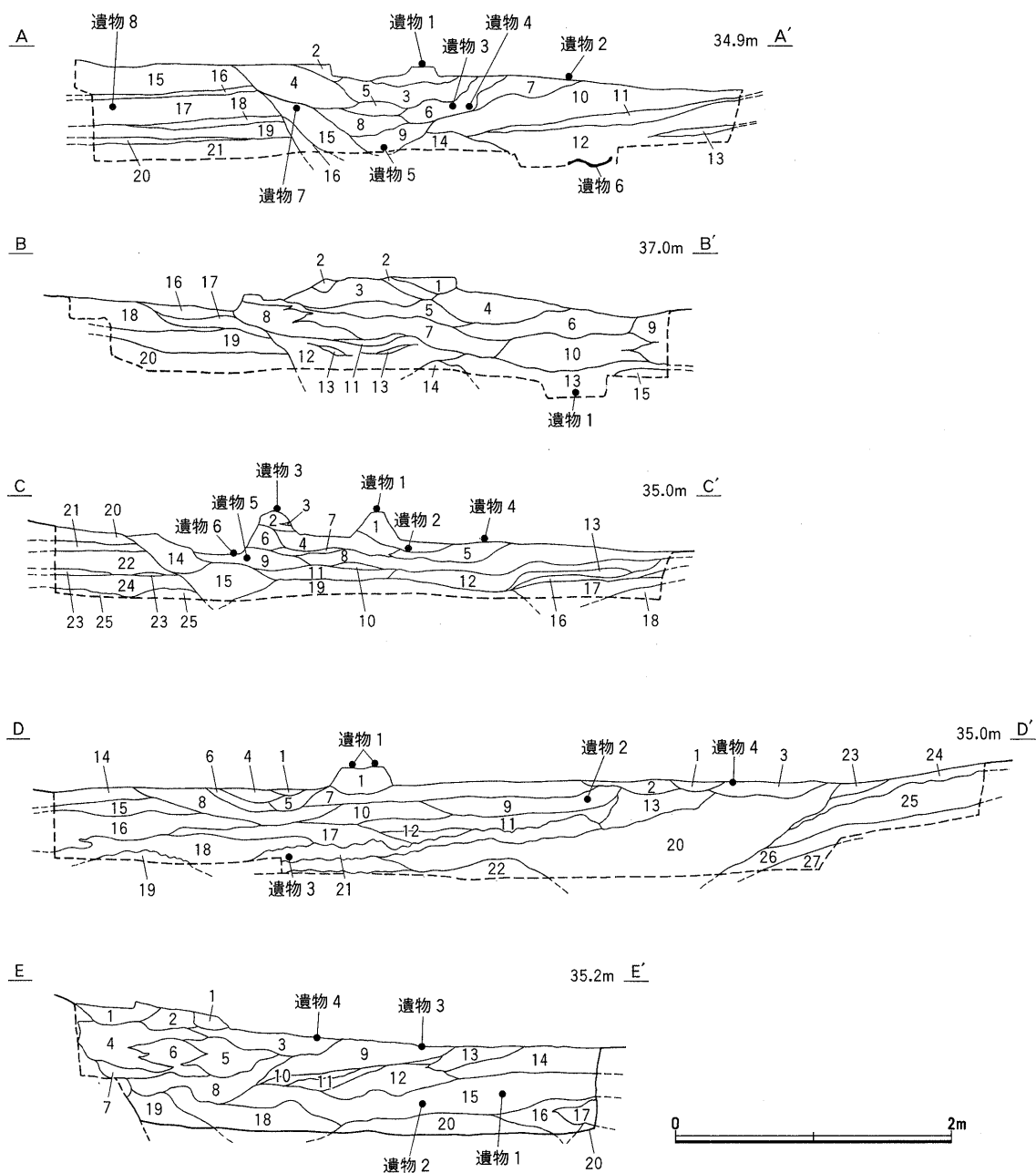
- Tr B (B-B')
1. 灰色砂①
 2. 灰色粘土
 3. 灰色砂② 遺物多量包含
 4. 赤灰色砂
 5. 灰色砂③
 6. 茶灰褐色砂
 7. 灰色シルト
 8. 灰色砂④
 9. 灰色シルト
 10. 灰色砂
 11. 明灰色砂
 12. 赤灰色砂
 13. 赤灰色砂
 14. 暗青灰色シルト
 15. 黒色シルト 泥炭
 16. 灰色砂
 17. 乳白色粘土 A-A'15層に対応
 18. 灰色粘質砂
 19. 灰色砂
 20. 灰色砂

※ 1～3層出土遺物は灰色砂、
4～6層出土遺物は赤褐色砂で
取り上げ

- Tr C (C-C')
1. 灰色粘土①
 2. 灰色粘土② 遺物多量包含
 3. 灰色粘質砂
 4. 暗赤褐色砂 A-A'1層に対比
 5. 灰色砂① A-A'6層に対比
 6. 暗灰色粘質砂
 7. 灰色砂②
 8. 灰色砂③ A-A'5層に類似
 9. 灰色粘土③ A-A'7層に類似
 10. 灰色砂④
 11. 灰色粘土④ A-A'8層対比
 12. 灰色砂⑤
 13. 明灰色砂⑥
 14. 暗灰色砂
 15. 暗灰色砂 14層より暗化
 16. 赤色砂
 17. 灰色砂
 18. 赤色砂

19. 黒色シルト A-A'9層に対比
20. 灰色砂礫 A-A'15層に対比
21. 青灰色シルト A-A'16層に対比
22. 灰色砂 A-A'17層に対比
23. 青灰色シルト A-A'16層に対比
24. 青灰色砂
25. 灰色砂

※ 1～3層出土遺物は灰色シル
ト、4～9層出土遺物は明灰色
砂で取り上げ



第19図 日焼 3SX104トレンチ断面図 (1/50)

- Tr D (D-D')
1. 灰色粘土① 遺物多量包含 A-A' 9層対比?
 2. 橙灰色砂①
 3. 灰色砂①
 4. 灰色砂②
 5. 明灰色砂①
 6. 橙灰色砂②
 7. 灰色砂③
 8. 暗赤灰色砂 C-C' 3・5層対比?
 9. 暗灰色粘質砂 B-B' 6層類似
 10. 明灰色砂②
 11. 暗灰色砂
 12. 黒灰色シルト①
 13. 灰色砂④
 14. 赤色砂

15. 赤灰色砂
16. 灰色砂礫①
17. 黒灰色シルト②
18. 暗灰色砂礫
19. 赤色砂礫
20. 黒色シルト 木片・流木含有
21. 明灰色砂③
22. 暗青灰色砂
23. 灰色砂礫②
24. 橙色砂
25. 黒色粘土
26. 暗灰色粘土
27. 灰色粘土②

- Tr D (E-E')
1. 灰色粘土 遺物多量包含 D-D' 1層対比
 2. 灰色砂① D-D' 3層対比
 3. 灰色砂② D-D' 3層対比
 4. 暗灰色シルト 木片含有
 5. 明灰色シルト 木片含有
 6. 明灰色砂① D-D' 4~6層対比?
 7. 暗灰色シルト②木片含有 D-D' 12層対比?
 8. 赤灰色砂 D-D' 8層対比?
 9. 赤灰色砂

10. 暗灰色シルト② D-D' 12層対比?
11. 灰色砂③
12. 暗灰色シルト② D-D' 12層対比?
13. 暗橙灰色砂
14. 明灰色砂②
15. 赤灰色砂②
16. 灰色砂礫
17. 黒灰色砂
18. 黒色粘土
19. 青灰色砂
20. 暗灰色砂

2. 遺物

本調査区内からは旧石器時代から近・現代にわたる遺物が出土している。しかし、その大半は遺構に帰属せず、旧河道（3SD001）の堆積土や旧河道形成以前の再堆積土中に包含されるものであった。地山の土質は砂質土を主体とする脆弱な地盤であり、雨水によって小流路が形成された際には土層とともに遺物が出土して新たに再堆積する状況も見られ、略測図との対応関係において遺物を土層ごとに取り上げるには限界があった。ただし、土色のみを付けて遺物取り上げを行ったものについては遺構外出土遺物としているが、おおむね旧河道の堆積土上層に対応する第1層群（16頁参照）としての位置づけが可能と思われる。また、表土層から遺構検出面までの重機掘削の際に出土した遺物は、帰属する層位と位置が不明瞭であるため表土として掲載した。

本項では、旧河道形成期以降の土器については土層ごとに記載を行ったが、木製品に関しては表土としたものも含めて旧河道の堆積土内に含まれることから器種ごとに分類して説明を加えた。また、縄文土器および石器においても、出土状況が二次的要因により混入した遺物と判断されることから器種ごとに分類して説明している。木製品・縄文土器・石器の出土位置および層位については、日焼遺跡第3次調査の「木製品計測表」「縄文土器観察表」「石器計測表」を参照されたい。

1) 土器

竪穴住居出土土器

3SI020暗褐色土（第20図）

須恵器

坏a（1） 底部がヘラ切り後、未調整の底部小片である。焼成および還元は良好である。

3SI020カマド（第20図）

須恵器

坏a（1） 底部はヘラ切り後ナデ調整される。酸化焰気味で焼成不良であり色調は灰白色を呈する。

掘立柱建物出土土器

3SB025 f 茶褐色土（第20図）

須恵器

蓋（1） 口縁部付近の小片で、端部は断面三角形状に折れ曲がる。多少焼成時の歪みが生じる。

土坑出土土器

3SK015暗褐色土（第20図）

須恵器

坏c（1～2） 高台が付くタイプの坏で、1の高台は外側に強く張り出し、角高台が外側に付く2の底部にはヘラ記号の断片が一部見られる。

3SK015灰色砂（第20図）

須恵器

蓋c（1） 天井部はヘラ切り後ハケ状工具でナデ調整され、ボタン状のつまみを有する。端部は弱く折れ曲がる。内面には重ね焼きのため変色し灰白色を呈する。

坏c（2） 体部下端に丸みを持ち、底部には低平な高台が取り付く。

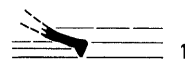
3SI020暗褐色土



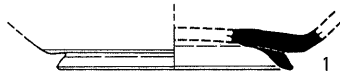
3SI020カマド



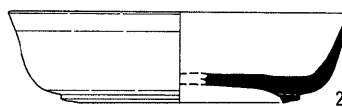
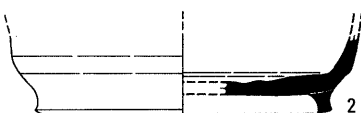
3SB025f茶褐色土



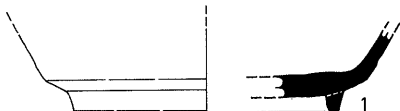
3SK015暗褐色土



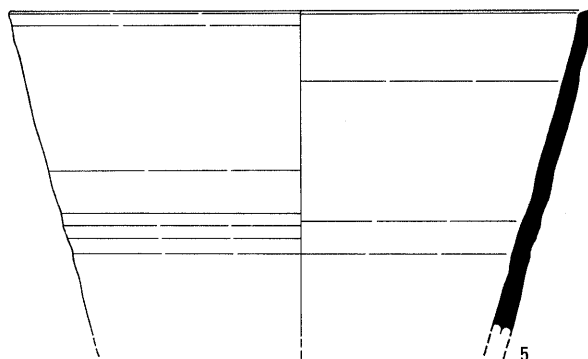
3SK015灰色砂



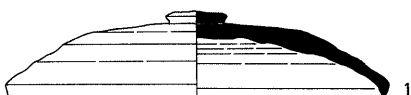
3SK129暗褐色粘土



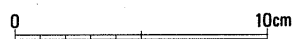
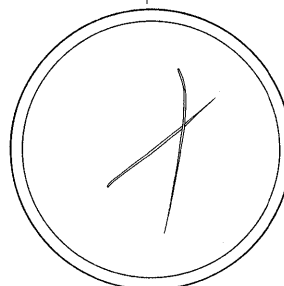
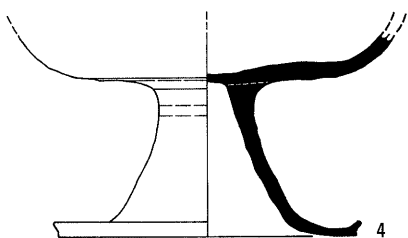
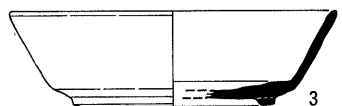
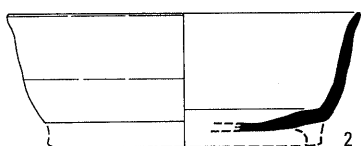
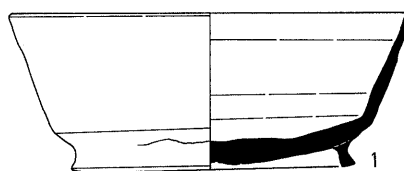
3SD010灰色土



3SD010暗茶灰色土



3SD010黒灰色土



第20図 日焼3SI020、3SB025、3SK015・129、3SD010出土遺物 (1/3)

3SK129暗灰色粘土（第20図）

須恵器

坏c（1・2） 1・2ともに高台貼り付け後に回転ナデが施される。

溝出土土器

3SD010灰色土（第20図、図版12）

須恵器

坏c（1） 短い角高台が取り付けられ、底部にはヘラ切りの軌跡が螺旋状に残る。

3SD010暗茶灰色土（第20図、図版12）

須恵器

蓋c（1） 端部が断面三角形状を呈し、天井部には中央が若干隆起する扁平なつまみが付く。

坏c（2・3） 高台の付くcタイプであり、2の高台は接合面から剥離し、口縁部は外側に若干屈曲する。3は底面のやや内側に低平な高台が付く。

高坏（4） 坏部が深手であり脚部が短いaタイプの高坏である。

鉢（5） 口縁部が外側に向かって直線的に開く鉢のbタイプである。

3SD010黒灰色土（第20図、図版12）

須恵器

坏c（1） 高台が外に踏ん張るタイプで、口縁部の一部を欠損しているがほぼ完形である。酸化焰焼成のため色調は橙色を呈する。底部には浅いヘラ記号が見られる。調査区北側の官道側溝底面から出土している。

3SD043明灰色砂（第21図）

土師器

坏（1） 丸底を呈する土師器の丸坏a。底面にはヘラ切り後に押圧による底部押し出し、ナデ調整、板状圧痕が見られる。

製塩土器（2） 尖底を呈する底部小片であり、器面は摩滅が顕著である。

3SD043暗灰色土（第21図）

土師器

小皿（1） 口径9.0cm、定形7.0cmの法量を持つ土師器小皿a。底部は回転糸切り離しされる。

3SD043黒灰色土（第21図）

瓦器

碗（1） 内面にはミガキcが施される。底部は高台貼り付け後ナデにより調整されるが、粘土片が付着した雑な作りである。

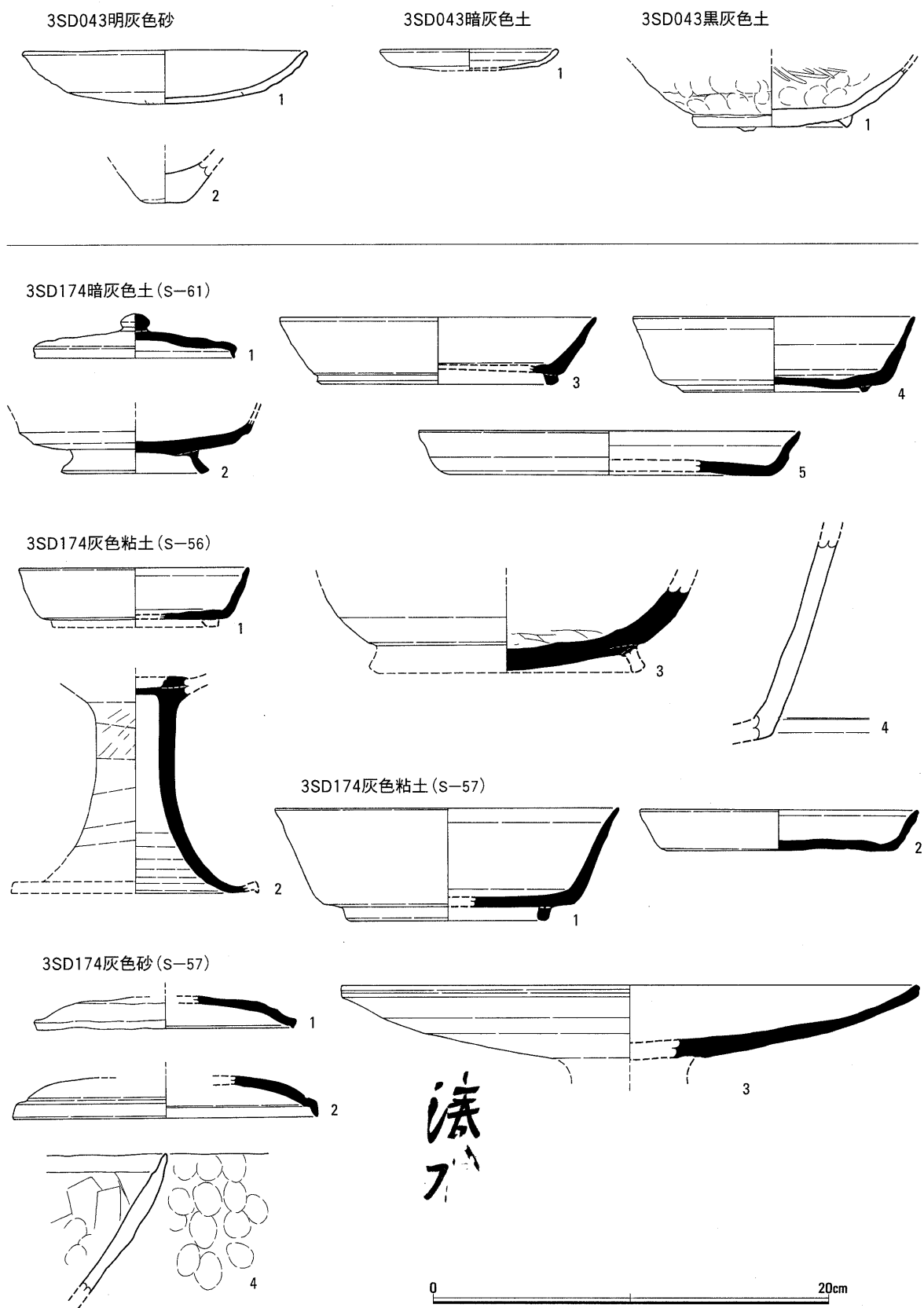
3SD174灰色土（S-61）（第21図）

須恵器

小蓋c（1） 天井部にはボタン状のつまみが付く。酸化焰気味で色調は灰白色を呈する。

坏c（2～4） 2～4は高台の付くcタイプで、いずれもヘラ切りの後に高台を貼り付けナデ調整される。2の高台は外側に強く張り出すタイプで、3は外側に寄った位置に高台が取り付けく。

皿a（5） 外側に短く開く皿aタイプであり、口縁部で僅かに外反する。



第21図 日焼3SD043・174出土遺物 (1/3)

3SD174灰色粘土 (S-56) (第21図)

須恵器

坏c (1) 1の底面では高台が剥離しており、取り付け時に施されたカキメ状の痕跡が残る。

高坏 (2) 坏部と脚部が接合面で剥離している。焼成および還元は良好で色調は青灰色を呈する。

壺 (3) 胴部がやや丸味を持つタイプである。高台が接合面から剥離している。

瓦質土器

鉢 (4) 外面が黒色処理されており、底部外面には調整時の細い沈線が認められる。須恵器鉢bの可能性もあり。

3SD174灰色粘土 (S-57)

須恵器

坏c (1) 体部は緩やかに立ち上がり、角高台が底部のやや内側に取り付けられる。

皿a (2) 底部はヘラ切り後未調整である。

3SD174灰色砂 (S-57) (第21図、図版12)

須恵器

蓋 (1・2) 端部の断面形が三角形を呈するもので、2は強く屈曲して端部がS字状を呈する。

高坏 (3) 大高坏b 2の坏部で、酸化焰焼成のため色調は橙色または黄橙色を呈する。端部はやや丸味を帯びて立ち上がり、口唇部外面に細い沈線が巡る。外面に「湊水」と考えられる墨書が見られる。

土師器

製塩土器 (4) 内外面には布目がなく、整形時の指頭痕跡が残るⅡ-bタイプである。

旧河道出土土器

3SD001赤色砂 (第22図)

須恵器

蓋c (1) 端部がS字状に強く屈曲し、天井部はナデによる調整が施され、扁平なボタン状のつまみ取り付けられる。内面にはタールの付着および、重ね焼き時の粘土片が認めらる。

3SD001暗灰色粘質砂 (第22図)

須恵器

小蓋a (1) 1トレンチ遺物番号1である (第14図参照)。天井部はヘラ切り後未調整のままである。天井部につまみを持たず端部には返りを持つタイプである。

3SD001黒色シルト (第22図)

須恵器

坏c (1) 1トレンチ遺物番号10である (第14図参照)。底部のやや外側に外へ踏ん張る高台が取り付けられる。底部外面の中央付近にヘラ記号が認められる。

3SD001灰色シルト (第22図)

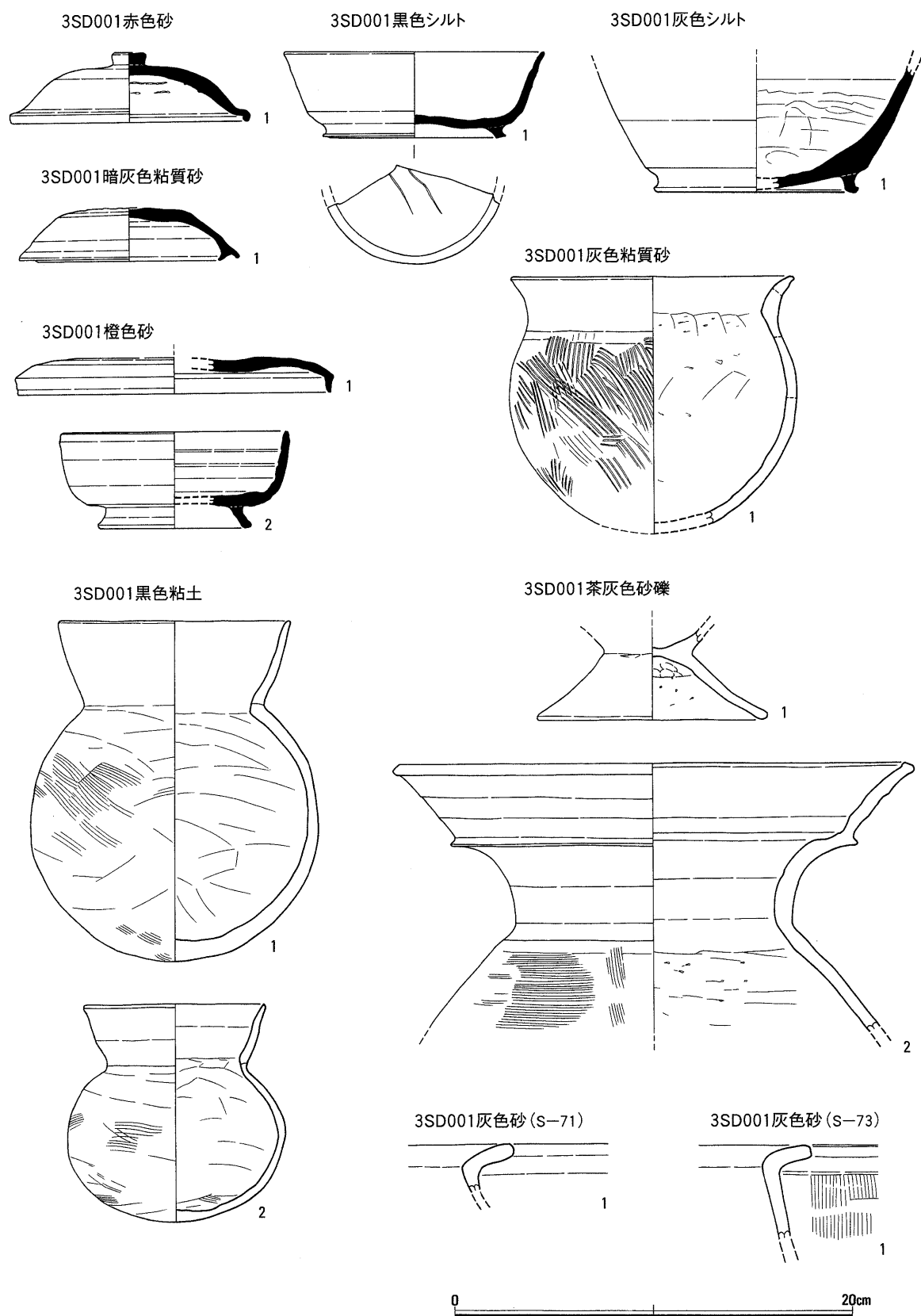
須恵器

壺 (1) 1トレンチ遺物番号11である (第14図参照)。底部には高台が取り付けられ、外面には回転ヘラケズリが施される。内面には回転によるナデの後に不定方向のナデが見られる。

3SD001橙色砂 (第22図)

須恵器

蓋 (1) 1の天井部はヘラ切り後に横方向のナデが施され、端部は強く屈曲する。



第22図 日焼3SD001出土遺物 (1/3)

坏c(2) 2は器高の割合から見るとやや高い高台が底面のやや内よりに取り付けられている。焼成時に全体的な歪みが生じている。

3SD001灰色粘質砂(第22図、図版13)

土師器

小甕(1) 底部を欠損しているが丸底を呈するものである。口縁部は緩く外反し、外面胴部はハケ目調整、内面にはケズリが施される。

3SD001黒色粘土(第22図)

土師器

壺(1・2) 丸底の壺で、頸部には括れを有して口縁部は緩やかに外反する。口縁部は横方向のナデによって整形され、胴部外面は横または斜方向のハケ目調整が施される。

3SD001茶灰色砂礫(第22図)

土師器

脚付鉢(1) 1トレンチ遺物番号8で(第14図参照)、古式土師器の脚付鉢の脚部でラッパ状に開く。脚部内外面には横方向のヘラナデが施れる。

壺(2) 1トレンチ遺物番号12で(第14図参照)、胴部内面にケズリが施される山陰系の二重口縁壺である。

3SD001灰色砂(S-71)(第22図)

弥生土器

甕(1) 頸部より強く屈曲し、断面形状が逆L字状を呈する。口縁部破片で、須玖Ⅱ式に位置付けられる。

3SD001灰色砂(S-73)(第22図)

弥生土器

甕(1) 口縁部破片で、須玖Ⅱ式に位置付けられる。外面は縦ハケ目調整される。

自然流路出土土器

3SD041黒色土(第23図)

須恵器

鉢(1) 鉄鉢形を呈する鉢aタイプである。口縁端部は整形時のつまみ上げによりS字状に屈曲する。還元は良好であり、色調は青灰色を呈する。

3SD041赤色砂(第23図)

須恵器

蓋(1) 天井部はヘラ切り後に軽いナデが施され、端部は断面三角形状を呈し歪みが生じている。

坏c(2) 低平な高台が取り付けられた後、回転によるナデが施される。

3SD041灰色粘土(第23図)

須恵器

坏(1) 底面のやや内側に低平な高台が取り付けられ、口縁端部がわずかに外反する。

製塩土器(2) 外面部分は剥離しているが、内面には布目がなく指頭痕が残るⅡ-bタイプである。

3SD131赤褐色砂(第23図、図13)

須恵器

坏(1・2) 1は高台が踏ん張る形状のc1、2は底部がヘラ切り後未調整のaタイプである。

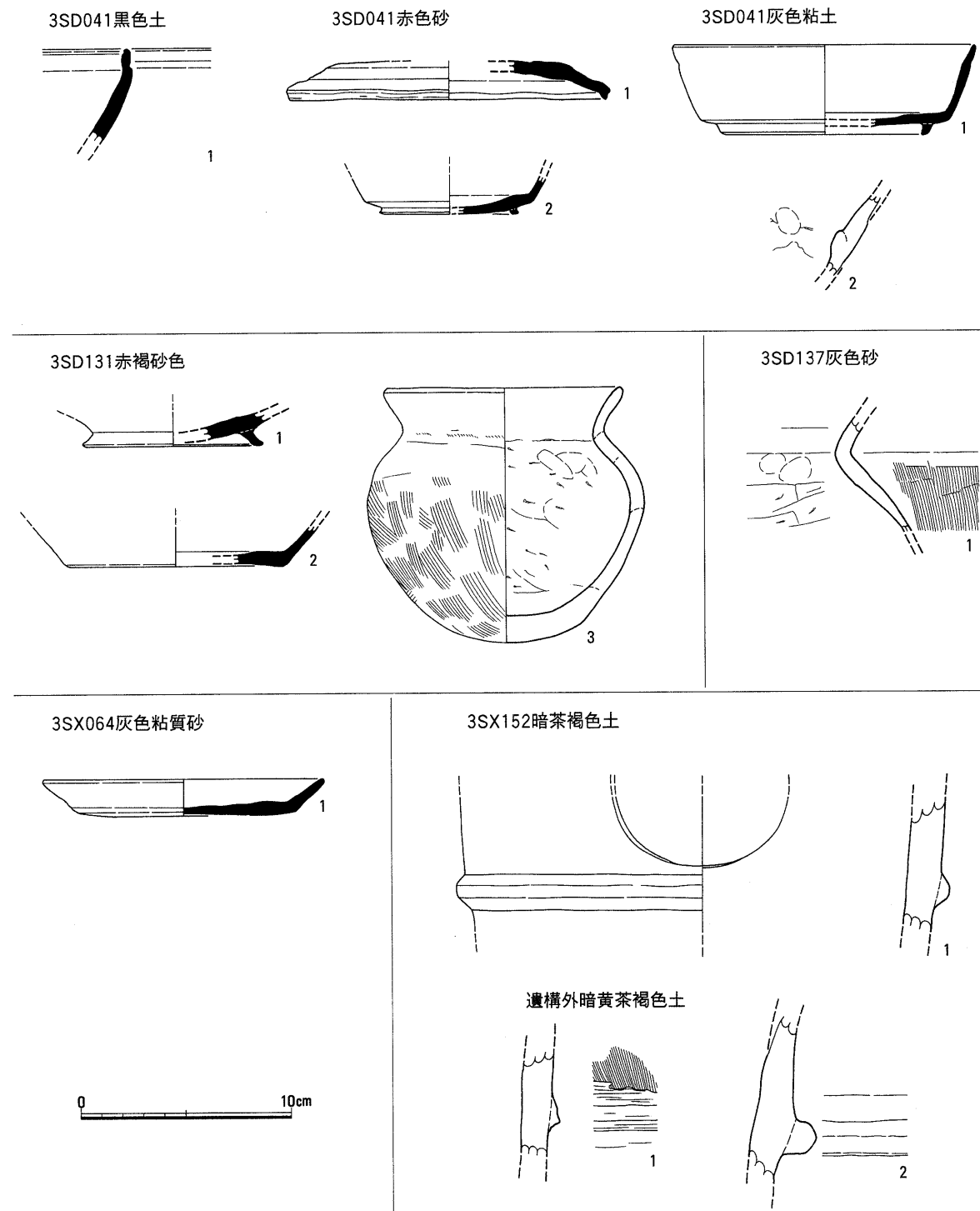
土師器

甕（3） 小型の甕で、外面胴部はハケ目調整され、上位はナデによってハケ目が消される。

3SD137灰色砂（第23図）

土師器

甕（1） 頸部から胴部上位の破片であり、外面は縦方向のハケ目調整、内面にはケズリが施される。



第23図 日焼3SD041・131・137、3SX064・152出土遺物、遺構外出土遺物1（1/3）

遺物物集中区出土遺物

3SX104灰色粘質砂（第24図）

須恵器

坏（1） 底部にはヘラ切り後に軽いナデが施される。

3SX104灰色砂（第24図、図版13）

須恵器

坏（1・2） 1は瓶蓋の可能性も考えられるが丸底の小坏としたものであり、口縁部はS字状に緩やかに外反する。2は底部の外寄りに踏ん張るタイプの高台が付き、高台の剥離部分では櫛書き状の圈線が認められる。体部にはやや歪みを生じる。

灰色シルト（第24図、図版13）

須恵器

蓋（1～4） 1～3は端部に返りを持つタイプであり、1の返りの端部と2の天井部には焼成時に付着した粘土片が付着している。3は焼き歪みが激しく、天井部にはヘラ記号が刻まれる。4はやや中央部が突出するボタン状のつまみを持ち、短く屈曲して端部が断面三角形状を呈する返りを有する。

坏c（5） 5の高台貼り付けは、ナデにより底部と密着させ、外面部ではヘラ状工具を差し込んだ回転による削りによって高台を外側へ強く屈曲させている。

3SX104赤褐色砂（第24図、図版13）

須恵器

坏c（1・2） 1は底部に高台接合のための櫛状圈線が見られる。2は口縁部が僅かに外反し、高台が外へ踏ん張るaタイプであり、焼成時に激しく歪んでいる。

3SX104明灰色砂2（第24図、図版13・14）

須恵器

蓋（1～4） 1は坏Hの蓋、3～4は口縁の端部に返りを有するタイプである。3は条痕を残す不安定なナデが施され、返りの部分には歪みを生じている。

坏（5～8） 5の底面はヘラ切りのままで中心部に粘土片が残り、やや外側には踏ん張るタイプの高台が取り付く。6～8は底部からの立ち上がりにはやや丸味を持ち、6の底部外面には3条のヘラ記号が施され、8は内面に漆が付着している。

高坏（9・10） いずれも短脚のもので、10の脚部は大きくラッパ状に開く。9は脚部の内面の下端部に浅いヘラ記号が認められる。

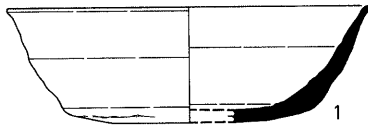
土師器

高坏（11） 器面は摩耗のために調整が不明瞭であるが、坏部外面はナデ、脚部は縦方向のヘラケズリが認められ、坏部内面にはハケ塗りの赤彩が残る。

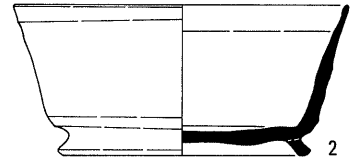
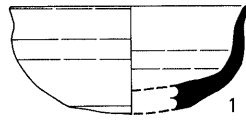
壺（12） 底部がやや丸底気味の壺であり、外面がハケ目調整、内面がヘラナデ調整される。

鉢（13） 底部には脚が付き、口縁部が緩やかに外反してコップ状を呈する。胴部外面には縦方向のハケ目調整が施され、口縁部付近はナデ調整される。底部内外面および高台接合部には指押さえまたはナデによる指頭痕が顕著に認められる。この脚付は太宰府にはなく、北筑後地域の様相をもつものである。

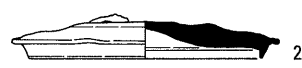
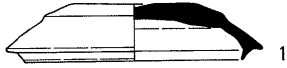
3SX104灰色粘質砂



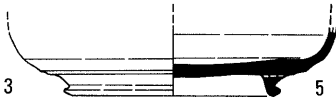
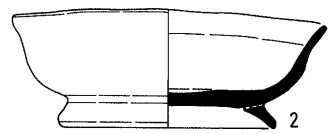
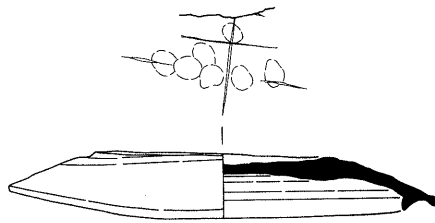
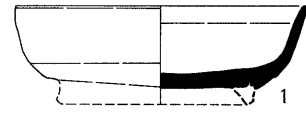
3SX104灰色砂



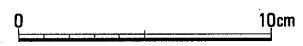
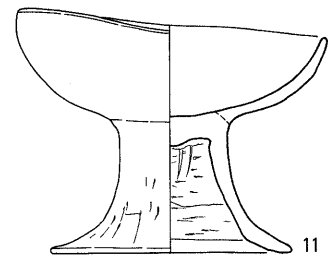
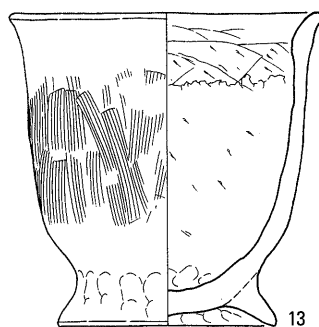
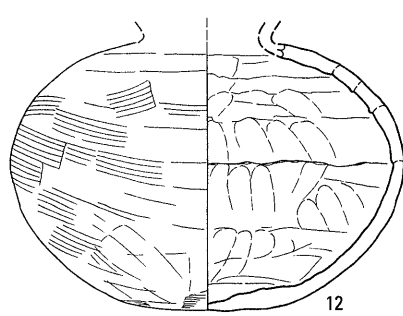
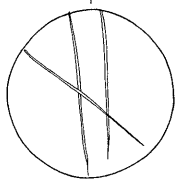
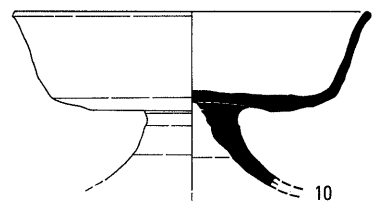
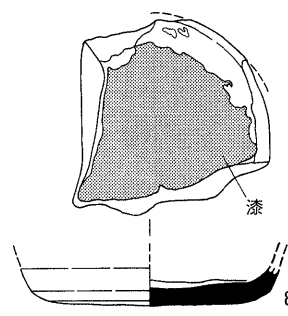
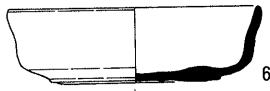
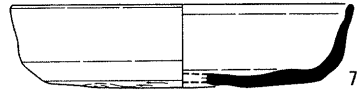
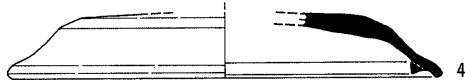
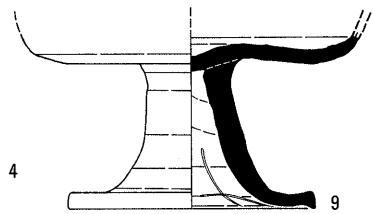
3SX104灰色シルト



3SX104赤褐色砂



3SX104明灰色砂 2



第24図 日焼3SX104出土遺物 1 (1/3)

3SX104Aセクション灰色砂礫（第25図、図版13）

土師器

甕（1） Aセクションの遺物6である（第19図参照）。底部が丸底を呈し、最大径を胴部中位に持つ。外面はハケ調整であるが、口縁部付近には横方向のナデ、体部下半にはミガキが施される。

3SX104Cセクション灰色粘土（第25図）

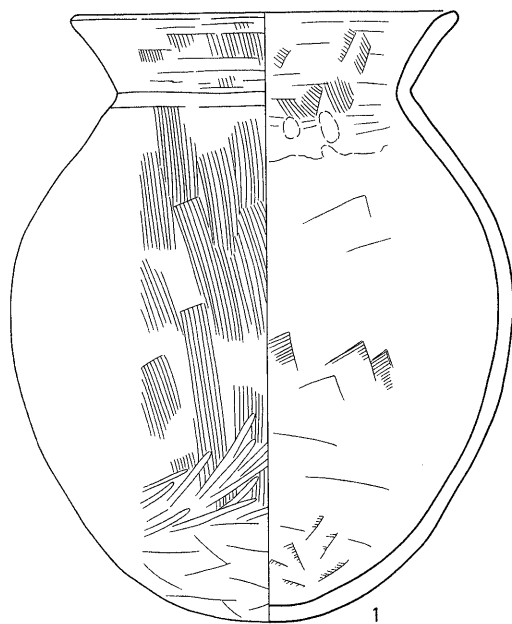
須恵器

蓋c（1） Cセクションの遺物2である（第19図参照）。天井部に擬宝珠状のつまみが付き、端部に返りを持つ。天井部のつまみ接合部にはヘラによる刻みが見られる。

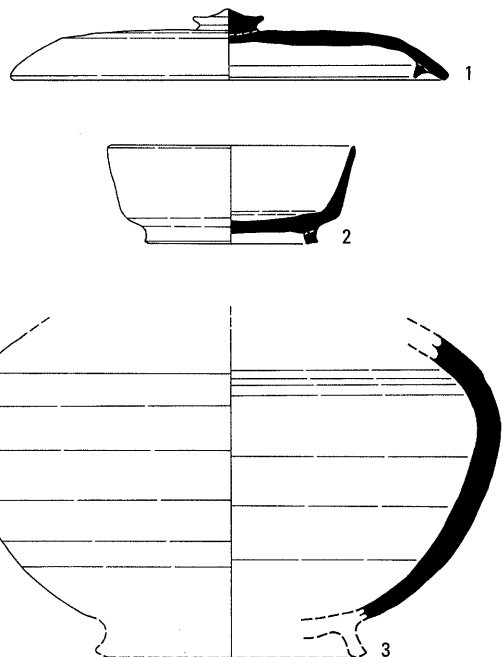
小坏c（2） Cセクションの遺物1である（第19図参照）。底部のやや外側に扁平な高台が取り付けられる。

壺（3） Cセクション遺物の2である（第19図参照）。胴部破片であるが、胴部上位に最大径を持つ短頸壺と考えられる。

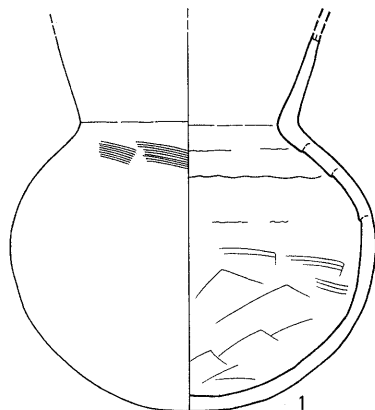
3SX104Aセクション灰色砂礫



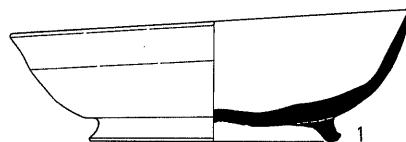
3SX104Cセクション灰色粘土



3SX104Dセクション赤色砂礫



3SX104Eセクション赤灰色砂



0 20cm

第25図 日焼3SX104出土遺物2（1/3）

3SX104D セクション赤色砂礫（第25図、図版13）

土師器

甕（1） Dセクションの遺物3である（第19図参照）。丸底の甕で外面はハケ目調整された後にナデが施される。

3SX104E セクション赤灰色砂（第25図、図版13）

須恵器

坏c（1） Eセクションの遺物3（第19図参照）。体部下半にやや丸味を持ち、外側に踏ん張る高台が取り付けられる。

その他の遺構からの出土土器

3SX064灰色粘質砂（第23図）

須恵器

皿（1） 体部から口縁にかけて外開し、底部には回転ヘラ切り後の生乾き時にのいたと考えられる板状の圧痕が観察できる。焼成不良のため色調は灰白色を呈する。

3SX152暗茶褐色土（第23図、図版14）

埴輪

円筒埴輪（1） 台形状の突帯が巡り、その上には透し孔が存在する。内外面ともに器面の摩耗が顕著なため調整は確認できない。

遺構外出土土器

暗黄茶褐色土（第23図、図版14）

埴輪

円筒埴輪（1・2） 10トレンチで奈良時代の須恵器とともに検出された。1の外面には縦方向のハケ目が施され、低い突帯を貼り付けて横方向のナデが施される。外面はやや還元化して黄灰色を呈する。2はやや高い突帯が巡り横方向へのナデが施され、器面は摩耗が顕著である。

黒暗灰色粘土（第26図）

須恵器

小坏（1） 底部内面に漆が付着している。外面はやや酸化焰焼成で、色調は明青灰色を呈する。

弥生土器

壺（2） 須玖Ⅱ式の壺の口縁部で、端部は扁平な鋤先状口縁を呈する。内外面ともに横方向のナデが施され刷毛塗りによる赤彩が残る。

黒色シルト（第26図、図版14）

須恵器

蓋（1～4） 1は端部に返りを持ち、内面には漆が付着している。2は端部の断面形が三角形状を呈し、内面には墨痕が認められることから転用硯と考えられる。3・4は天井部が扁平なもので、3はボタン状のつまみ取り付けられる。

坏a（5） 体部に丸味を持ち、口縁端部がつまみ上げの際にわずかに外反しS字状を呈する。底部はヘラ切り離し後にナデ調整される。

高坏（6・7） 6はラップ状に開く短脚の小型高坏で、7はいわゆる高盤と称される器種である。

鉢（8・9） 8は体部に丸味をもつ坏に近い形状をなし、端部が短く外反する。9はバケツ状を呈

し、直線的に立ち上がる。

土師器

坏（10） 丸杯aの底部にはヘラ切りの痕跡と板状圧痕が残る。内面にミガキcが施される。

甕（11） 土師器甕の把手部分である。

カマド（12） 置きカマドの脚部と考えられる。外面はハケ目、内面にはケズリが施される。

土製品

土錘（13・14） 13は整形時に粘土を棒状の物に巻き付けた際の粘土の継ぎ目が残る。

黒色粘土（第27図）

土師器

甕（1～2） 1の胴部外面には板目の残る平行タタキが施される。「玄界灘式」の製塩土器とされる。

2はハケ目調整され、口縁は端部にやや丸味を持つ。

弥生土器

壺（3） 3は外面にハケ目調整が施される平底の底部付近の破片である。

黒灰色粘質砂（第27図）

土師器

壺（1・2） 器厚が薄く、2の口縁部は端部で強く外反する。古墳時代前期の様相をもつ。

表土（第28図、図版14）

表土剥ぎ時に検出されたもの等の帰属する出土層位が明らかでない資料を示した。特に須恵器の甕は小片が多く、これまで提示していないことから口縁部の形態がわかるものを図化した。

須恵器

坏（1・2） 底面のやや内側では高台が剥離しており、接合部に櫛状圈線が巡る。2はやや丸底気味で底部の外面にはヘラ記号が見られる。

甕（3） 折り返し口縁を有し、頸部に接合時の粘土継ぎ目が残る。胴部内面には同心円の押さえと外面にはタタキが認められる。

龍泉窯系青磁

碗（4） 龍泉窯系青磁碗の口縁部である。内外面に雷文が描かれ、上田分類のC-2-bにあたる。

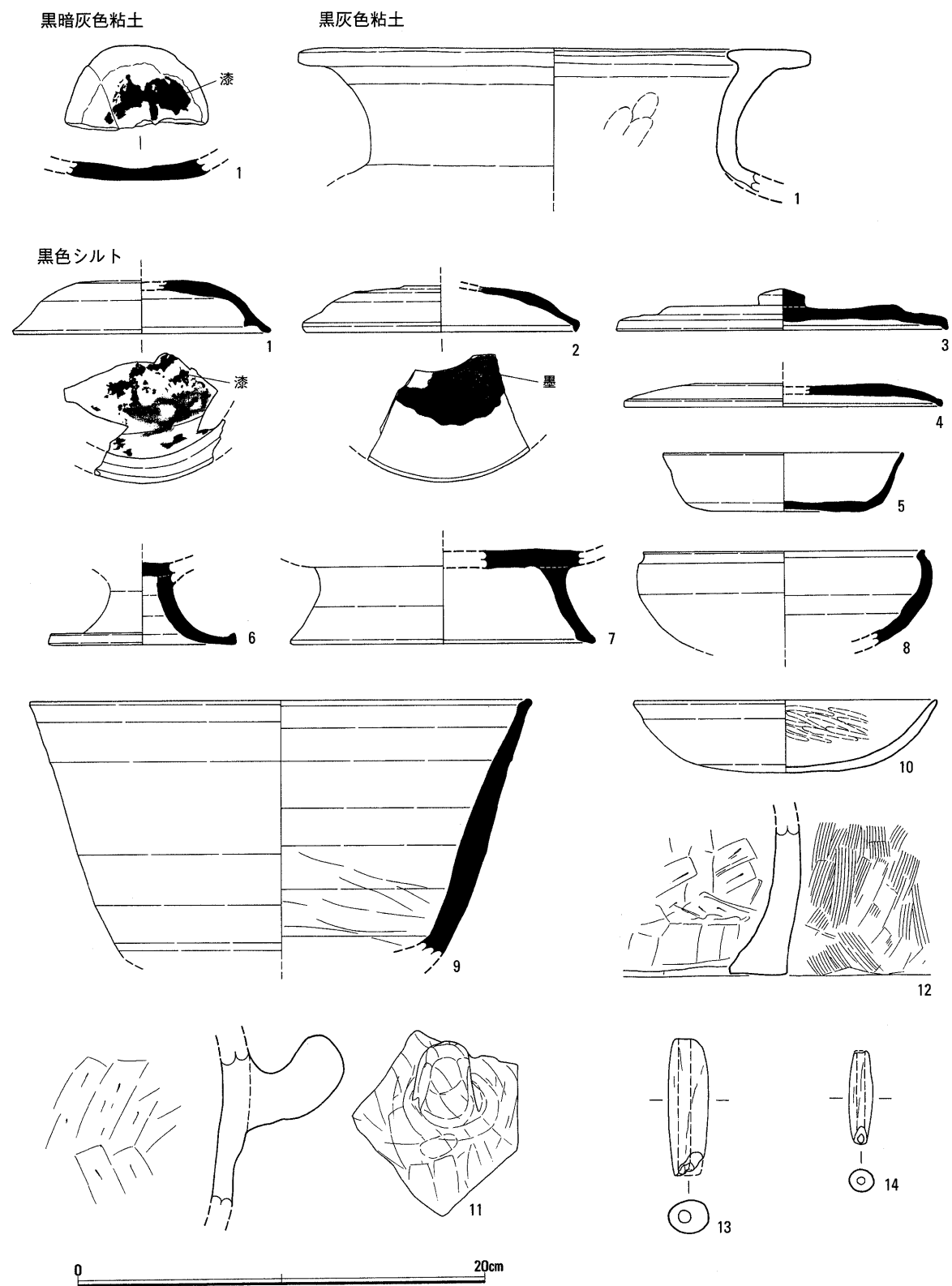
青磁

碗（5～6） 5～6は太宰府陶磁器編年では未分類の資料である。5は幅広で低い高台を持つ。胎土は灰白色を呈しやや粗い。失透気味で微細な気泡を生じ、黄緑灰色に発色する釉を器面全体に施すが、高台畳付には目跡状の釉の剥がれが観察される。6は肉厚の底部に高めの高台を削り出し、見込み外周には段が1条巡る。胎土は灰白色を呈しやや砂味を帯びる。淡緑灰色に発色する釉は濁化しており、高台内と見込み中央部を除いて施釉される。見込みの露胎部分は酸化焰焼成気味に赤く発色する。

鉢（7） 鉢と類推される口縁部破片である。器形は外反し、端部は丸く収めている。灰白色を呈する緻密な胎土に、緑灰色に発色し微細な気泡を生ずる釉を厚く施す。

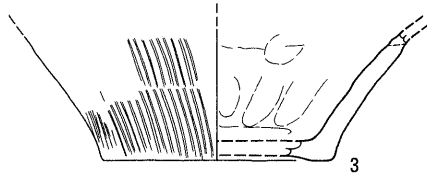
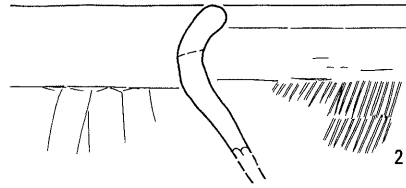
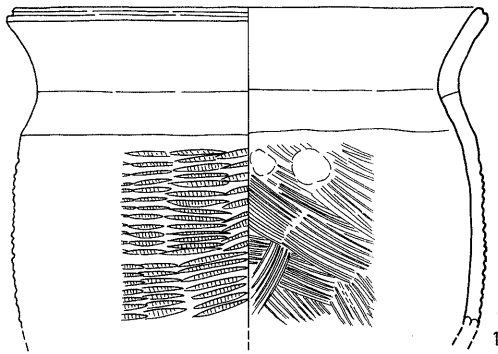
白磁

碗（8） 底部外面に判読不明な草名状の墨痕跡が見られる。Ⅲ-1類に属する。

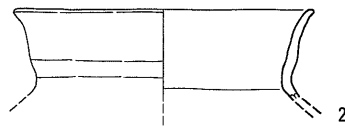
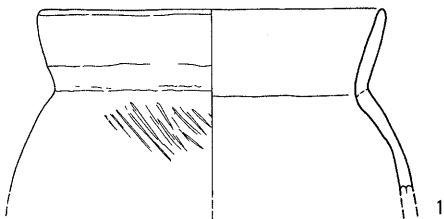


第26図 日焼3次遺構外出土遺物2 (1/3)

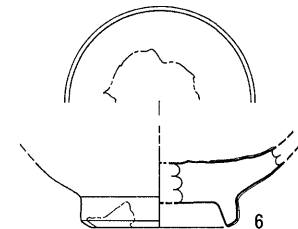
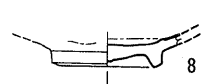
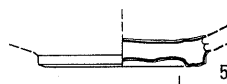
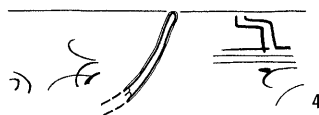
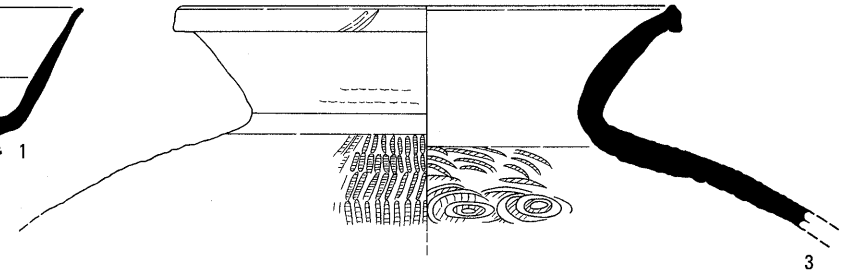
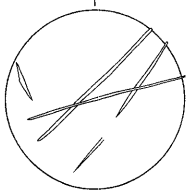
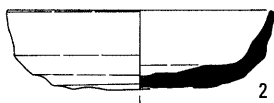
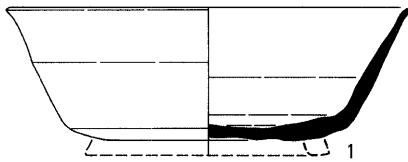
黒色粘土



黒灰色粘質砂



表土



0 10cm

第27図 日焼3次遺構外出土遺物3 (1/3)

2) 木製品 (第28図、図版15・16)

8点の木製品が出土している。出土位置および層位は「日焼遺跡第3次調査木製品計測表」を参照されたい。出土層位を表土と表記したものは表土掘削時に検出したものであり、本来はいずれも旧河道(3SD001)の覆土に帰属するものと考えられる。以下、個々について説明する。なお、材質の樹種同定結果を付編(90・91頁、図版19)として掲載した。

付札状木製品 (1)

1は下半分が破損しているため全体の規模は不明であるが、現存長16.3cm、幅6.5cm、厚さ1.1cmを測る。両側面の端部には左右非対称の切り込みを有し、断面形は緩やかな凸レンズ状を呈する。墨痕がわずかに確認されたことから赤外線照射により判読を試みたが、墨痕の遺存状況が良好ではないため文字を解読するのは不可能であった。文字としては不明瞭な墨痕であることから「木簡」の名称は用いず、その形状から「付札状木製品」とした。

火鑽臼 (2)

側面にV字状の切り込みを有し、火起こしのための窪みが2ヵ所確認される。臼内は使用による摩滅によって炭化が顕著である。断面形は直線的な削りによって面取りされた多角形または楕円形状を呈し、先端部分にはホゾ状の加工が施される。

棒状木製品 (3)

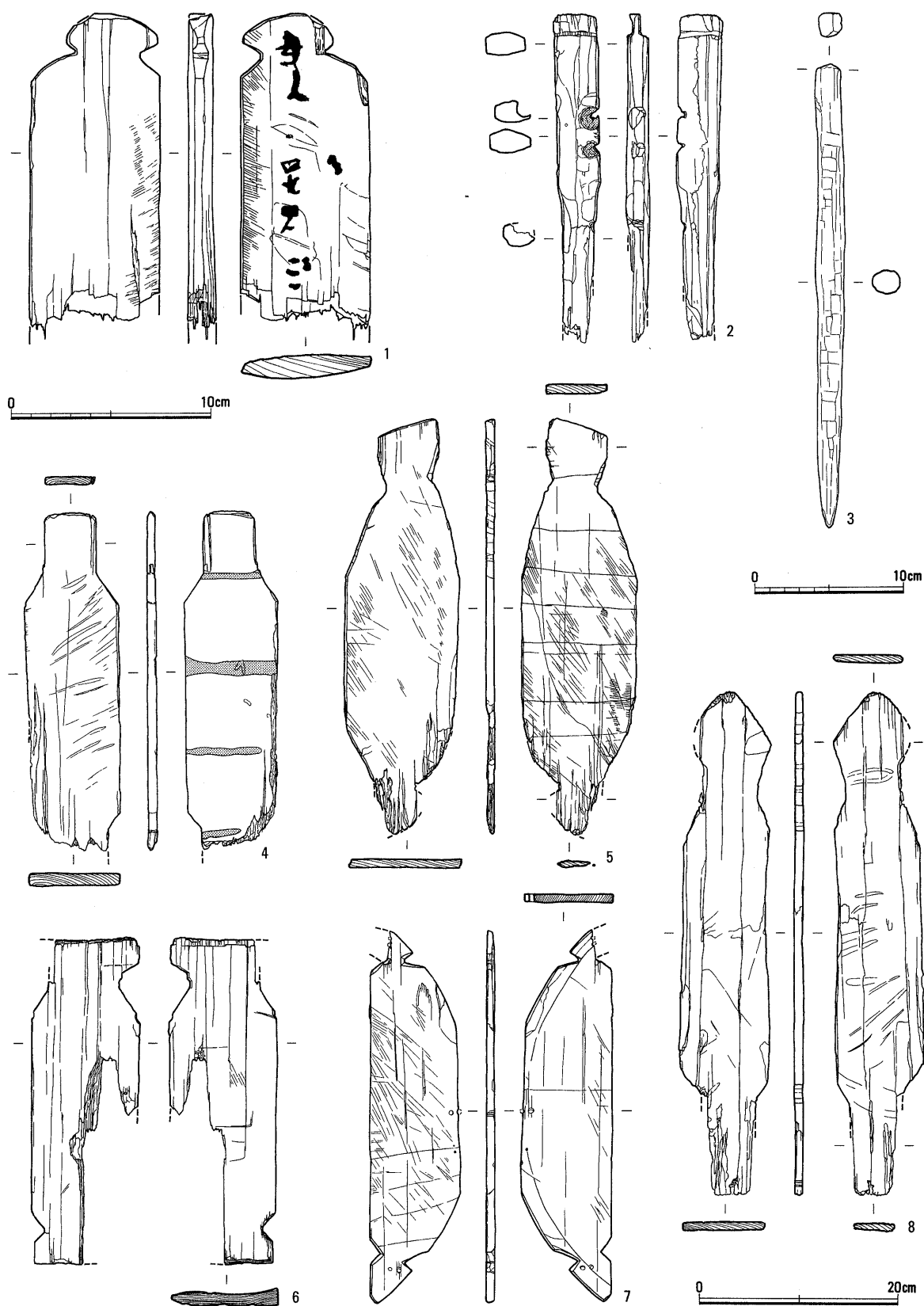
全長30.8cmの完形品で断面形はほぼ円形を呈し、全体が加工の際に燻されて黒色化している。先端部分が鋭く尖っており、摩滅・炭化の状況も顕著でないことから、発火具としてよりも刺突具としての機能が想定される。

大足 (4)

大足は広義の田下駄のうち緑肥や堆肥を水田に踏み込むために用いられたと考えられるもので、全体は縦木および2本の縦木の間に渡される棧状の横木と、全体のはほぼ中央に足を乗せるための足板との3種の部材の組み合わせによって成り立つ。4はこれらの中の足板にあたる。長方形の板材を横木のホゾ孔に挿入するため前後の端部を把手状に削出し、裏面には使用時に横木を踏みつけた際の圧痕(図中網点部分)が4ヵ所確認される。緒孔が穿たれていないが、民具例では歩行の際、縦木の端部に手縄を緊縛して使用することもある。

用途不明木製品 (5～8)

5～8は両側縁に切り込みまたは削りによる加工が施されたものである。いずれも組み合わせによって使用されたものと考えられるがその用途は不明である。5は裏面に横方向への浅い複数の線刻が認められる。5・6はその形状から田下駄の可能性があるが、緒孔が穿たれておらず用途不明とした。7は曲物の底板を転用したものであり、曲物の底板と側板をカバ紐で接合する際に穿った孔が3ヵ所の計6個確認される。8は細長な長方形の板材を素材とし、上下の両端に切り込みが施される。下端部に穿孔が2個施されている。



第28図 日焼3次出土木製品 (1-1/3、2・3-1/4、4~8-1/6)

3) 縄文土器 (第29図、図版17)

鉢 (1~14)

1・2は縄文時代早期の楕円押型文土器の小片である。2の器面の剥離が著しいため遺存状況が悪いが内外面の一部に押型文が見られる。1は北側の遺物集中区3SX169から出土したもので、ほぼ同一の地点で中型の尖頭器(第31図1)および石鏃(第32図12)が出土している。

3~6は縄文前期の曾畑式土器であり、胎土に滑石を含み、焼成は硬質な印象を受ける。外面にはやや太めの沈線を縦・横に施して幾何学的な文様構成をとり、内面には貝殻腹縁による条痕文を施す。3~5は同一個体と考えられるもので、6は側面の摩滅が顕著であった。

7~9は粗製深鉢形土器の資料で、9の胴部破片には内外面に粗い条痕文が施される。10・11は精製鉢、12~14は精製浅鉢である。10は口縁部が強く屈曲して外側に開き、口縁部の内面と外面には1条の沈線が巡る。11は口縁部下の屈曲部分以下に横方向のミガキが施される。12は直に立ち上がる浅鉢形土器で、内面に1条の沈線が巡る。13は器厚が薄く、口縁部下には浅い沈線が巡る。14は口縁部がきつく屈曲し、外側には沈線、内面には稜を作り出している。いずれも後期・晩期に属する。

4) 石器 (第30~32、図版17・18)

尖頭器 (1・2)

1は柳葉形を呈する半両面調整尖頭器である。輝石安山岩のやや大形の横長剥片を素材とし、最大幅を胴部中央に持つ。調整加工は、表面にやや大きな調整剥離と縁辺部を中心とした細かな調整が全面に施され、裏面は縁辺部を中心とした細かな調整剥離が認められるだけであり、素材となった剥片の主要剥離面を大きく残す。また、基部にも自然面を残す。2は剥片尖頭器である。輝石安山岩の縦長剥片を素材とし、その両側縁表裏に細かな調整加工が施され、自然面を残す基部の裏面からも抉り状の剥離が加えられる。1・2とも後期旧石器時代に属するものと考えられるが、1は調査区北側の3SX169遺物集中区から検出されたものであり、ほぼ同一の地点で押型文土器(第30図1)と石鏃(第32図12)が検出されていることから縄文時代早期の遺物の可能性もある。

細石刃 (3・4)

3は完形で長さ2.0cm、幅0.57cm、厚さ0.18cmを測り、両側縁に微細な剥離痕跡が認められる。4は頭部および端部を欠損する。石質は両者ともに黒曜石である。

細石刃石核 (5)

5は黒曜石製の細石刃石核である。細石刃剥離作業は図の正面に限定され、両側および裏面には自然面と側面調整が観察される。剥離作業は上設打面から施され、器体の形状は円錐状を呈する。いわゆる野岳・休場型の範疇に含まれる。

石鏃 (6~20)

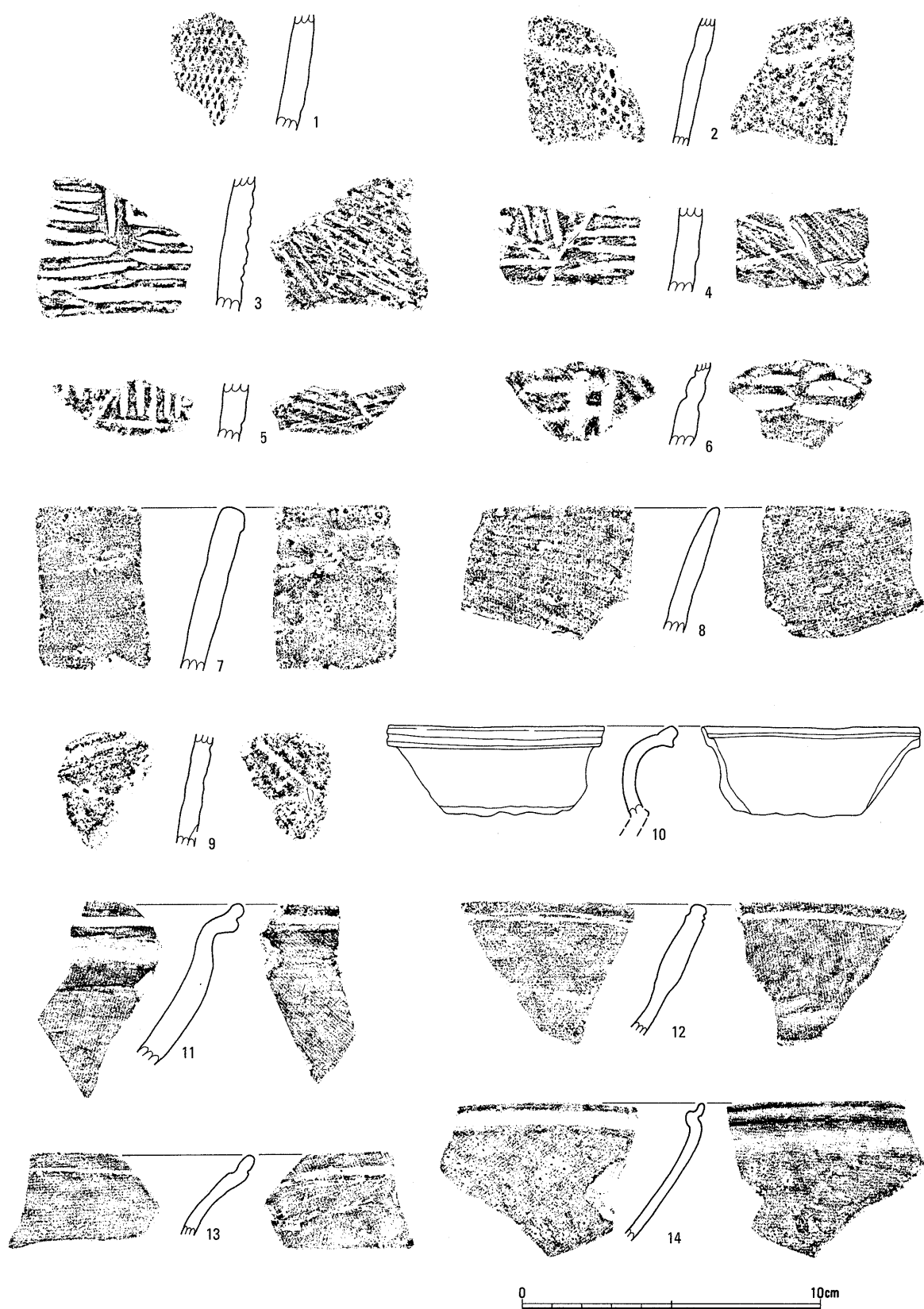
6~16は凹基無茎石鏃である。7~10は両側縁に細かな加工が施され、10は鋸歯状を呈する。11は断面が厚く、両側縁はやや反り返る。12は鋏形鏃、13は基部が大きく抉れる。18~20は基部がわずかに窪む三角鏃である。石質は6~11・15・16が黒曜石、12~14・17~20が輝石安山岩である。

使用痕のある剥片 (21)

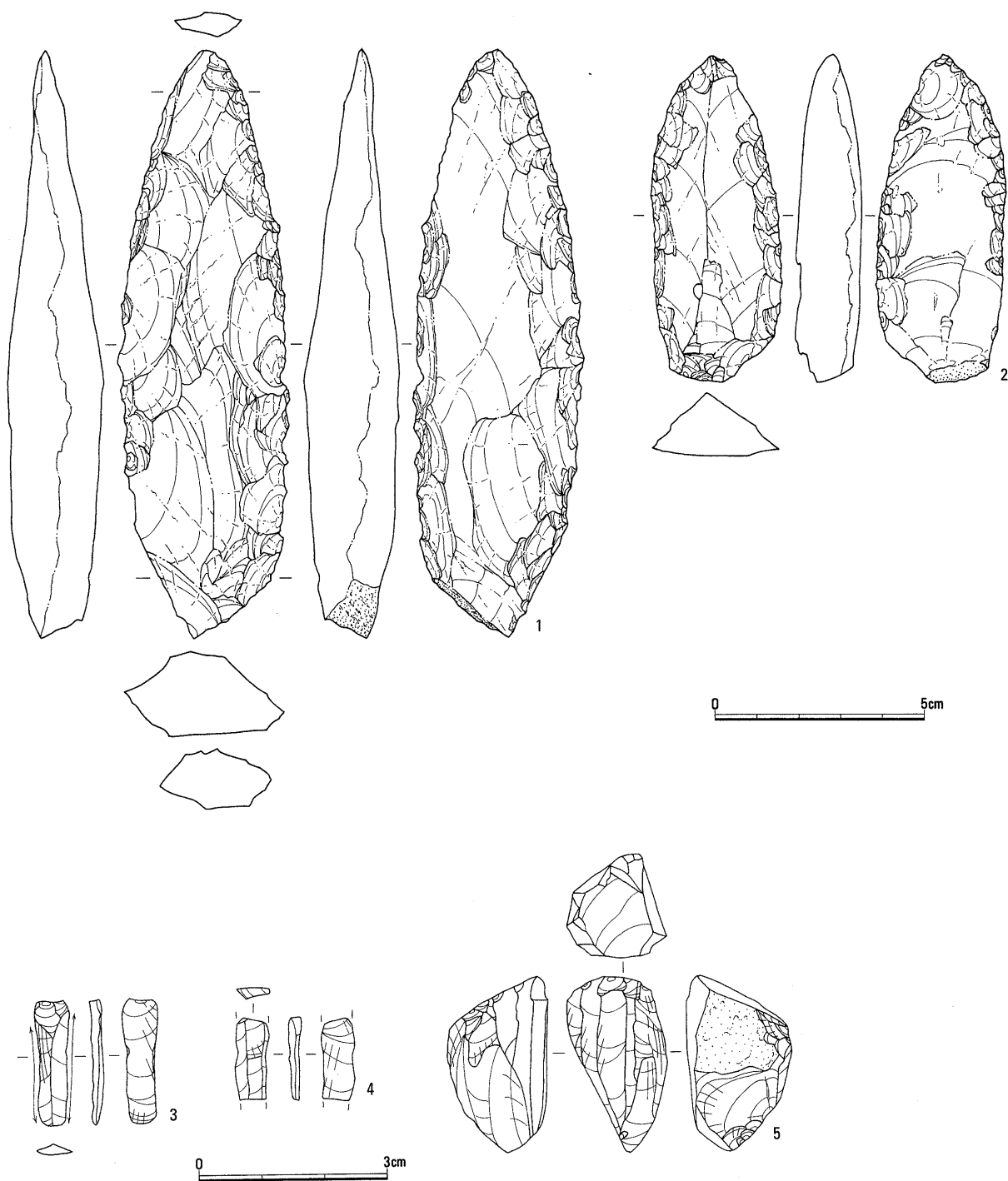
黒曜石の縦長剥片を素材とし、両側縁に刃こぼれ状の微細な剥離面が見られる。

石匙 (22)

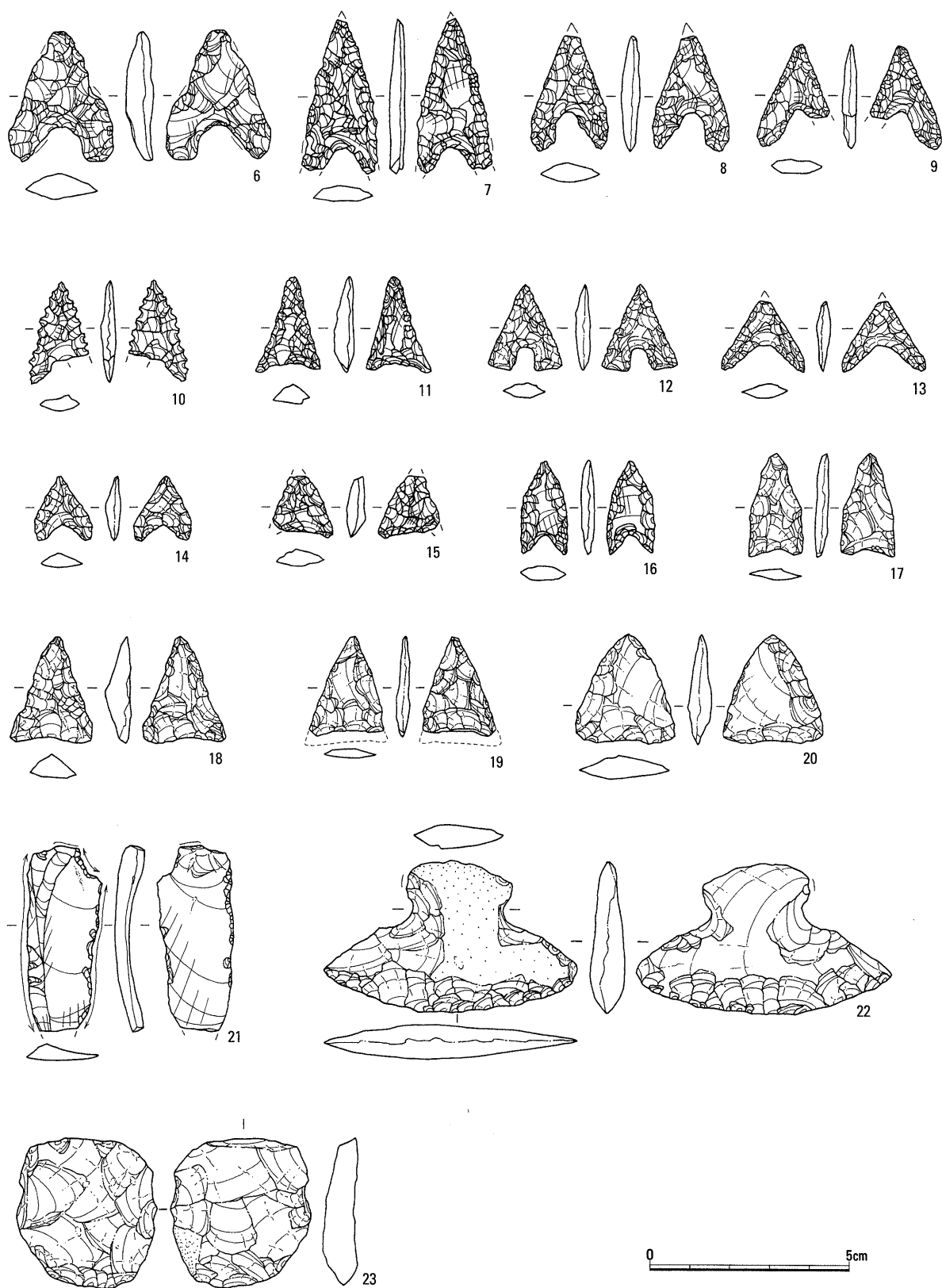
横形の石匙である。表面に自然面を残す剥片を素材とし、調整加工は「つまみ」部の作り出しと刃部を中心に施される。石質は輝石安山岩製である。



第29図 日焼3次出土縄文土器 (1/2)



第30図 日焼3次出土石器1 (1・2-1/2、3~5-1/1)



第31図 日焼3次出土石器2 (2/3)

スクレイパー (23)

輝石安山岩を素材とするもので、器体の縁辺部からの二次加工により刃部が作出される。なお、両側縁からの加工も観察されることから楔形石器の可能性も考えられる。

敲石 (24)

玄武岩製磨製石斧の欠損面を転用したものと考えられ、欠損面からの剥離面と敲打痕が観察されることから敲石に転用したものと思われる。

磨石 (25・26)

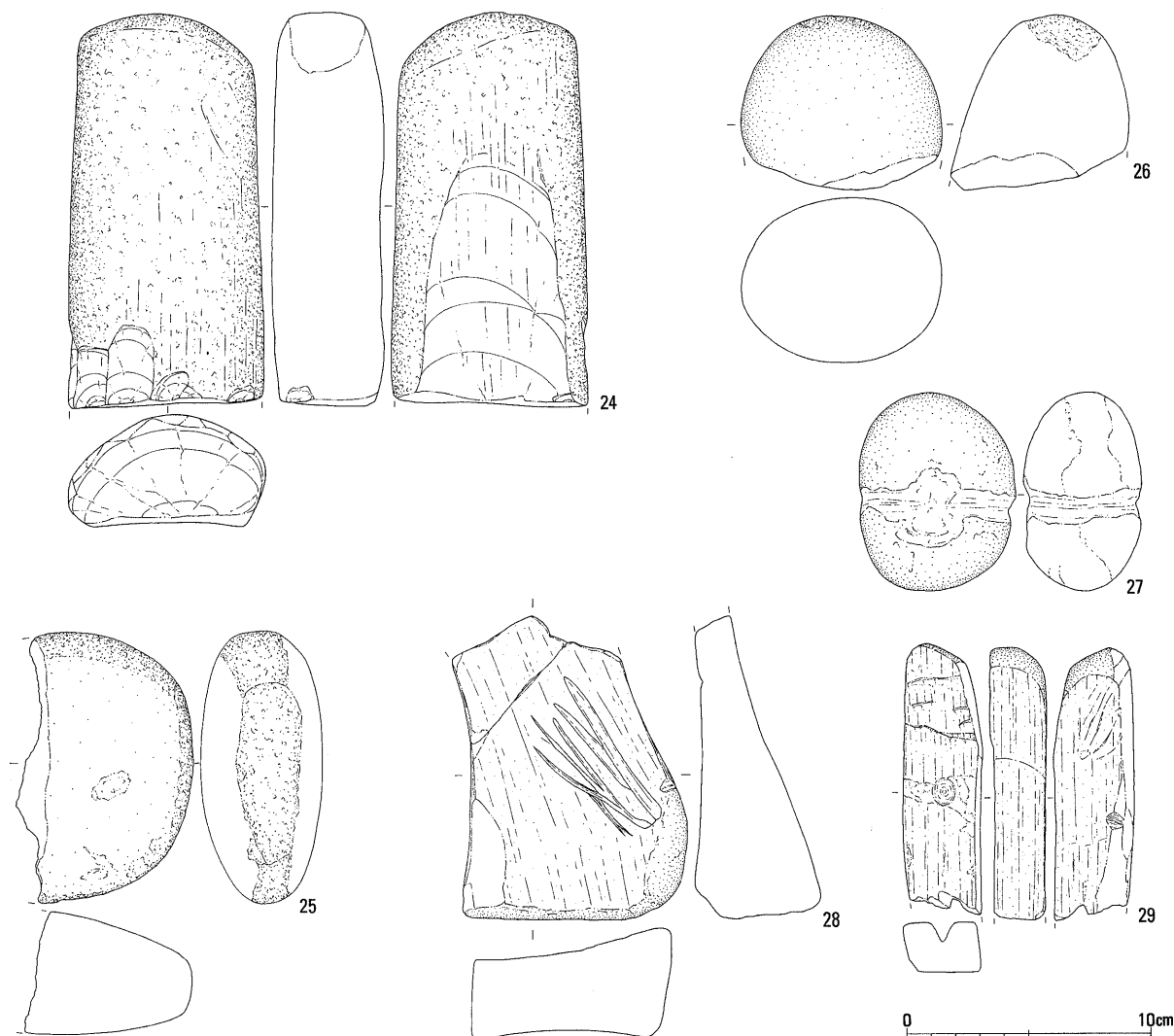
25はカンラン石製、26は花崗岩製の磨石で、部分的に敲打痕が確認される。

石錘 (27)

滑石製の石錘で、胴部中位には紐掛けのための袢りが全周する。

砥石 (28・29)

28は砂岩製で、表面に使用による数条の沈線が見られる。29は滑石製の砥石で、下半部を欠損する。作業面は4面で、正面に深さ5mmの窪みを有する。



第32図 日焼3次出土石器3 (1/3)

日焼遺跡第3次調査遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	種 別	地 区
1	3SD001	旧河道	—
2		根切り溝・現代水路	A M27他
3		攪乱	A O32
4		水田面の残土	A N32
5	3SI005	竪穴住居 20→5	A C23
6		根切り溝	A N30
7		溜まり	A N30
8		溜まり	A N29
9		根切り溝	A M29
10	3SD010	官道側溝（西側側溝）	A V21他
11		水田面の残土	A N29
12		水田面の残土	A N31
13		根切り溝	A N31他
14		S-1の覆土 暗灰色粘質土	A N31
15	3SK015	土坑	V22
16		水田面の残土	A O32
17		根切り溝	A L26他
18		溜まり	A M27
19		溜まり	A M27
20	3SI020	竪穴住居 20→5	A C24他
21		溜まり	A M26
22		溜まり	A M26
23		溜まり	A M26
24		溜まり	A K24他
25	3SB025	掘立柱建物	A A26他
26		溜まり	A N28
27		溝	A L25
28		溜まり	A N27
29		溝	A N27
31		溝	A N27他
32		溜まり	A M27
33		溜まり	A M25
34		溜まり	A M25
36		溜まり	A M25
37		溜まり	A L25
38		溜まり	A M24他
39		S-1（旧河道）堆積土 灰色粘土	A L25
41	3SD041	自然流路	A W23他
42	3SK042	土坑	A K17
43	3SD043	溝	A J18他
44		S-43覆土	A H21他
46		溝	A U22他
47		窪み	A U23
48		窪み	A U23
49		ピット	A U24
51	3SK051	土坑	A X22
52		風倒木痕	A U20
53		水田面の残土	A V23

S 番号	遺構番号	種 別	地 区
54		水田面の残土	A V 24
56		S - 174 覆土	A W 23
57		S - 174 覆土	A W 23
58		風倒木痕	A U 19
59		風倒木痕	A W 20
61		S - 174 覆土	A W 23
62		溝	A X 21
63		ピット	A S 23
64	3SX064	溜まり	A S 22
66		溝	A S 22他
67		攪乱	A E 27
68		攪乱	A D 23
69		溝	A F 21
71		S - 1 (旧河道) 堆積土	A R 25
72		S - 1 (旧河道) 堆積土	A R 27
73		S - 1 (旧河道) 堆積土	A R 28
74		S - 1 (旧河道) 堆積土	A R 27
76		S - 1 (旧河道) 堆積土	A P 27
77		S - 1 (旧河道) 堆積土	A R 26
78		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
79		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
81		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
82		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
83		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
84		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
86		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
87		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
88		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
89		S - 1 (旧河道) 堆積土	A O 26他
91		溝	A D 23他
92		溜まり	A F 21
93		ピット	A Q 19他
94		溝	A S 18他
96		溜まり	A S 18
97		溜まり	A T 18
98		ピット	A V 19
99		溝	A T 19他
101		ピット	A R 19
102		溜まり	A R 19
103		溜まり	A P 18
104		S - 1 内遺物集中区	AI ~ AN19 ~ 25
106		攪乱	A D 26他
107		木痕	A C 28他
108		溝	Y 23他
109		溜まり	V 25
111		窪み	S 26
112		溝	現代 V 24他
113		土坑	A F 20
114		攪乱	A F 20

S 番号	遺構番号	種 別	地 区
116		土坑 近現代	A F 20
117		溝	A D 21他
118		溜まり	A V 19
119	3SB119	掘立柱建物	A F 26他
121		木痕	Y 25
122		ピット	A D 28他
123		ピット	A C 23
124		ピット	A D 22
126		ピット	A F 20
127		ピット	A F 20
128	3SD128	自然流路	O 22他
129	3SK129	土坑	A A 18
131	3SD131	自然流路	A D 15他
132		窪み	R 23他
133		溝	A B 21他
134		溜まり	A C 19他
136		ピット	A A 18
137	3SD137	自然流路	A A 11
138		攪乱	A F 16他
139	3SD139	自然流路	O 24他
141	3SD141	自然流路	M 24他
142	3SD142	自然流路	P 15他
143	3SD143	自然流路	Q 15他
144		土坑 近現代	S 4他
146		窪み	M 7他
147	3SK147	土坑	A 5
148		井戸 現代	B 5
149	3SK149	土坑	B 10
151		ピット 現代	B 12他
152	3SX152	窪み	C 8
153		風倒木痕	E 12
154		井戸 現代	D 4
156		井戸 現代	B 14
157		井戸 現代	B 9
158		溝	H 4他
159		ピット群	C 19他
161		溜まり	N 15他
162		溝 近現代	O 4
163		溜まり	P 3他
164		溜まり	O 2
166		積土 近現代	O 2
167	3SK167	土坑 近世	P 2
168		ピット	B 8
169	3SX169	縄文時代遺物分布	A T 26他
171	3SX171	縄文時代遺物分布	A K 24他
172	3SX172	縄文時代遺物分布	G 7他
173	3SX173	縄文時代遺物分布	C 13他
174	3SD174	溝 (S-56・57・61を統合)	A W 23他

日焼遺跡第3次調査遺物観察表

3SI020

() は復元値、+ α は欠損、数値単位はcm

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
暗褐色土	1	須恵器	坏a1	—	0.9+ α	—	ヘラ切りママ	R-001	第20図
カマド	1	須恵器	坏a	—	2.3+ α	—		R-001	第20図

3SB025 f

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
茶褐色土	1	須恵器	蓋3	—	1.8+ α	—		R-001	第20図

3SK015

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
暗褐色土	1	須恵器	坏c1	—	1.8+ α	(9.4)		R-002	第20図
	2	須恵器	坏c2	—	3.1+ α	(11.8)		R-001	
灰色砂	1	須恵器	蓋c3	15.3	2.8	—		R-001	
	2	須恵器	坏c3	(13.6)	3.6	(9.4)		R-002	

3SK129

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
暗褐色粘土	1	須恵器	坏c2	—	3.3+ α	(10.5)		R-002	第20図
	2	須恵器	坏c3	—	1.9+ α	(10.0)		R-001	

3SD010

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
灰色土	1	須恵器	坏c2×3	—	2.5+ α	10.2		R-001	第20図
暗茶灰色土	1	須恵器	蓋c3	(14.8)	3.4	—	回転ヘラ削り後ナデ	R-002	第20図
	2	須恵器	坏c	(14.0)	4.7+ α	—		R-004	
	3	須恵器	坏c3	(13.0)	3.8	(8.0)	底部にヘラ記号?	R-003	
	4	須恵器	高坏a	—	8.1+ α	(11.8)		R-005	
	5	須恵器	鉢b	(23.2)	12.9+ α	—		R-001	
黒灰色	1	須恵器	坏c1	16.0	6.3	11.2	底面にヘラ記号	R-001	第21図

3SD043

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
明灰色砂	1	土師器	丸坏a	(14.4)	2.7	丸底	回転ヘラ切り、板状圧痕	R-002	第21図
	2	土師器	製塩土器	—	2.1+ α	2.0		R-001	
暗灰色土	1	土師器	小皿a	(9.0)	(1.1)	(7.0)	イト	R-001	第21図
黒灰色土	1	瓦器	椀	—	3.0+ α	7.5		R-001	第21図

3SD174

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
灰色土 (S-61)	1	須恵器	小蓋c3	10.2	2.2	—	ヘラ切り後ナデ	R-006	第21図
	2	須恵器	坏c1	—	3.0	7.6	ヘラ切り後ナデ	R-004	
	3	須恵器	坏c2	(16.0)	3.4	(11.8)	ヘラ切り後ナデ	R-003	

灰色土 (S-61)	4	須恵器	坏c3	(14.2)	3.8	(9.0)	ヘラ切り後ナデ	R-002	第21図
	5	須恵器	皿a	(19.2)	2.2	(16.2)	ヘラ切りママ	R-005	
灰色粘土 (S-56)	1	須恵器	坏c	(11.6)	2.6+ α	—	ヘラ切り後ナデ	R-002	第21図
	2	須恵器	高坏b2	—	10.9+ α	—		R-001	
	3	須恵器	壺a×c	—	4.2+ α	—	ヘラ切り後ナデ	R-003	
	4	瓦質土器	鉢b	—	10.0+ α	—	外面黒色処理	R-004	
灰色粘土 (S-57)	1	須恵器	坏c3	(17.4)	5.7	(10.4)	ヘラ切り後ナデ	R-001	第21図
	2	須恵器	皿a	(14.0)	2.1	(12.0)	ヘラ切りママ	R-002	
灰色砂土 (S-57)	1	須恵器	蓋3	(13.0)	2.5+ α	—	ヘラ切り後ナデ	R-002	第21図
	2	須恵器	蓋3	(15.4)	2.1+ α	—	ヘラ切り後ナデ	R-003	
	3	須恵器	高坏b2	29.2	3.6+ α	—	坏外面に墨書あり「湊水」	R-001	
	4	土師器	製塩土器Ⅱ-b	—	7.0+ α	—		R-004	

3SD001

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
赤色砂	1	須恵器	蓋c3	(12.0)	3.5	—		R-001	第22図
暗灰色粘質砂	1	須恵器	小蓋a1	11.0	2.55	—	天井部ヘラ切りママ	R-001	第22図
黒色シルト	1	須恵器	坏c2	(13.0)	4.3	(9.2)	底部外面にヘラ記号あり	R-001	第22図
灰色シルト	1	須恵器	壺b	—	6.3+ α	(10.2)	底部外面にヘラ記号あり	R-001	第22図
橙色砂	1	須恵器	蓋2	(18.0)	1.8+ α	—	天井部ヘラ切り後ナデ	R-001	第22図
	2	須恵器	坏c1	(11.5)	4.85	(7.6)	焼き歪み	R-002	
灰色粘質砂	1	土師器	小甕	14.2	12.9+ α		丸底	R-001	第22図
黒色粘土	1	土師器	丸底壺	(11.6)	17.0	—	内面ヘラナデ	R-002	第22図
	2	土師器	丸底壺	9.1	9.9	—	内面ヘラナデ	R-001	
茶灰色砂礫	1	土師器	脚付鉢	—	4.6+ α	11.5		R-001	第22図
	2	土師器	二重口縁壺	(26.0)	13.4+ α	—	山陰系	R-001	第22図
灰色砂 (S-71)	1	弥生土器	甕	—	2.4+ α	—	須玖Ⅱ式	R-001	第22図
灰色砂 (S-73)	1	弥生土器	甕	—	4.7+ α	—	須玖Ⅱ式	R-001	第22図

3SD041

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
黒色土	1	須恵器	鉢a	—	4.5+ α	—		R-001	第23図
赤色砂	1	須恵器	蓋3	(15.0)	1.8+ α	—		R-001	第23図
	2	須恵器	坏c3	—	1.9+ α	(6.6)		R-002	
灰色粘土	1	須恵器	坏c3	(14.4)	4.2	(10.0)		R-001	第23図
	2	土師器	製塩土器Ⅱ-b	—	3.8+ α	—		R-002	

3SD131

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
赤褐色砂	1	須恵器	坏c1	—	1.6+ α	(8.6)	ヘラ切り後ナデ	R-002	第23図
	2	須恵器	坏a	—	1.9+ α	(10.6)		R-003	
	3	土師器	小甕	(11.0)	12.1	—		R-001	

3SD137

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
灰色砂	1	土師器	甕	—	5.5+ α	—		R-001	第23図

3SX064

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
灰色粘質砂	1	須恵器	皿a	13.4	1.8	10.5	ヘラ切り、板状圧痕あり	R-001	第23図

3SX152

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
暗茶褐色土	1	埴輪	円筒埴輪	—	6.4+ α	—	透かし孔あり	R-001	第23図

3SX104

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
灰色粘質砂	1	須恵器	坏a	(14.4)	4.5	(8.8)	ヘラ切り後ナデ	R-001	第24図
灰色砂	1	須恵器	小坏	9.4	4.3	5.0		R-002	
	2	須恵器	坏c1	13.2	6.0	(10.2)		R-001	
灰色シルト	1	須恵器	小蓋a1	(10.2)	2.3+ α	—		R-003	第24図
	2	須恵器	小蓋a1	(10.6)	1.5+ α	—	ヘラ切り後天井部手持ちヘラ削	R-002	
	3	須恵器	蓋a1	17.0	2.5+ α	—	ヘラ切り後天井部手持ちヘラ削	R-001	
	4	須恵器	小蓋c3	12.7	1.8	—	天井部回転ヘラ削り	R-004	
	5	須恵器	坏c1	—	2.7+ α	(8.6)	ヘラ切り後ナデ	R-005	
赤褐色砂	1	須恵器	坏c	11.4	3.3	(7.4)	高台接部に櫛描き状の圈線あり	R-001	第24図
	2	須恵器	坏c1	12.4	14.7	8.4	ヘラ切り後ナデ	R-002	
明灰色砂2	1	須恵器	小蓋Ⅳ	(9.4)	2.7	—	回転ヘラ切りママ	R-005	第24図
	2	須恵器	小蓋1	11.0	1.8+ α	—		R-003	
	3	須恵器	蓋a1	12.8	2.5	—	ヘラ切り後軽いナデ	R-001	
	4	須恵器	蓋1	(17.2)	2.25+ α	—	天井部回転ヘラ削り	R-002	
	5	須恵器	小坏c1	—	2.1	8.4		R-007	
	6	須恵器	小坏a	(10.1)	3.0	6.6	底部にヘラ記号あり	R-006	
	7	須恵器	坏a	(13.6)	3.3	(11.0)	底部手持ちヘラ削り	R-004	
	8	須恵器	坏a	—	1.8+ α	(8.0)	内面に漆付着	R-010	
	9	須恵器	高坏a	—	7.0+ α	9.8	脚部内面にヘラ記号	R-009	
	10	須恵器	高坏a	(14.2)	7.0+ α	—		R-008	
	11	土師器	高坏a	12.3	9.6	9.5	脚部内面以外赤彩	R-013	
	12	土師器	壺	—	10.6+ α	—		R-011	
	13	土師器	脚付鉢	(12.4)	12.4	8.7		R-012	

灰色砂礫 (Aセクション)	1	土師器	甕	(15.4)	24.0	—		R-001	第25図
灰色粘土 (Cセクション)	1	須恵器	蓋c1	(17.4)	3.0	2.8	天井部回転ヘラ削り	R-002	第25図
	2	須恵器	小坏c2	(9.8)	3.9	7.0		R-001	
	3	須恵器	壺a	—	11.3+ α	—		R-003	
赤色砂礫 (Dセクション)	1	土師器	甕	—	15.0+ α	—		R-001	第25図
赤灰色砂 (Eセクション)	1	須恵器	坏c1	(15.8)	5.3	9.8	ヘラ切り後ナデ	R-001	第25図

遺構外

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
暗黄茶褐色土	1	埴輪	円筒埴輪	—	5.2+ α	—	10トレンチ出土	R-002	第23図
	2	埴輪	円筒埴輪	—	7.9+ α	—	10トレンチ出土	R-001	
黒暗灰色粘土	1	須恵器	坏	—	—	—	内面に漆付着	R-001	第26図
黒灰色粘土	1	弥生土器	甕	(25.0)	6.1+ α	—	須久Ⅱ式	R-001	第26図
黒色シルト	1	須恵器	蓋1	(10.0)	2.6	—	内面に漆付着	R-004	第26図
	2	須恵器	蓋3	(13.2)	2.2+ α	—	ヘラ切り後ナデ、内面に墨痕	R-005	
	3	須恵器	蓋c4	(16.0)	2.0	2.3	ヘラ切り後ナデ	R-006	
	4	須恵器	蓋4	(15.6)	1.1+ α	—	ヘラ切り後ナデ	R-003	
	5	須恵器	坏a	(11.6)	2.9	(8.2)	ヘラ切り後ナデ	R-007	
	6	須恵器	高坏	—	4.0+ α	(9.2)		R-009	
	7	須恵器	大高坏	—	4.6+ α	(9.2)		R-008	
	8	須恵器	鉢a	(13.6)	4.7+ α	—		R-002	
	9	須恵器	鉢b	(24.3)	12.0+ α	—		R-001	
	10	土師器	丸坏	14.6	3.5	—	内面ミガキc	R-012	
	11	土師器	甕	—	7.4+ α	—	把手部分	R-010	
	12	土師器	置竈	—	7.5+ α	—		R-011	
	13	土製品	土錘	6.7	1.9	17.2	縦×横、重さ (g)	R-013	
	14	土製品	土錘	4.6	1.2	5.4	縦×横、重さ (g)	R-014	
黒色粘土	1	土師器	甕	(19.0)	12.7+ α	—	外面タタキ、玄界灘式	R-003	第27図
	2	土師器	甕	—	6.1+ α	—		R-001	
	3	土師器	壺	—	5.1+ α	(9.0)		R-002	
黒灰色粘質砂	1	土師器	壺	13.8	7.4+ α	—		R-001	第27図
	2	土師器	壺	11.9	3.6+ α	—		R-002	
表土	1	須恵器	坏c1	(16.0)	5.3	—	高台欠損	R-002	第27図
	2	須恵器	坏	10.6	3.1	6.8	ヘラキリ、底部外面にヘラ記号	R-001	
	3	須恵器	甕	20.1	9.0+ α	—		R-003	
	4	青磁	椀	—	1.7+ α	—	(龍泉) C-Ⅱa (上田分類)	R-006	
	5	青磁	椀	—	1.2+ α	6.6	未分類資料	R-004	
	6	青磁	椀	—	2.2+ α	5.2	未分類資料	R-005	
	7	青磁	鉢	—	1.7+ α	—	未分類資料	R-007	
	8	白磁	椀	—	1.3+ α	4.4	Ⅲ-1、見込み部分に墨書あり	R-008	

日焼遺跡第3次調査木製品計測表

数値単位はcm

番号	地区	出土層位	器種	全長	幅	厚さ	材質	備 考	R 番号	図版
1	D11	黒色シルト	付札状木製品	16.3	6.5	1.1	スギまたは ヒノキ科	墨痕あり	R-016	第28図
2	Q9	黒色粘土	火鑽臼	21.9	3	1.6	スギ		R-005	
3	R9	黒色粘土	棒状木製品	30.8	1.9	1.8	—	完形、火鑽杵の可能性	R-006	
4	M10	黒色粘土	田下駄	33.6	9.5	0.9	ヒノキ	足板（大足）	R-004	
5	—	表土	用途不明木製品	41	11.4	0.9	ヒノキ	足板か？（輪カンジキ型）	R-013	
6	—	表土	用途不明木製品	32.5	10.9	1.7	スギ		R-014	
7	S9	黒色粘土	用途不明木製品	36.8	9	0.9	ヒノキ	曲物の底板を転用	R-007	
8	—	表土	用途不明木製品	49.7	8.9	0.9	ヒノキ		R-012	

日焼遺跡第3次調査縄文土器観察表

番号	地区	出土遺構	出土層位	器種	備 考	R 番号	図版
1	AT26	3SX169	灰色砂	鉢	押型文土器	R-001	第29図
2	AI25	3SX171	灰色砂礫	鉢	器面摩滅顕著、内外面に押型文	R-001	
3	T12	—	暗茶褐色土	鉢	前期曽畑式（滑石含む）	R-001	
4	T12	—	暗茶褐色土	鉢	前期曽畑式（滑石含む）	R-001	
5	T12	—	暗茶褐色土	鉢	前期曽畑式（滑石含む）	R-001	
6	AV19	S-98	灰色砂	鉢	前期曽畑式（滑石含む）	R-001	
7	AR25	1トレ	黒色シルト・灰色砂の互層	粗製深鉢		R-002	
8	AS19	3SD010	暗灰色土	粗製鉢		R-001	
9	C13	7トレ	明灰色粘質土	粗製鉢	胴部破片、内外面の条痕施文	R-001	
10	AW・AX2	3SD051	灰色砂	精製鉢		R-001	
11	AS19	3SD010	暗灰色土	精製鉢	外面では横方向のミガキ	R-002	
12	AR25	1トレ	黒色シルト・灰色砂の互層	精製浅鉢		R-001	
13	N17	—	緑灰色シルト	精製浅鉢		R-001	
14	E14	8トレ	暗灰色粘質土	精製浅鉢		R-001	

日焼遺跡第3次調査石器計測表

数値単位はcm

番号	地区	出土遺構	出土層位	器種	石材	全長	幅	厚さ	備 考	R 番号	図版
1	AT26	3SX169	灰色砂	尖頭器	輝石安岩山	14	4.15	2.3		R-002	第30図
2	—	—	表土	尖頭器	輝石安岩山	7.75	3.12	1.6		R-001	
3	AU21	3SD010	暗灰色土	細石刃	黒耀石	2.0	0.57	0.18		R-006	
4	C11	3SX173	暗茶褐色土	細石刃	黒耀石	1.3	0.55	0.2		R-002	
5	C6	3SX173	暗黄茶褐色粘質土	細石刃核	黒耀石	2.8	1.6	1.65	10トレンチ内	R-001	
6	—	—	表土	石鏃	黒耀石	3.55	2.65	0.7		R-001	第31図
7	C11	3SX173	暗茶褐色土	石鏃	黒耀石	3.85	1.9	0.4	やや鋸歯鏃ざみ	R-001	
8	AJ17	3SD043	黒灰色土	石鏃	黒耀石	2.85	1.9	0.5	パティナ多少進行	R-002	
9	AH22	3SX171	灰色砂	石鏃	黒耀石	2.55	1.8	0.35	鋸歯鏃	R-001	
10	AS25	3SD001	灰色砂	石鏃	黒耀石	2.55	1.5	0.4	鋸歯鏃 1トレス-72~74灰色砂	R-001	
11	B10	3SK149	暗灰色粘土	石鏃	黒耀石	2.4	1.63	0.5	横長剥片が母岩か?	R-001	
12	AT26	3SX169	灰色砂	石鏃	輝石安岩山	2.2	1.9	3.5	鋳形鏃	R-003	
13	AS19	3SD010	暗灰色土	石鏃	輝石安岩山	1.8	2.1	0.35	パティナ進行	R-005	
14	AK21	3SX104	赤褐色砂	石鏃	輝石安岩山	1.6	1.5	0.4		R-003	
15	AT19	3SD099	明灰色土	石鏃	黒耀石	1.55	1.55	0.45		R-001	
16	AL~AN 17・18	—	黒暗灰色粘土	石鏃	黒耀石	2.35	1.2	0.35	3SD001の覆土の範疇	R-003	
17	AV20・21	3SD010	暗茶灰色土	石鏃	輝石安岩山	2.6	1.38	0.3		R-003	
18	AQ18	3SD010	暗灰色土	石鏃	輝石安岩山	2.65	2.1	0.6	パティナ進行	R-004	
19	AA22	3SX171	黄色砂	石鏃	輝石安岩山	2.5	1.9	0.3		R-001	
20	AV21・22	3SD010	暗灰色土	石鏃	輝石安岩山	2.7	2.5	0.6	パティナ多少進行	R-003	
21	AT20	3SD010	暗灰色土	使用痕のある剥片	黒耀石	4.6	1.9	0.55	縦長剥片	R-006	
22	AL~AN 17・18	—	黒暗灰色粘土	石匙	輝石安岩山	4.05	6.4	0.85	3SD001の覆土の範疇	R-002	
23	AO25	3SD001	灰色砂	楔形石器	輝石安岩山	3.75	3.5	0.8	1トレ東壁遺物3	R-001	
24	AN25	3SD001	黒灰色砂	磨製石斧	玄武岩	26.05	8.05	4.05	1トレ東壁S-1遺物2、 欠損部を敲石に転用	R-001	第32図
25	AQ26	3SD001	黒色シルト	磨石	カンラン石	11.45	7.25	5.0	1トレ黒色シルト遺物3、 3SD001の範疇	R-002	
26	U21	—	黒色シルト	磨石	花崗岩	7.1	8.2	6.7	3SD001の覆土の範疇	R-002	
27	AS25	3SD001	灰色砂	石錘	滑石	8.05	6.45	4.83	1トレス-72~74灰色砂	R-015	
28	J10	—	黒色土	砥石	砂岩	12.4	9.7	5.25	目細かい、中砥か?	R-001	
29	—	—	表土	砥石	滑石	21.2	3.3	2.3	砥石分割後に提砥に転用か?	R-001	

日焼遺跡第3次調査遺物一覧表

S-1 黒色粘土

土 師 器	丸底壺
-------	-----

S-1 橙色砂・灰色シルト

須 恵 器	坏Ⅳ、小蓋3、蓋c、蓋3、甕
土 師 器	片
弥 生 土 器	壺×甕（後期）

S-1 黒灰色粘質砂

土 師 器	壺（古式土師器）
-------	----------

S-1 赤褐色砂

須 恵 器	蓋c3、小坏c3、坏c1、坏c3、皿a、甕
土 師 器	甕

S-1 灰色粘質砂

土 師 器	甕a、甕×壺（古式土師器）、甕（古式土師器）
石 製 品	石鏃（黒耀石）、剥片（安山岩）、剥片（黒耀石）
弥 生 土 器	甕（須玖Ⅰ式）、甕（須玖Ⅱ式）
縄 文 土 器	精製浅鉢（晩期）、粗製深鉢
そ の 他	弥生×土師器片

S-1 橙色砂

須 恵 器	小蓋1、蓋c1、蓋1、蓋2、坏a1、坏c1、坏c2×3、甕、大皿a×盤、高坏a、甕
石 製 品	剥片（黒耀石）

S-1 灰・赤色砂

須 恵 器	蓋1、坏c1、坏c3、高坏a、甕、大甕
瓦 類	平瓦（無文・土師質）、丸瓦（須恵質）

S-1 灰色砂

須 恵 器	小蓋1、蓋2、蓋3、小坏a1
土 師 器	片

S-1 灰色粘土

須 恵 器	蓋×皿
-------	-----

S-1 黒色シルト

須 恵 器	坏
-------	---

S-5 黄褐色砂

須 恵 器	小蓋1、坏c1
土 師 器	片
石 製 品	剥片（黒耀石）
国 産 陶 器	壺×瓶

S-8 灰色砂

須 恵 器	蓋c、蓋3、坏a2、坏c3、壺a×b、壺b×f、皿a、甕
土 師 器	大碗c、片

S-9 灰色粘土

須 恵 器	蓋c、蓋3、坏c3、甕、大甕
肥前系陶磁器	碗

S-10 灰色土

須 恵 器	蓋3、坏c3
土 師 器	甕

S-10 暗茶灰色土

須 恵 器	蓋c3、蓋3、坏c1、坏c3、高坏a、大甕、鉢b
土 師 器	蓋3、甕a
石 製 品	剥片（黒耀石・安山岩）
縄 文 土 器	粗製深鉢
土 製 品	製塩土器Ⅰ

S-10 暗灰色土

須 恵 器	蓋3、坏a、坏c1、坏c3、鉢b
土 師 器	甕（古式土師器）
石 製 品	細石刃（黒耀石）、石鏃（安山岩）、剥片（安山岩・黒耀石・チャート）、リタッチドフレーク（黒耀石）、縦長剥片（黒耀石）
縄 文 土 器	粗製浅鉢（晩期）、精製浅鉢（晩期）

S-10 黒灰色土

須 恵 器	坏c1
-------	-----

S-11 黄褐色粘土

須 恵 器	蓋c、蓋3（焼き歪み）、鉢b、鉢、甕
土 師 器	坏×小皿a（イト）

S-13 灰色粘土

須 恵 器	蓋c3（焼き歪み）、坏a2、坏c3、甕、鉢a
土 師 器	丸坏、坏a（Ⅵ期～）片
瓦 類	平瓦（縄）、丸瓦（無文）
石 製 品	剥片（緑色片岩）
そ の 他	窯グソ

S-15 暗褐色土

須 恵 器	小蓋c1、蓋3、坏a1、坏c1、坏c2、高坏a、大甕
土 師 器	甕、大碗

S-15 灰色砂

須 恵 器	蓋c3、蓋1、坏c3、甕
土 師 器	片

S-20 暗褐色土

須 恵 器	蓋3、坏a、壺×甕
土 師 器	甕

S-20 カマド

須 恵 器	坏a
土 師 器	甕

S-24 灰色粘土

須 恵 器	蓋3、坏c3、高坏b、甕・壺a×b
土 師 器	甕a
瓦 類	平瓦（土師質、瓦質）
石 製 品	剥片（安山岩）
弥 生 土 器	壺（後期）

S-24 灰色砂

須 恵 器	蓋3、坏a1、坏c3、高坏a、甕、壺b
瓦 類	丸瓦（格子）
国 産 陶 器	坏×皿
弥 生 土 器	大甕（後期）

S-25b 暗灰色砂

須 恵 器	坏Ⅳ×蓋1、甕
土 師 器	甕

S-25c 暗黄褐色砂

須 恵 器	片
土 師 器	片

S-25d 暗褐色土

須 恵 器	坏
土 師 器	片

S-25e 茶灰色土

土 師 器	片
-------	---

S-25f 茶褐色土

須 恵 器	蓋3、坏c1
土 師 器	壺片
金 属 製 品	鉄滓

S-25g 暗黄褐色砂

土 師 器	片
-------	---

S-25h 暗黄褐色砂

須 恵 器	坏
土 師 器	片

S-26 灰色砂

須 恵 器	蓋3、坏c3、甕
瓦 類	丸瓦（縄・土師質）、平瓦（二重格子・瓦質）
弥 生 土 器	大甕（後期～終末）

S-27 灰色砂

須 恵 器	蓋3、坏c3、甕
土 師 器	皿c

S-28 灰色砂

須 恵 器	坏a2、坏c3、坏、壺×埴、鉢b
-------	------------------

S-29 灰色粘土

須 恵 器	坏c3、皿a、壺b、甕
土 師 器	坏×椀

S-39 灰色粘土

須 恵 器	蓋3、坏c3、皿a、小甕
土 師 器	蓋3、皿、皿×鉢b
瓦 類	平瓦（縄）

S-41 赤色砂

須 恵 器	蓋c、蓋1、蓋3、坏c1、坏c3、壺b
土 師 器	甕、甕（古式土師器）
瓦 類	丸瓦（須恵質）

S-41 黒色土

須 恵 器	蓋c、蓋3、坏a2、坏c2、坏c3、甕、鉢a
土 師 器	片
肥前系陶磁器	染付（混入か）
金 属 製 品	滓

S-41 灰色粘土

須 恵 器	坏c3
土 師 器	甕
肥前系陶磁器	染付（混入か）
土 製 品	製塩土器（Ⅱ-b）

S-42 灰色粘土

須 恵 器	坏×皿、壺b×f
瓦 類	丸瓦（土師質）

S-43 暗灰色土

須 恵 器	蓋1、蓋3、坏Ⅳ、坏c1、坏c2、坏c3、瓶
土 師 器	小皿a（イト）、甕（古式土師器・山陰系）

S-43 明灰色砂

須 恵 器	小蓋1、小蓋3、蓋c、蓋1、蓋2、蓋3、坏ⅣB、小坏a1、坏a2、坏c1、坏c2、坏c3、坏、皿a1、高坏a、坏a1、高坏b、甕、大甕、壺f、鉢a
土 師 器	丸坏、甕a、甕
瓦 類	平瓦（縄）
石 製 品	剥片（安山岩）
土 製 品	製塩土器Ⅰ

S-43 黒灰色土

須 恵 器	蓋c、蓋2、蓋3、蓋4、坏Ⅳ、坏a1、坏c1、坏c2、坏c3、坏c1×皿a、小高坏、高坏d、大甕、小壺、長頸壺、壺b、壺e、鉢b、槽鉢、壺
土 師 器	坏a、坏c、坏c3（土師器×須恵器）、甕
瓦 器	椀
瓦 類	平瓦（瓦質・近世～）、平瓦（瓦質）
石 製 品	石鏃（黒耀石）
白 磁	椀；Ⅱ×Ⅷ

S-43 黒色土

須 恵 器	小蓋1、蓋c、蓋1、蓋×坏、坏a1、坏c1、坏c2、坏c3、坏、坏×椀、甕、皿a、壺×鉢
土 師 器	坏c3、大皿×盤
土 製 品	鞆羽口

S-43 灰色砂

須 恵 器	小蓋a1×小坏、蓋c、蓋1、坏c3、甕
土 師 器	片
瓦 類	丸瓦（縄）

S-43 サブトレ黒色泥炭～灰色砂

弥 生 土 器	甕
縄 文 土 器	片（縄文×弥生）

S-47 暗灰色粘土

須 恵 器	片
土 師 器	片

S-51 灰色砂

弥 生 土 器	甕
縄 文 土 器	鉢

S-56 灰色粘土

須 恵 器	蓋2、蓋3、蓋4、小坏a1、坏a2、椀、坏a、坏c2、坏c3、高坏a、高坏b、甕、壺f、壺
土 師 器	甕、中甕、鉢
瓦 質 土 器	鉢（混入か）
金 属 製 品	滓

S-57 灰色砂

須 恵 器	蓋3、蓋4、壺蓋、坏a、坏c3、大皿a、大高坏b（墨書）
土 師 器	甕、鉢
石 製 品	剥片（安山岩）
土 製 品	製塩土器（Ⅱ-b）

S-59 暗灰色砂 1

弥生土器	壺
縄文土器	精製浅鉢

S-61 暗灰色粘土

須恵器	蓋3、坏c3、坏×皿、高坏b、甕
土師器	甕a

S-61 灰色土

須恵器	小蓋c3、蓋a、蓋c、蓋1、蓋3、大蓋、坏a1、坏a(焼き歪み)、坏c1、坏c2、坏c3、坏c4、皿a、高坏a、坏a2、高坏b、甕、壺
土師器	甕、坏
瓦類	片
石製品	剥片(黒耀石・安山岩)
土製品	製塩土器(Ⅱ-b)

S-63 灰白色土

須恵器	坏Ⅳ、皿a
-----	-------

S-64 灰色砂

須恵器	坏c3、甕a、大甕
-----	-----------

S-64 灰色粘質砂

須恵器	坏、皿a、壺b
-----	---------

S-66 灰色粘質土

弥生土器	甕×壺
------	-----

S-68 灰白色土

須恵器	蓋1×坏a、甕
土師器	甕
肥前系陶磁器	染付赤絵丸椀、染付鉢×壺
国産陶器	坏×椀、坏×皿、椀、椀×皿
国産磁器	椀×皿、瓶、片

S-68 暗褐色土

須恵器	蓋2、蓋3、坏c3
瓦類	平瓦(近現代)
石製品	石鍬×剥片(緑泥片岩)、剥片(黒耀石)
金属製品	釘、滓
その他	ガラス片

S-69 暗灰色粘質土

須恵器	蓋3、甕
国産陶器	土瓶

S-76 黒褐色シルト

土師器	片
-----	---

S-91 黒褐色土

須恵器	蓋c、蓋1、蓋3、坏c2、坏c3、高坏、甕
土師器	蓋3、片
石製品	剥片(黒耀石)
白磁	椀；Ⅳ-1a

S-92 暗褐色砂

須恵器	蓋c、蓋1、蓋3、坏c2
土師器	坏、甕

S-93 灰色粘土

須恵器	蓋、甕
-----	-----

S-96 灰色砂

土師器	坏a(イト)、甕
青磁(未分類)	壺(1)
瓦類	平瓦
瓦質土器	鉢
国産陶器	甕

S-96 褐色砂

瓦類	平瓦(格子)
----	--------

S-97 暗灰色粘土

須恵器	坏c3、鉢a3
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、甕
瓦器	椀
瓦類	軒丸瓦(巴文)、丸瓦、平瓦(格子)
石製品	剥片(安山岩、黒耀石)
瓦質土器	鉢
弥生土器	鉢(後期)

S-97 暗灰色粘質土

土師器	小皿a(イト)、椀c、甕
瓦類	丸瓦、平瓦
石製品	剥片(黒耀石)

S-98 灰色砂

土師器	片
瓦類	平瓦(無文)
石製品	剥片(黒耀石)
縄文土器	鉢(前期・曾畑式)

S-99 明灰色土

須恵器	坏c3、蓋3
土師器	甕
龍泉窯系青磁	椀；Ⅰ(1)、Ⅲ(1)
石製品	石鍬(黒耀石)、剥片(黒耀石)
肥前系陶磁器	染付瓶

S-101 暗灰色土

土師器	片
-----	---

S-102 暗灰色砂

須恵器	蓋b、蓋1、坏c2、坏c3
土師器	椀c
龍泉窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
瓦類	丸瓦、丸瓦(格子)、平瓦(格子)、平瓦(無文)
土師質土器	播鉢
瓦質土器	鉢a
国産陶器	坏(唐津・混入か)、壺
白磁	片

S-103 暗灰色粘質土

土師器	甕
-----	---

S-104 灰色粘質砂

須恵器	蓋Ⅳ、蓋c、蓋3、小坏a1、坏a、坏a1、坏a2、坏a1×2、坏c1、坏c3、皿×鉢b、甕、壺、壺b、壺b×鉢b
土師器	大皿×盤、甕a
弥生土器	壺×甕

S-104 灰色砂

須 恵 器	蓋1、蓋3、坏a1、坏c2、坏c2×3、坏c3、小高坏、高坏a、甕、壺e、鉢a、鉢b
土 師 器	甕、甕把手
金 属 製 品	滓

S-104 灰色シルト

須 恵 器	小蓋a1 (融着)、小蓋1、蓋c、蓋1、蓋2、蓋3、大蓋1、壺蓋、小坏a1、坏a1×2、坏a、坏c1、坏c2、蓋×坏×皿、甕、中甕a、瓶、大甕
土 師 器	坏 (古墳時代・赤色顔料)、甕a、壺×甕 (古式土師器)、甕、壺 (古式土師器)
土 製 品	窯グソ

S-104 赤褐色砂

須 恵 器	蓋c、蓋1、小蓋1、小蓋3、小坏a1、小坏c1×2、坏c1 (焼き歪み)、坏c3、坏×蓋IV、大皿×鉢b、甕、中甕、長頸壺 (古墳時代)
土 師 器	甕
石 製 品	石鏃 (安山岩)
土 製 品	焼土塊、窯グソ

S-104 明灰色砂①、灰色シルト

須 恵 器	蓋c2、小坏a1、坏c3、大甕
土 師 器	甕

S-104 明灰色砂②

須 恵 器	蓋IV、小蓋a1、小蓋1、蓋a1、蓋c、蓋1、蓋1 (焼き歪み)、坏a1、坏c1×2、小高坏、高坏a、小甕、中甕、壺a×c、鉢a、鉢b、壺b、盤×鉢、盤、瓶
土 師 器	小高坏 (赤色顔料)、小甕、甕a、甕把手、甕 (脚付)、壺B (古墳前期)、壺×甕
縄 文 土 器	深鉢
土 製 品	窯グソ
そ の 他 種 子	

S-104 黒色シルト

須 恵 器	蓋2、蓋2 (焼き歪み)、小高坏a
土 師 器	甕

S-104 A-A'セクション 灰色砂 遺物1

須 恵 器	坏、甕
-------	-----

S-104 A-A'セクション 灰色粘土② 遺物2

石 製 品	剥片 (安山岩)
-------	----------

S-104 A-A'セクション 明灰色砂② 遺物3

須 恵 器	小坏a1
-------	------

S-104 A-A'セクション 明灰色砂② 遺物4

須 恵 器	高坏 (5c~)
-------	----------

S-104 A-A'セクション 黒色シルト 遺物5

土 師 器	壺×甕 (古墳前期~)
-------	-------------

S-104 A-A'セクション 灰色砂礫 遺物6

土 師 器	壺 (古墳前期~)
-------	-----------

S-104 A-A'セクション 黒色粘質砂 遺物7

土 師 器	甕×壺 (古墳前期~)
-------	-------------

S-104 A-A'セクション 明灰色砂 遺物8

縄 文 土 器	粗製深鉢
---------	------

S-104 B-B'セクション 橙灰色砂礫 遺物1

土 師 器	甕
-------	---

S-104 C-C'セクション 灰色粘土① 遺物1

須 恵 器	小坏c2×3
-------	--------

S-104 C-C'セクション 灰色粘土① 遺物2

須 恵 器	蓋c1、小甕a、壺a×c
-------	--------------

S-104 C-C'セクション 灰色粘土② 遺物3

須 恵 器	小坏a1
-------	------

土 師 器	甕 (玄界灘式)
-------	----------

S-104 C-C'セクション 灰色砂① 遺物4

須 恵 器	甕、盤×壺
-------	-------

土 師 器	片
-------	---

S-104 C-C'セクション 灰色粘土③ 遺物5

土 師 器	片
-------	---

S-104 C-C'セクション 灰色粘土③ 遺物6

土 師 器	壺
-------	---

S-104 D-D'セクション 灰色粘土① 遺物1

須 恵 器	蓋c、蓋3、甕
-------	---------

土 師 器	盤×鉢
-------	-----

S-104 D-D'セクション 暗灰色粘質砂 遺物2

土 師 器	甕×壺
-------	-----

S-104 D-D'セクション 赤色砂礫 遺物3

土 師 器	壺 (古墳前期)
-------	----------

S-104 D-D'セクション 灰色砂① 遺物4

土 師 器	甕
-------	---

S-104 D-D'セクション 灰色砂③ 遺物5

石 製 品	剥片 (安山岩)
-------	----------

S-104 E-E'セクション 赤灰色砂② 遺物1

土 師 器	小壺 (古墳前期~)
-------	------------

S-104 E-E'セクション 赤灰色砂② 遺物2

土 師 器	壺×甕 (古墳前期~)
-------	-------------

S-104 E-E'セクション 赤灰色砂① 遺物3

須 恵 器	蓋1、坏c1
-------	--------

S-104 E-E'セクション 灰色砂② 遺物4

石 製 品	剥片 (安山岩)
-------	----------

S-106 黒色土

須 恵 器	蓋a、蓋c、蓋1、坏c1、坏c3、椀、高坏a、甕
-------	--------------------------

土 師 器	甕
-------	---

龍泉窯系青磁	椀；皿
--------	-----

瓦 類	片、片 (近代~)
-----	-----------

石 製 品	剥片 (黒耀石・姫島産)
-------	--------------

土 師 質 土 器	托状
-----------	----

肥前系陶磁器	丸椀、筒茶碗、白磁小椀、菊皿、紅皿、白磁
--------	----------------------

国産陶器	蓋、坏、椀、甕、甕×土管、播鉢、土瓶
------	--------------------

そ の 他	ガラス片
-------	------

S-108 暗灰色土

須 恵 器	小蓋、蓋1、蓋3、坏、甕、壺×瓶
-------	------------------

土 師 器	甕
-------	---

S-109 暗灰色粘土

須 恵 器	蓋c、小蓋1、蓋2、蓋3、小坏a1、坏c3、甕
-------	-------------------------

土 師 器	坏a (イト)、片
-------	-----------

金 属 製 品	金属滓
---------	-----

S-111 暗灰褐色土

須 恵 器	坏c 2
石 製 品	剥片（黒耀石）
弥 生 土 器	広口壺（須玖Ⅱ式）
金 属 製 品	金属滓

S-112 黒色土

須 恵 器	蓋3、坏a、坏c 1、坏c 3、甕
土 師 器	甕
肥前系陶磁器	染付片（混入か）
瓦 質 土 器	鉢A
そ の 他	ガラス片

S-113 灰色砂

須 恵 器	坏a×蓋、坏c 3
-------	-----------

S-113 黒褐色土

須 恵 器	坏
土 師 器	甕

S-114 黒色土

須 恵 器	蓋a、蓋1、蓋3、坏c 2、坏c 3、甕
土 師 器	片
瓦 類	丸瓦（無文）、片（近代～）
肥前系陶磁器	染付碗、瓶
国 産 陶 器	碗×皿

S-116 黒褐色土

須 恵 器	蓋3、坏c 2、坏c 3、甕
瓦 類	片（近世～）
石 製 品	スクレイパー（安山岩）
肥前系陶磁器	染付碗、白磁急須
国 産 陶 器	搦鉢

S-117 黒褐色砂

須 恵 器	坏c 3、甕
石 製 品	剥片（安山岩）

S-118 黒色土

須 恵 器	片
石 製 品	焼石
瓦 質 土 器	搦鉢
肥前系陶磁器	染付蕎麦猪口
国 産 陶 器	小甕、土瓶山水、壺
白 磁	碗；Ⅱ×Ⅴ

S-122a 暗褐色土

須 恵 器	坏a×c、壺a×b×c
土 師 器	甕（古式土師器）

S-122b 暗茶色土

石 製 品	剥片（安山岩）
-------	---------

S-122c 暗褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-122c 暗茶色土

須 恵 器	蓋1、蓋2
土 師 器	甕

S-123 暗褐色土

須 恵 器	蓋3、甕
土 師 器	甕

S-124 暗褐色土

須 恵 器	坏c 3
土 師 器	甕

S-126 暗灰色粘土

須 恵 器	坏c、小高坏
土 師 器	小皿a
須恵質土器	鉢（東播系）
肥前系陶磁器	碗
国 産 陶 器	小碗、搦鉢（無釉）、瓶

S-126 暗灰色砂

須 恵 器	壺a×c
土 師 器	片

S-127 暗灰色粘土

須 恵 器	片
土 師 器	片

S-129 暗灰色粘土

須 恵 器	蓋3、坏c 3、甕、壺b
土 師 器	甕
金 属 製 品	滓

S-131 赤褐色砂

須 恵 器	蓋c、蓋1、蓋2、蓋3、小坏a 1、坏a 2、坏c 1、坏c 3、甕
土 師 器	坏c、小甕、甕、甕（古式土師器）、甕×鉢、片
石 製 品	剥片（黒耀石・安山岩）

S-132 黒色シルト

須 恵 器	蓋c、蓋1、蓋2、蓋3、蓋4、小坏c 2、坏a 1、坏a（焼き歪み）、坏a 2、坏c 1、坏c 2、坏c 3、皿a、高坏a、大高坏a、甕、大甕、壺×瓶
土 師 器	蓋c、甕
瓦 類	丸瓦（縄）、片

S-133 黒褐色土

須 恵 器	蓋3
土 師 器	片
弥 生 土 器	壺（須玖式・丹塗）

S-134 灰色砂

須 恵 器	蓋c、蓋3（焼き歪み）、坏a 2、坏c 3、甕、壺b
土 師 器	甕
瓦 類	平瓦（斜格子・須恵質）

S-136 黒色シルト

須 恵 器	蓋、甕、鉢b
土 師 器	片

S-137 灰色砂

土 師 器	甕（古墳時代）
-------	---------

S-138 暗灰色土

須 恵 器	坏c 3、蓋3、坏、甕、片
土 師 器	甕、片
国 産 陶 器	壺

S-139 白色砂

須 恵 器	小高坏
土 師 器	甕 (古式土師器)

S-142 白色砂

土 師 器	甕
-------	---

S-144 黒色土

須 恵 器	坏 c 3、甕
龍泉窯系青磁	椀；Ⅱ-b (2)
瓦 類	平瓦 (縄)
肥前系陶磁器	染付椀、丸椀、皿、椀×鉢
国 産 陶 器	甕×鉢、搦鉢
国 産 磁 器	坏×皿、椀、片

S-146 黒茶褐色土

石 製 品	剥片 (黒耀石)
-------	----------

S-149 暗灰色粘土

須 恵 器	片
土 師 器	片
石 製 品	石鏃 (黒耀石)、剥片 (黒耀石)
国 産 陶 器	片

S-149 暗青灰色粘土

瓦 類	平瓦 (無文・瓦質)
-----	------------

S-151 黒色土

須 恵 器	坏、大甕
土 師 器	片
瓦 類	平瓦 (近代～)
瓦 質 土 器	火鉢 a
国 産 陶 器	火鉢
国 産 磁 器	片
そ の 他	コンクリート片

S-152 暗茶褐色土

須 恵 器	甕、甕×壺
土 師 器	坏
埴 輪	円筒埴輪

S-158 黒褐色土

須 恵 器	坏 a 2
石 製 品	石鏃 (黒耀石)、剥片 (黒耀石)

S-159 暗灰色土

瓦 類	平瓦 (土師質)
石 製 品	すり臼

S-159 e 暗茶灰色土

須 恵 器	蓋 3
瓦 類	丸瓦 (土師質・近世～)
国 産 陶 器	小坏 (端反)
弥 生 土 器	壺
縄 文 土 器	粗製深鉢

S-161 灰色砂

須 恵 器	蓋ⅣB、坏ⅣA、坏ⅣA×ⅣB、坏 c 3、坏、甕、提瓶、壺×瓶、甕、片
土 師 器	片
瓦 類	丸瓦、片 (近世～)
石 製 品	剥片 (黒耀石)
肥前系陶磁器	染付丸椀
国 産 陶 器	坏 (唐津系砂目)
国 産 磁 器	鉢
白 磁	椀；V-1×3
弥 生 土 器	片

S-162 黒色土

肥前系陶磁器	染付片、片
国 産 陶 器	坏、小椀、鉢、片

S-163 灰色砂

須 恵 器	坏 a 2、大甕、鉢 b
土 師 器	片
瓦 質 土 器	鉢
国 産 陶 器	搦鉢、土管×甕
白 磁	椀；片 (1)

S-164 白色砂

須 恵 器	高坏 a×b、甕、片
瓦 類	平瓦 (近世～)
石 製 品	剥片 (緑色片岩)
肥前系陶磁器	染付皿 (くらわん)
国 産 陶 器	甕

S-166 黒色土

国 産 陶 器	搦鉢 (無釉)
---------	---------

S-168 暗褐色土

瓦 類	丸瓦
-----	----

S-169 灰色砂

石 製 品	尖頭器 (安山岩)、石鏃 (安山岩)、剥片 (黒耀石)、剥片 (安山岩)
縄 文 土 器	鉢 (押型文)

S-169 灰色粘土

石 製 品	剥片 (安山岩)
-------	----------

S-169 灰色砂

石 製 品	剥片 (安山岩)
-------	----------

S-169 黄色砂

石 製 品	剥片 (黒耀石)、剥片 (安山岩)
-------	-------------------

S-169 黄灰色砂

石 製 品	剥片 (黒耀石)
-------	----------

S-171 黒灰色硬質粘土

石 製 品	剥片 (黒耀石)、剥片 (安山岩)
-------	-------------------

S-171 灰色砂礫

石 製 品	剥片 (黒耀石)
縄 文 土 器	鉢 (押型文)

S-171 暗灰色砂礫

石 製 品	剥片 (黒耀石)
縄 文 土 器	片 (縄文×弥生)

S-171 黄色砂	
石 製 品	石鏃（黒耀石）、剥片（黒耀石）
S-171 灰色砂	
石 製 品	剥片（黒耀石）
S-171 褐色砂	
石 製 品	剥片（黒耀石）、剥片（安山岩）
S-172 白色砂	
石 製 品	打面再生剥片（黒耀石）
S-172 明黄褐色土	
石 製 品	石鏃（黒耀石）、剥片（黒耀石）
縄 文 土 器	片（縄文×弥生）
S-172 暗茶灰色土	
縄 文 土 器	片
S-172 暗茶褐色土	
石 製 品	石核（黒耀石）
縄 文 土 器	片

S-172 緑灰色土	
石 製 品	剥片（黒耀石）
S-172 緑灰色シルト	
石 製 品	石鏃（黒耀石）、剥片（黒耀石）
S-173 暗茶褐色土	
石 製 品	石鏃（黒耀石）、尖頭器未成品×拇指状スクレイパー、細石刃（黒耀石）、剥片×尖頭器基部（安山岩）、剥片（黒耀石）、剥片（安山岩）、チップ（黒耀石）
縄 文 土 器	片（縄文×弥生）、鉢（底部）？
S-173 暗灰色粘質土	
石 製 品	石鏃（黒耀石）、石鏃×異形石鏃（黒耀石）、剥片（黒耀石）、剥片（安山岩）、原石（黒耀石）、チップ（黒耀石）、チップ（安山岩）
縄 文 土 器	片（晩期）、片（縄文×弥生）、鉢（縄文×弥生）
S-173 明黄褐色土	
石 製 品	剥片（黒耀石）、チップ（黒耀石）

日焼遺跡第3次調査トレンチ遺物一覧表

S-1 1 トレンチ東壁 暗灰色粘質砂 遺物1	
須 恵 器	小蓋 a1
S-1 1 トレンチ東壁 黒灰色砂 遺物2	
石 製 品	磨製石斧（今山系）（玄武岩）
S-1 1 トレンチ東壁 灰色砂 遺物3	
石 製 品	剥片（安山岩）
S-1 1 トレンチ東壁 黒色シルトB 遺物4	
縄 文 土 器	粗製鉢
S-1 1 トレンチ東壁 黒色シルトA 遺物5	
石 製 品	剥片（黒耀石）
S-1 1 トレンチ東壁 灰色砂 遺物6	
石 製 品	剥片（安山岩）
S-1 1 トレンチ北壁 灰色砂A 遺物7	
縄 文 土 器	片（縄文×弥生）
S-1 1 トレンチ西壁 茶灰色砂礫 遺物8	
土 師 器	脚付鉢（古式土師器）
S-1 1 トレンチ西壁 赤色砂 遺物9	
須 恵 器	甕・壺
S-1 1 トレンチ 黒色シルト 遺物10	
須 恵 器	坏 c1
S-1 1 トレンチ 灰色シルト 遺物11	
須 恵 器	壺 b
S-1 1 トレンチ 茶灰色砂礫 遺物12	
土 師 器	壺（古式土師器Ⅲ・山陰系）
1 トレンチ 黒色シルト・灰色砂の互層	
縄 文 土 器	粗製鉢、精製鉢
1 トレンチ 灰色砂礫	
縄 文 土 器	粗製鉢、精製鉢（漆付着）

1 トレンチ 灰色粘質砂	
石 製 品	砥石（泥岩）、剥片（黒耀石）・剥片（安山岩）、剥片（ホルンフェルス）
弥 生 土 器	片（縄文×弥生）、片
1 トレンチ 灰・赤色砂、灰黒色シルト互層	
土 師 器	甕（布留式古段階）、器台×高坏（古式土師器）、甕×壺
弥 生 土 器	甕×壺
1 トレンチ 灰色砂	
縄 文 土 器	片
1 トレンチ 黒色シルト	
石 製 品	磨石（カンラン石）、剥片（黒耀石）
縄 文 土 器	精製鉢
1 トレンチ 暗緑色シルト	
縄 文 土 器	粗製鉢
1 トレンチ 暗緑色シルト	
縄 文 土 器	粗製深鉢
S-71 1 トレンチ 灰色砂	
弥 生 土 器	甕（須玖Ⅱ式）
S-73 1 トレンチ 灰色砂	
弥 生 土 器	甕（須玖Ⅱ式）
S-72~74 1 トレンチ 灰色砂	
石 製 品	石鏃（黒耀石）、石鏃（滑石・瀬戸内系）、剥片（黒耀石）・剥片（安山岩）
弥 生 土 器	片
縄 文 土 器	片（縄文×弥生）
S-78 1 トレンチ 灰色粘質砂	
須 恵 器	小蓋1、蓋1、蓋3、坏 a1、壺 c
土 師 器	小甕 a
瓦 類	平瓦（土師質）

2トレンチ 黒色シルト

須 恵 器	小蓋1、小蓋3、蓋c3、蓋1、蓋1(墨痕)、蓋2、蓋2×3、蓋3、蓋3(墨痕)、坏(端反)、小坏a1、小坏c1、坏a1、坏a、坏a2、坏c1、坏c2、坏c3、大碗、皿a、皿(端反)、小高坏、高坏a、高坏b1、高坏b、甕、小甕a、小甕、中甕、大甕、小甕、壺b、長頸壺(丸胴)、鉢、鉢a2、鉢a3、鉢b、搗鉢
土 師 器	甕把手、小甕a、甕a、片、竈
瓦 類	丸瓦(斜格子・須恵質)、平瓦(縄・須恵質)、平瓦(縄・瓦質)
石 製 品	珪化木
金 属 製 品	滓
そ の 他	種子

2トレンチ 黒灰色粘土

須 恵 器	蓋3、小坏a1、坏a1(漆附着)、坏c3、甕、鉢b
-------	---------------------------

2トレンチ 青灰色砂

須 恵 器	蓋3
-------	----

2トレンチ 暗灰色砂 遺物1

縄 文 土 器	壺×高坏
---------	------

2トレンチ 明灰色砂 遺物2

縄 文 土 器	鉢
---------	---

2トレンチ 明灰色砂 遺物3

縄 文 土 器	片
---------	---

2トレンチ 黒褐色シルト 遺物4

弥 生 土 器	壺B2
---------	-----

2トレンチ 青灰色シルト 遺物5

土 師 器	壺b2
-------	-----

2トレンチ 暗黄色砂 遺物6

石 製 品	剥片(安山岩)
-------	---------

2トレンチ 暗黄色砂 遺物7

弥 生 土 器	片(縄文×弥生)
---------	----------

2トレンチ 黒灰色砂質粘砂 遺物8

土 師 器	壺×甕(古式土師器)
-------	------------

2トレンチ 暗灰色シルト 遺物9

石 製 品	石鏃(黒耀石)
-------	---------

2トレンチ 灰色砂質粘土 遺物10

須 恵 器	坏
-------	---

土 師 器	片
-------	---

7トレンチ 暗灰色粘質土

石 製 品	剥片×核(黒耀石)、剥片(安山岩)、剥片(黒耀石)
-------	---------------------------

縄 文 土 器	片
---------	---

7トレンチ 暗灰色砂

石 製 品	剥片(安山岩)
-------	---------

7トレンチ 暗茶灰色粘質土

石 製 品	剥片(黒耀石)、チップ(黒耀石)
-------	------------------

縄 文 土 器	底部片(縄文×弥生)
---------	------------

7トレンチ 明灰色粘質土

石 製 品	剥片(黒耀石)、剥片(安山岩)
-------	-----------------

7トレンチ 灰色粘質土

石 製 品	剥片(黒耀石)、剥片(安山岩)
-------	-----------------

8トレンチ 暗灰色粘質土

石 製 品	剥片(黒耀石)、剥片(安山岩)
-------	-----------------

縄 文 土 器	鉢(晩期)、片、片(縄文×弥生)
---------	------------------

9トレンチ 暗灰色粘質土

石 製 品	剥片(黒耀石)
-------	---------

縄 文 土 器	精製浅鉢、粗製鉢、片
---------	------------

10トレンチ 暗黄茶灰色粘質土

石 製 品	細石刃石核(黒耀石)、剥片(黒耀石)、剥片(安山岩)、石斧頭部×礫
-------	-----------------------------------

10トレンチ 暗黄茶褐色土

須 恵 器	蓋4、坏c、碗×瓦器碗、甕、片
-------	-----------------

土 師 器	片
-------	---

石 製 品	剥片(安山岩)、用途不明(砂岩)
-------	------------------

埴 輪	円筒埴輪、片
-----	--------

13トレンチ 黒色土

須 恵 器	坏、甕
-------	-----

土 師 器	片
-------	---

瓦 類	片
-----	---

暗褐色土

須 恵 器	蓋3、蓋3(溶着)、坏c2、坏c3、甕、鉢b
-------	------------------------

土 師 器	片
-------	---

暗茶褐色土

須 恵 器	小蓋、蓋a、蓋c、大蓋c3、蓋c4、蓋2、蓋3、蓋4、小坏c1、小坏c2、坏、坏IV、坏a1、坏c1、坏c2、坏c3、皿、皿a、皿2、盤×皿、小高坏、高坏a、小甕、甕b
-------	--

土 師 器	坏a、甕、小甕、片
-------	-----------

瓦 類	平瓦、片
-----	------

石 製 品	石鏃(黒耀石)、石鏃(緑色片岩)、剥片(黒耀石)、剥片(安山岩)、剥片(砂岩)、チャート
-------	--

国 産 磁 器	染付碗(近現代)
---------	----------

白 磁	碗Ⅱ×Ⅴ×Ⅶ
-----	--------

埴 輪	円筒埴輪、片
-----	--------

弥 生 土 器	壺×甕
---------	-----

縄 文 土 器	鉢(前期・曾畑式)
---------	-----------

土 製 品	不明(四角柱形)
-------	----------

暗茶灰色土

須 恵 器	坏IV、甕×壺
-------	---------

土 師 器	片
-------	---

暗灰色土

須 恵 器	蓋c3、蓋3、大蓋、壺蓋、小坏c1、坏、坏a、坏a2、坏c、高坏×壺b、小蓋、壺b、片
-------	---

土 師 器	片
-------	---

石 製 品	剥片(安山岩)
-------	---------

土 製 品	用途不明
-------	------

黄灰色土

須 恵 器	蓋3、蓋、坏a×c、坏
-------	-------------

土 師 器	坏、甕、片
-------	-------

瓦 類	平瓦
-----	----

石 製 品	剥片(黒耀石)
-------	---------

肥前系陶磁器	碗
--------	---

国 産 陶 器	碗×皿、丸碗(刷毛手)
---------	-------------

黒色シルト

須 恵 器	小蓋、小蓋1、蓋、蓋c、蓋c3、壺蓋c、蓋1、蓋1(焼き釜み)、蓋2、蓋3、蓋3(焼き釜み)、蓋3(溶着)、大蓋、大蓋3、蓋4、坏IVa、小坏a1、小坏a2、小坏c1、坏a、坏a1、坏a(肥後系)、坏a2、坏c、坏c1、坏c1(焼き釜み)、坏c2、小坏c3、坏c3、碗c1、大碗c3、小皿、小皿a、皿、皿a
-------	---

須 惠 器	大皿 a×大高坏 a、小高坏、高坏、高坏 a、高坏 a×b、高坏 b、高坏 b 1、高坏 b 2、大高坏 a、甕、甕把手、大甕、大甕 a、小甕、小甕 a、甕、甕 a、甕 b、甕 a×c、甕 b×e、甕 f×d、長頸甕 (球胴)、甕×瓶、甕×鉢、鉢、鉢 a 3、鉢 b、甕
土 師 器	蓋、蓋 c、蓋 3、坏、坏 (古墳時代)、丸坏、碗 c 3、皿 a、高坏、高坏 a、小甕、甕 (突起付き?)、甕、甕把手、甕 a、小甕、片
同安窯系青磁	碗; I - 1 b (1)
瓦 類	平瓦 (土師質)、平瓦 (瓦質)、平瓦 (無文・瓦質)、平瓦 (縄)、丸瓦 (縄)、片
石 製 品	石鍬 (緑泥片岩)、石核 (黒耀石)、砥石 (砂岩)、打具 (花崗岩)、剥片 (黒耀石・安山岩)
木 製 品	付札状木製品
瓦 質 土 器	揃鉢
緑 釉 陶 器	碗 (京都系) (1)
弥 生 土 器	甕 (板付式)、甕 (須玖 I 式)、壺 (須玖式)
金 属 製 品	滓
土 製 品	土錘、円筒状

黒色土

須 惠 器	蓋 c、蓋 3 (焼き歪み)、蓋 3、蓋 c 4、坏 a、坏 c 1、坏 c 3、碗、甕
土 師 器	甕、片
瓦 類	平瓦 (縄)
石 製 品	剥片 (黒耀石)、砥石 (砂岩)
肥前系陶磁器	坏、碗、染付鉢×皿
国 産 陶 器	碗 (鉄絵)、甕×土管、半胴甕、瓶
中 国 陶 器	片
埴 輪	片

黒暗灰色粘土

須 惠 器	甕
土 師 器	坏×皿、甕
石 製 品	石鍬 (黒耀石)、石鍬 (安山岩)、石匙 (安山岩)、剥片 (安山岩)
弥 生 土 器	壺 (須玖 II 式)

黒灰色粘土

須 惠 器	小蓋 1、蓋 c、蓋 3、蓋 4、小坏 c 2、坏 a 2、坏 c 2、坏 c 3、坏×皿 a、高坏、甕 b、大甕、壺 a×b、鉢
土 師 器	甕×甕、片
瓦 類	平瓦 (瓦質)

黒灰色土

須 惠 器	蓋
土 師 器	片

黒色粘土

土 師 器	坏 (古墳時代)、甕 (外面叩き)
木 製 品	大足、火鑽臼、棒状木製品 (火鑽杵?)、不明木製品
弥 生 土 器	甕 (須玖式)、高坏 (後期)

黒褐色土

須 惠 器	蓋、蓋 3、小坏 a、坏、坏 a、坏 a 2、坏 3、甕
土 師 器	甕 a、片

灰色シルト

土 師 器	高坏、甕 (古墳時代)
-------	-------------

灰色砂

縄 文 土 器	鉢
---------	---

灰色土

須 惠 器	坏 c 2、坏 c 3、甕、壺×瓶
土 師 器	片
龍泉窯系青磁	碗; II - a (1)
瓦 類	平瓦 (格子)
石 製 品	磨石 (花崗岩)、剥片 (黒耀石)、剥片 (安山岩)
肥前系陶磁器	染付丸碗 (1)
国 産 陶 器	碗×坏 (端反)、碗 (唐津・雑釉)
埴 輪	円筒埴輪、片

灰色粘土

須 惠 器	坏 c 1、坏 c 2、甕×壺
土 師 器	坏 (古墳時代)、甕
石 製 品	用途不明 (花崗岩)

赤褐色砂

須 惠 器	蓋 2、蓋 3、坏 IV B、坏 a、坏 c 1、坏 c 2、高坏、甕
土 師 器	高坏 (古墳時代)、坏 a、甕

緑灰色シルト

縄 文 土 器	精製浅鉢
---------	------

表土

須 惠 器	蓋 IV b、小蓋 c、小蓋 1、小蓋 3、小蓋 c 1、蓋 a 1、蓋 c、蓋 c (焼き歪み)、蓋 c 1、蓋 c 2、蓋 c 3、蓋 c 4、蓋 1、蓋 3、蓋 4、蓋蓋、大蓋、大蓋 1、大蓋 c 2、大蓋 c 3、小坏 c 2、小坏 c 3、坏 III、坏 IV、坏 a、坏 c (産地不明)、坏 a、坏 a 2、坏 c、坏 c 1、坏 c 2、坏 c 3、坏×鉢 (肥前系)、碗 a、小皿 a、皿、皿 a、大皿、大皿 c、盤、盤×大皿、小高坏、高坏、高坏 a、高坏 b、甕、甕 b、小甕、中甕、大甕、大甕 b、甕把手、小甕 a、甕、甕 b、壺 c、壺 (6 c ~)、壺 (華瓶型)、長頸壺 (6 c ~)、壺×鉢、甕×壺、小鉢、鉢、鉢 a、鉢×壺 b、壺×瓶、鉢 b、瓶
土 師 器	坏 (古墳時代坏)、坏 a×d、碗 c、小皿、小皿 a (イト)、小皿 c、盤×大皿、高坏 (古墳時代前期~)、高坏 b 2、高坏、小甕、甕、甕 a、甕把手、壺 b (古式土師器)
龍泉窯系青磁	碗; 上田分類 C - 2 類 (1)、I (1)、II b (1)、III (1)
同安窯系青磁	碗; II (1)
青磁 (未分類)	碗 (2)、鉢 (1)
瓦 類	丸瓦 (無文・須恵質)、丸瓦 (縄)、丸瓦 (格子)、平瓦 (無文・土師質)、平瓦 (縄・土師質)、平瓦 (縄・須恵質)、平瓦 (斜格子・土師質)、平瓦 (近世~)、平瓦 (縄)
石 製 品	尖頭器 (安山岩)、石鍬 (黒耀石)、石鍬 (緑泥片岩)、磨石 (砂岩)、砥石 (緑色片岩)、剥片 (黒耀石・安山岩)
木 製 品	田下駄、用途不明木製品
土 師 質 土 器	鍋×焙烙
須 惠 質 土 器	鉢 (東播系)
瓦 質 土 器	鉢
肥前系陶磁器	碗、碗×皿、染付丸碗、染付中皿、蕎麦猪口
国 産 陶 器	坏 (唐津)、碗、丸碗、甕、壺、壺×鉢、鉢、揃鉢、植木鉢、甕×鉢
国 産 磁 器	片
白 磁	碗; II×V×Ⅷ、IV、V - b×c、片 皿; III - 1 (底部外面に墨痕)、Ⅸ 壺; 水注 (Ⅱ系)
染 付 (輸入)	明染付丸碗
埴 輪	円筒埴輪
縄 文 土 器	浅鉢 (晩期)、鉢 (粗製)
金 属 製 品	滓
そ の 他	窯グソ

第Ⅳ章 前田遺跡第12次調査

第1節 調査の概要

前田遺跡第12次調査区の位置と面積は、前田遺跡第5・7次調査区と日焼遺跡第2・3・6次調査区に挟まれた道路部分の398.76㎡である。調査の対象となった道路部分の形状は、幅3～4m、全長約170mを測る。

今回の調査では、これまで前田・日焼両遺跡で検出されてきた古代官道、さらに前田遺跡第7次調査で確認されている円墳周溝の延長部分が検出されることが期待された。

調査は、重機によって道路面のアスファルトを剥がした後、表土の掘削を進めた。その結果、遺物包含層は存在せず、表土直下が地山面で遺構検出面でもあった。地山の状況は、調査区中央付近西側に位置する丸山神社以南が粘質系土壌を主体とする第四紀層由来の再堆積土で、それより以北は砂・粘土を主体とする沖積土壌である。

検出された遺構は、ほぼ全域において調査区の西側に面して構築されていたコンクリート側溝の掘り方（前12SX002）と、それに伴って整備されたと推定される道路部分の盛土、また北側部分では側溝構築以前に存在したと考えられる水路（前12SD001）およびそれを覆う道路（前12SF005）、そして日焼第3次調査等で調査された旧河川（日12SD010）がある。調査当初に期待された古代官道とその側溝（前5SF200・前5SD001・前5SD100）、円墳の外装施設である周溝（前7SD095）の延長部分は、前12SX002・前12SF005によって破壊され確認されなかった。

コンクリート側溝の掘り方（前12SX002）は南側の一部分を調査することのみにとどめ、北端部では水道管の本管が埋設されていることから安全面に配慮して、3本のトレンチの土層観察から構築状況の変遷を把握した。

縄文時代から近代にわたる遺物が出土しているが、それらより判断すると12SD010以外はすべて近現代の所産である。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 遺 構

12SX002（第34～36図、図版20～22）

本址は調査区西側に面して構築されたコンクリート側溝の掘り方である。平面プラン確認の際、AH区以南の地山は粘質系土壌が入り乱れた複雑な状況であり、調査にあたっては地山の堆積状況の把握も含めてAH5区付近での掘り下げを行い、土層断面の観察を行った。覆土は暗灰色砂→暗灰色粘土→暗灰色土の順に堆積する。

調査当初は暗灰色土・暗灰色粘土層出土遺物中に現代の遺物が含まれないことから別遺構の可能性を考慮していたが、地固めを目的としてコンクリート直下に敷かれた人頭大の礫を含む土層との連続性が認められたことから同一の構築物と判断した。

地山は薄い粘土層の間に砂層が挟まれる状況が観察され、西側の丸山神社側から流れ込んだ二次堆積土と考えられる。

古代から近世の遺物が出土しており、また、その要因として周辺域における当該期の遺構の存在が予想される。

12SD001（第34～36図、図版21・22）

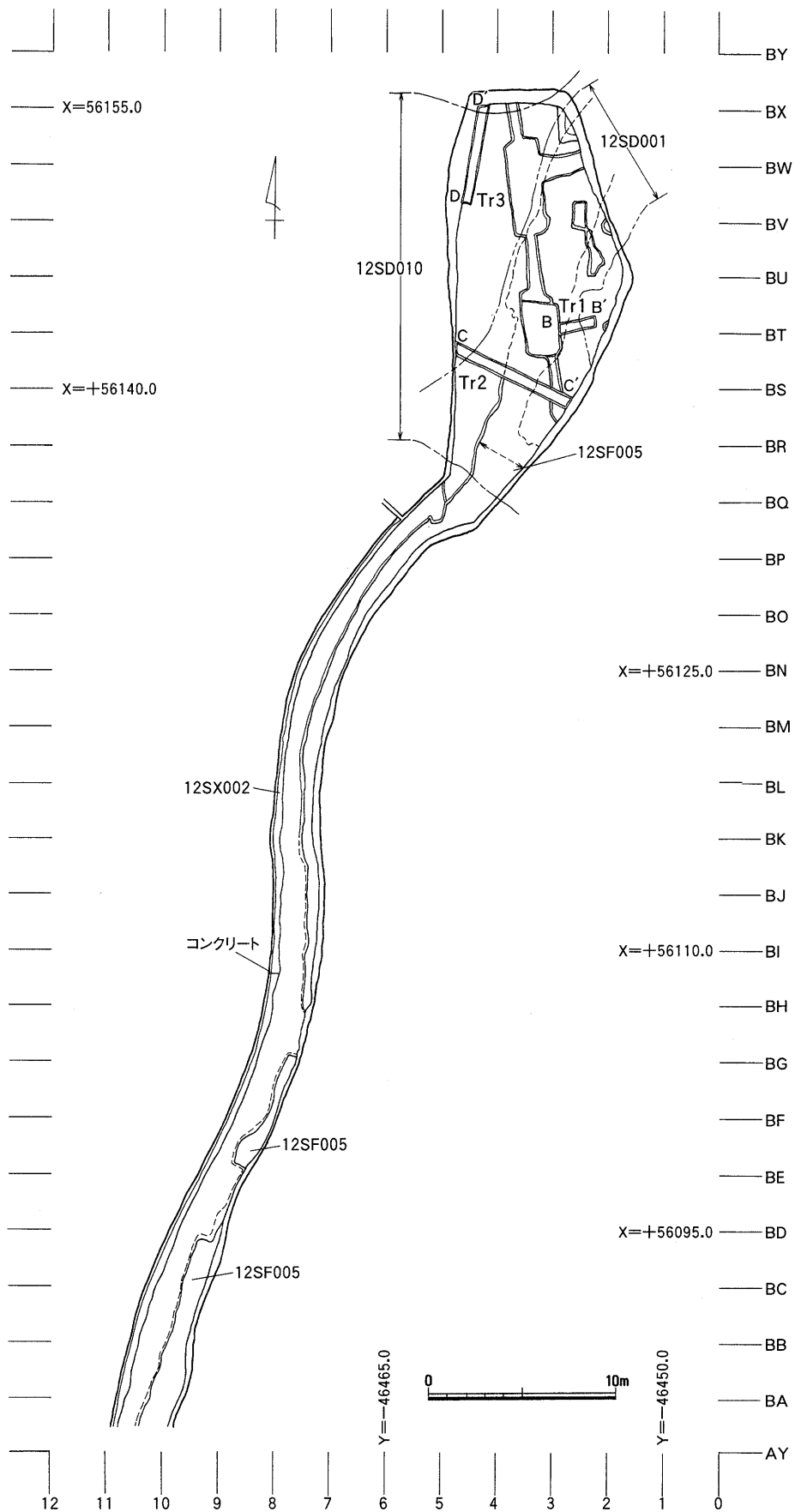
側溝（12SD002）構築以前の水路である。3トレンチ西壁セクションでは複数の水田面が確認されており、農業用水としての機能を兼ねたものと推測される。また昭和23年の太宰府古地形図（大宰府条坊跡Ⅴ）に水路の存在が知られていることから、12SD002が整備されるまで機能していたと考えられる。なお、2トレンチ白色砂層からはビール瓶が出土した。

12SD005（第34～36図）

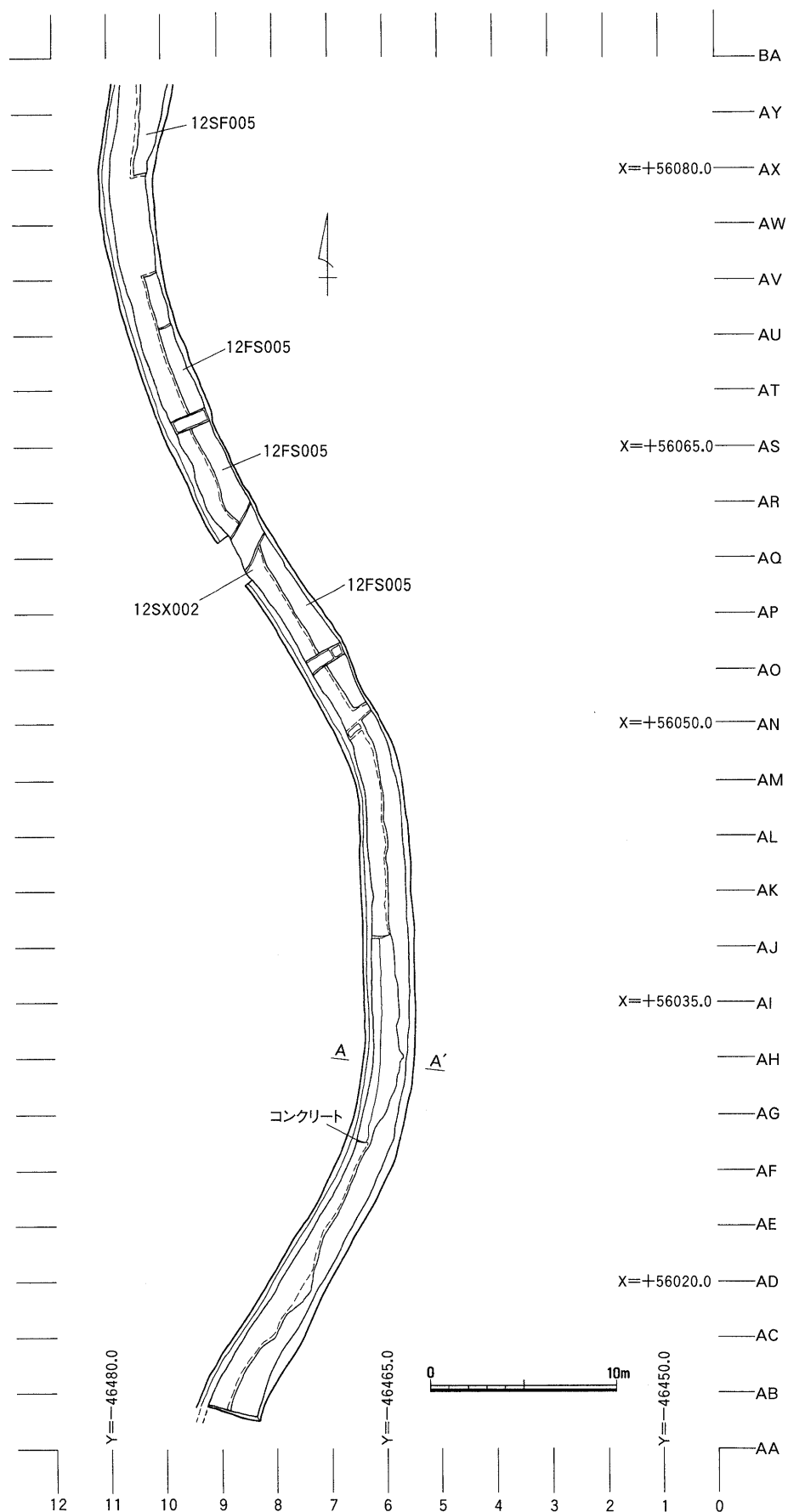
12SD001の上に構築された道路で、溝状を呈するS-4・6～9・11はいずれも路面への盛土または堆積土である。2トレンチの土層断面の観察結果では、12SD001の上層を覆っていることが確認される。

12SD010（第34～36図、図版22）

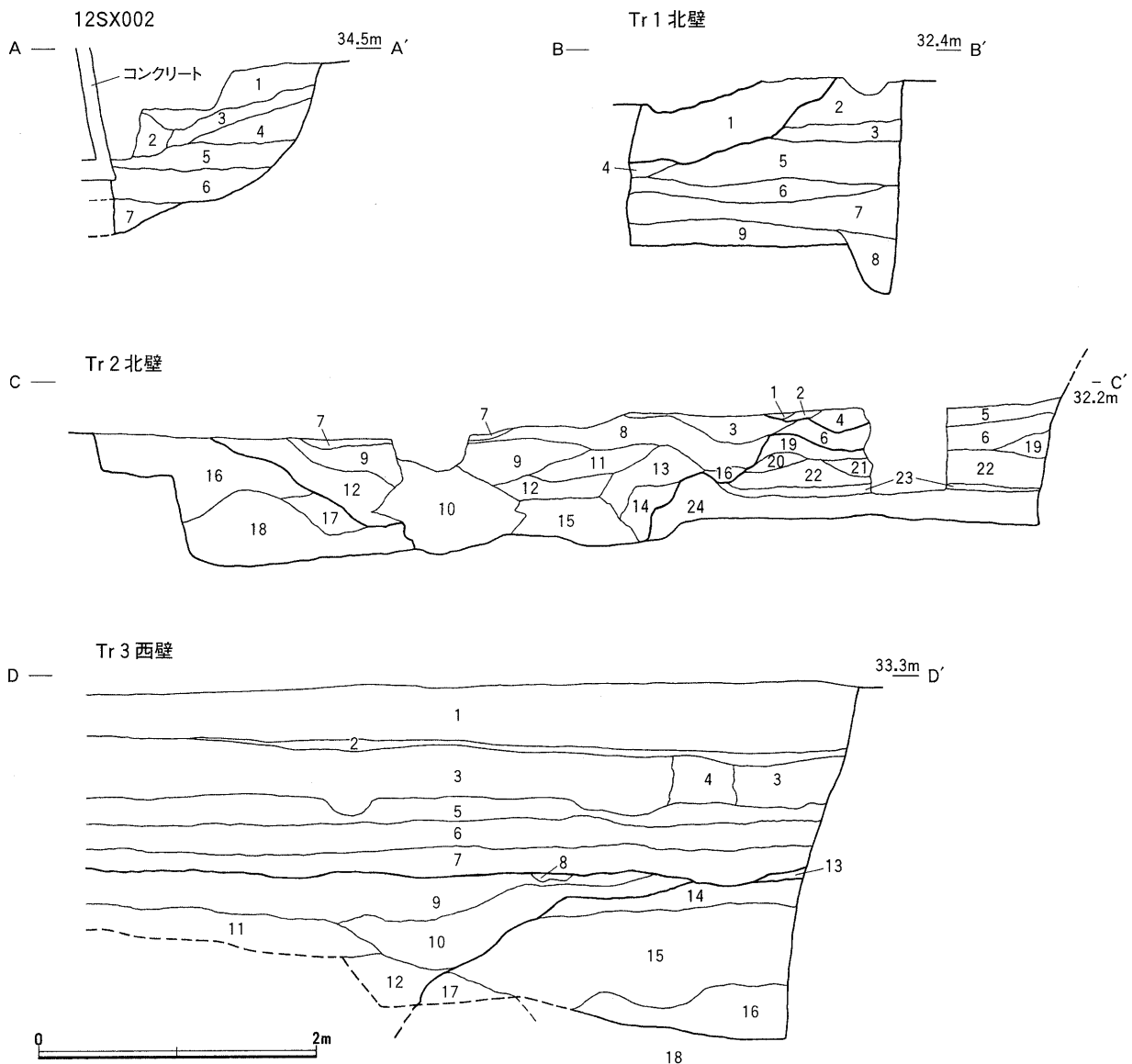
日焼遺跡第2・3・5次調査で検出された旧河川（日3SD001ほか）の延長部分にあたり、3トレンチ西壁セクションで北側の立ち上がりが確認された。さらに、同セクションでは旧河川以前の北方向に傾斜する谷地形が確認された。トレンチ内から遺物は検出されなかった。



第34図 前田12次遺構全体図1 (1/350)



第35図 前田12次遺構全体図 2 (1/350)



12SX002

1. 暗褐色土
2. 暗灰色粘土
3. 黄褐色土
4. 暗灰色粘土
5. 暗灰色砂
6. 褐色砂
7. 暗青灰色砂

※ 1層は暗灰色土、2～4層は暗灰色粘土、5～7層は暗灰色砂として遺物取り上げ

Tr 1 北壁

1. 暗灰色土 炭化物含有 (12SD001)
2. 黄灰色シルト (12SD010)
3. 黒灰色シルト (12SD010)
4. 青灰色シルト 砂礫含有 (12SD010)
5. 淡灰色シルト (12SD010)
6. 黒色シルト 有機物含有 (12SD010)
7. 灰色砂 礫含有 (12SD010)
8. 黒色粘土 (基盤層)
9. 緑灰色粘土 (基盤層)

Tr 2 北壁

1. 灰色土 (S-6)
2. 黄褐色土 (S-8)
3. 暗灰色土シルト
4. 暗灰色土
5. 明灰色土 (12SD001)
6. 暗褐色土 (12SD001)
7. 暗青灰色粘質土 (12SD001)
8. 暗青灰色シルト (12SD001)
9. 暗青灰色土 (12SD001)
10. 白色砂 (12SD001)
11. 淡青灰色土 (12SD001)
12. 暗灰青色粘土 (12SD001)
13. 暗青灰色土 (12SD001)
14. 暗灰色粘土 (12SD001)
15. 淡灰色砂質土 (12SD001)
16. 暗灰色砂質土 (12SD010)
17. 暗灰色粘性シルト (12SD010)
18. 淡灰色砂質土 (12SD010)
19. 褐色砂 (12SD010)
20. 灰色シルト (12SD010)
21. 黒色シルト 有機物含有 (12SD010)
22. 淡灰色砂 (12SD010)
23. 黒色シルト (12SD010)
24. 灰色砂礫 (12SD010)

Tr 3 西壁

1. 表土 (真砂土)
2. 炭化層 ビニール含有
3. 暗灰色土 (水田面) (12SX012)
4. 暗茶灰色土 (畦畔) (12SX012)
5. 黄茶灰色土 (田床) (12SX012)
6. 暗灰色土 (水田) (12SX012)
7. 黄茶灰色土 (田床) (12SX012)
8. 灰色シルト (12SD010)
9. 淡青灰色土 炭化物含有 (12SD010)
10. 暗灰色粘土 (12SD010)
11. 灰色砂 (12SD010)
12. 暗灰色砂 (12SD010)
13. 褐灰色粘土
14. 灰色粘土
15. 褐灰色粘土
16. 淡灰色粘土
17. 緑灰色土 (基盤層)
18. 黒灰色粘土 (基盤層)

第36図 前田12SX002、Tr 1～3断面図 (1/50)

2. 遺物（第37・38図、図版22）

本調査区内で検出された遺物はいずれも二次的要因で混入したものであるため遺構の帰属時期を示すものではないが、周辺地域との関連を理解することから時期の明確な特徴的な遺物を図示した。出土遺構および層位については「前田遺跡第12次調査遺物観察表」を参照されたい。

弥生土器

甕（1～4） 弥生後期の甕で、1は内外面にハケ目調整と赤彩が施され、口唇部には刻み目を有する。2～4は胴部中位から下位の破片であり、ハケ状原体による刻みが「V」または「X」字状に施された長方形または台形状の突帯が巡る。

壺（5） 底部外面には連続するミガキが施されている。

土製品

支脚（6） 6の支脚は外面がナデ整形される。

龍泉窯系青磁

椀（7） 口縁部に雷文が巡る上田分類C－Ⅱ類に属する。

国産陶器

坏（8） 内外面に付着した砂目を削り取って研磨しているが、高台内には砂目が残る。唐津系。

白磁

椀（9） 底部の器肉が厚く、浅いケズリ出しによる幅広の高台が付き、内面にはやや黄色味がかかった灰色の施釉が見られる。Ⅳ類に属する。

瓦質土器

鉢（10） 口縁部下に貼付された二本の突帯間に梅花文のスタンプが押印され、内面には横方向のハケ目調整が施される。

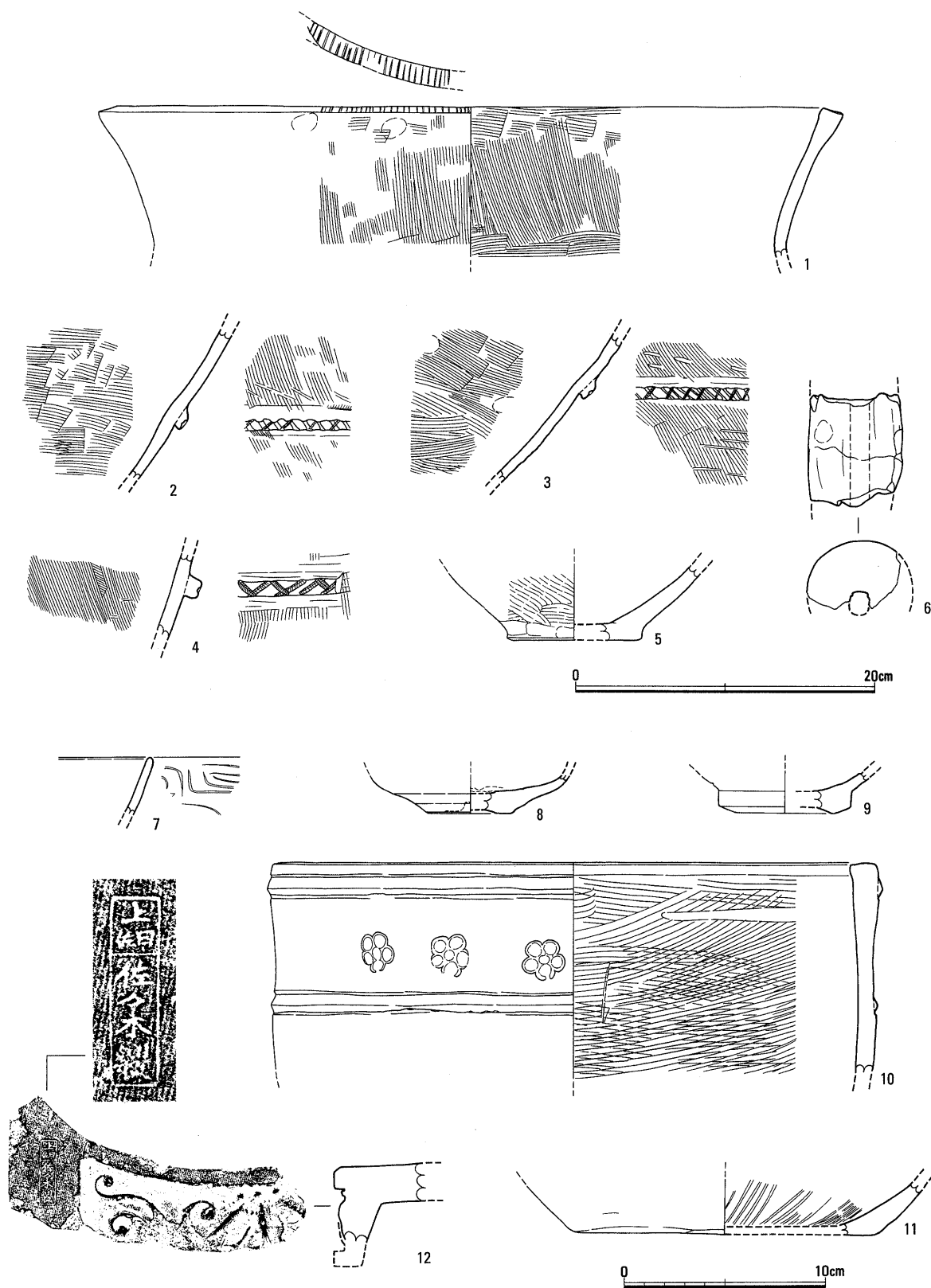
擂鉢（11） 底部付近の破片で、内面に5本一単位の擂り目を持つ。

瓦類

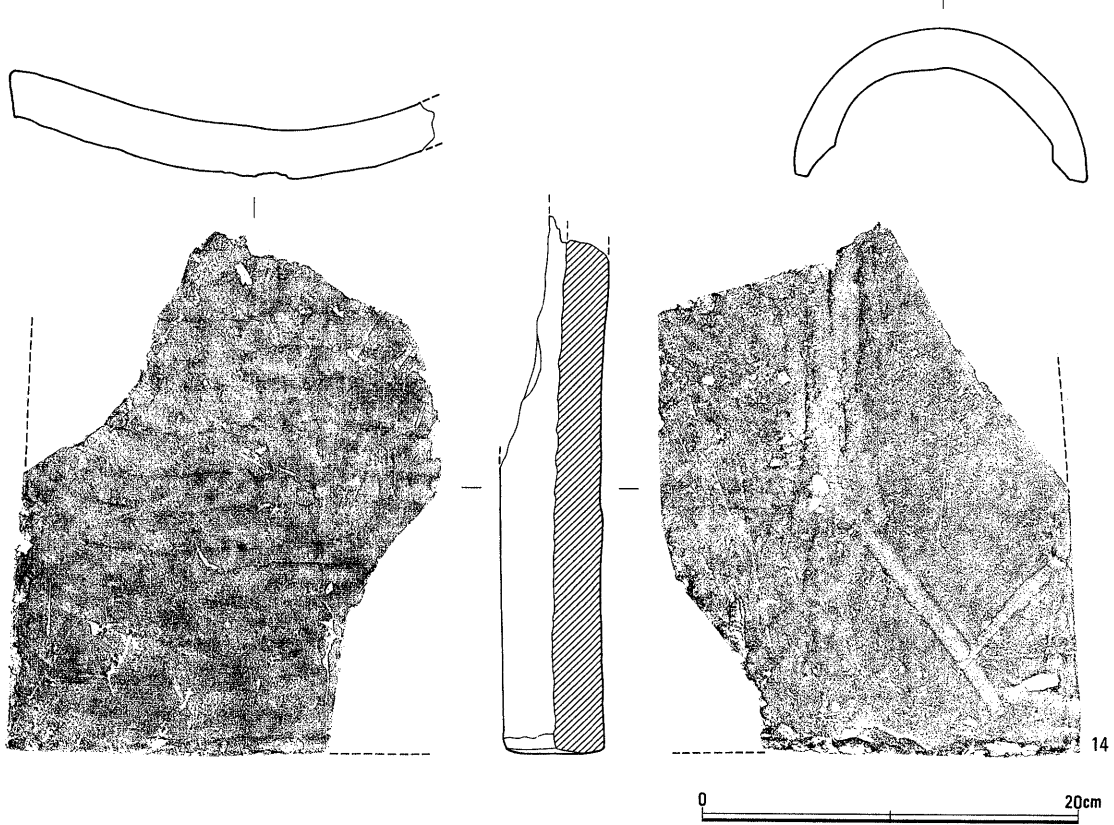
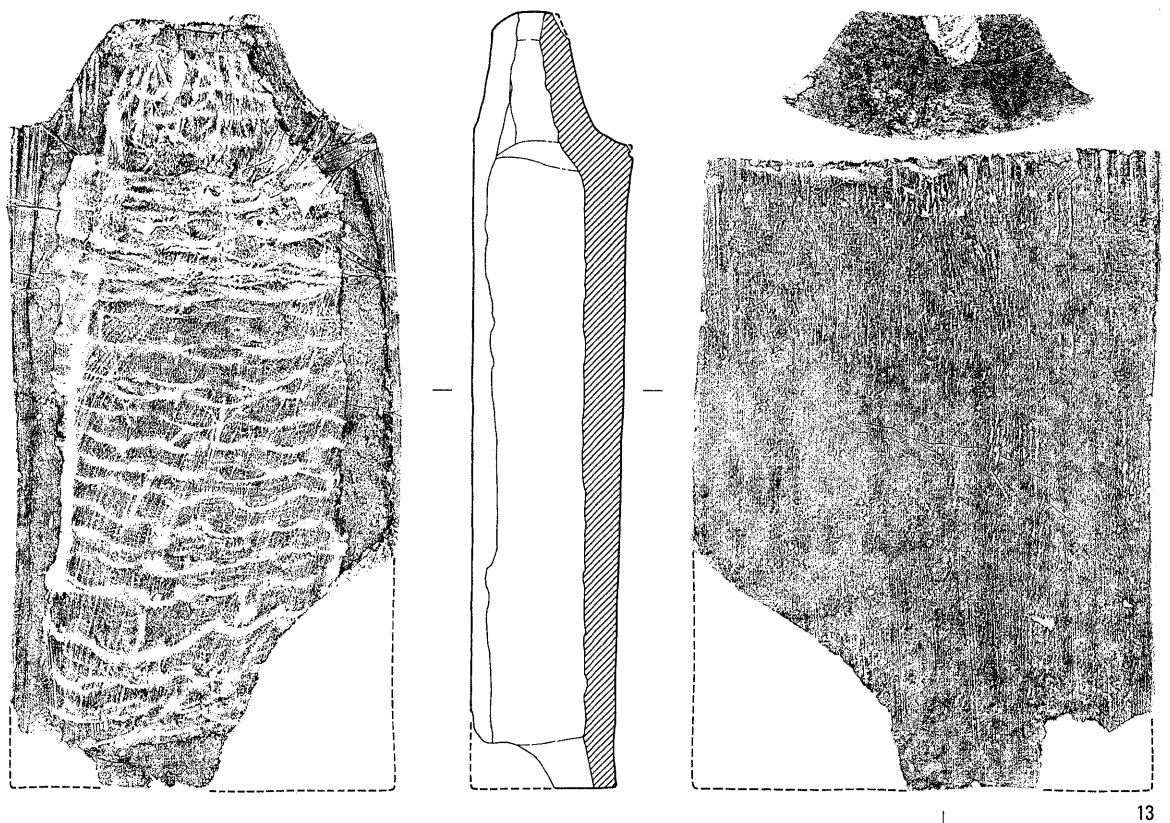
棧瓦（12） 瓦当文様は三葉の笹の葉文と均等唐草文の組み合わせによって構成され、外区には「上日佐一佐々木製」のスタンプが押印される（上日佐は現在の福岡市南区日佐に当る）。表面には均一な黒色の燻しがかかる。

丸瓦（13） 端部を一部破損する玉縁式丸瓦で、凸面は縄タタキの後ナデ整形、凹面では布目圧痕が残る。

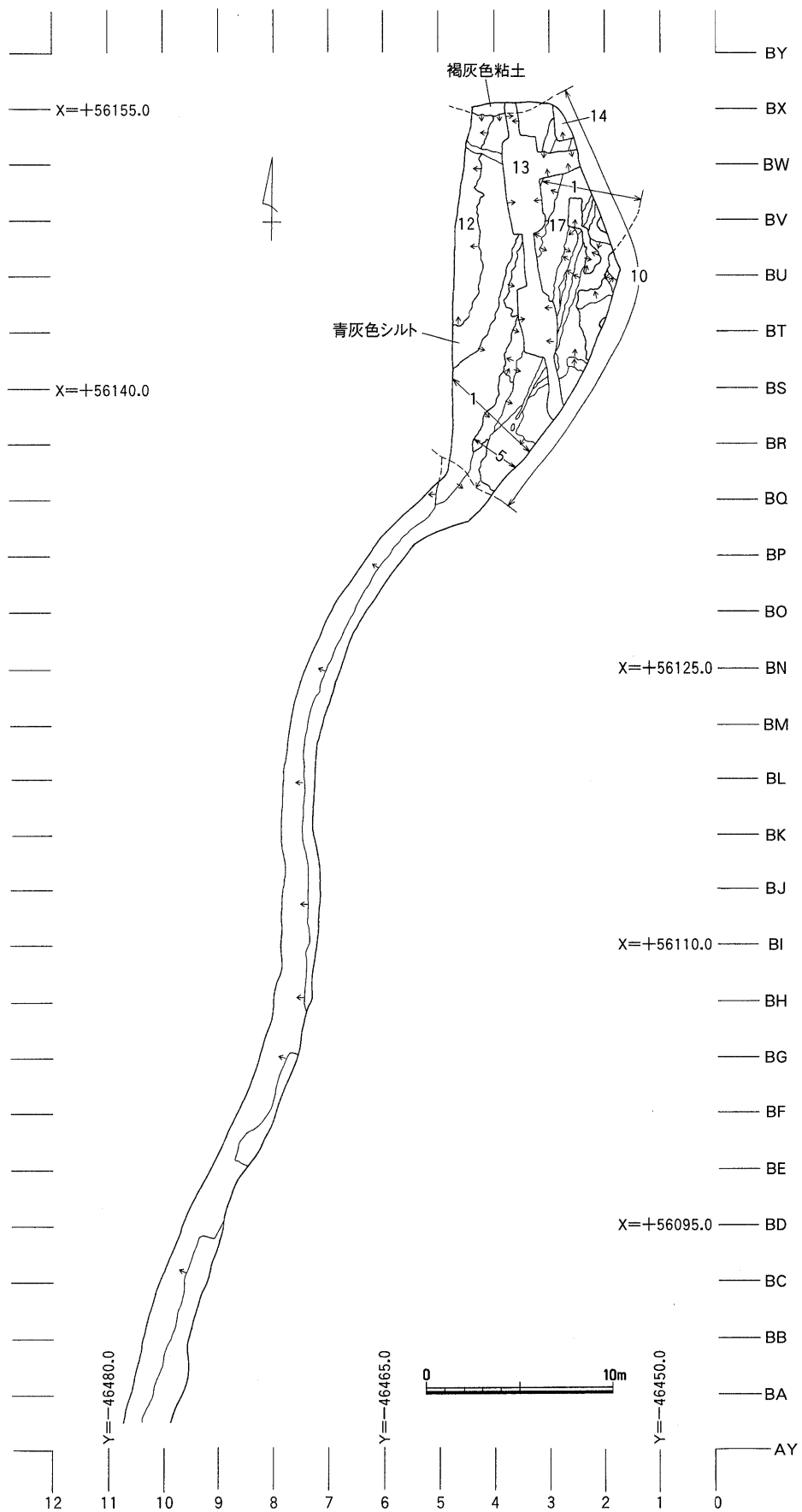
平瓦（14） 内外面ともに燻しのため黒色化し、凹面には1.5～2 cm単位の横方向へのナデが施される。



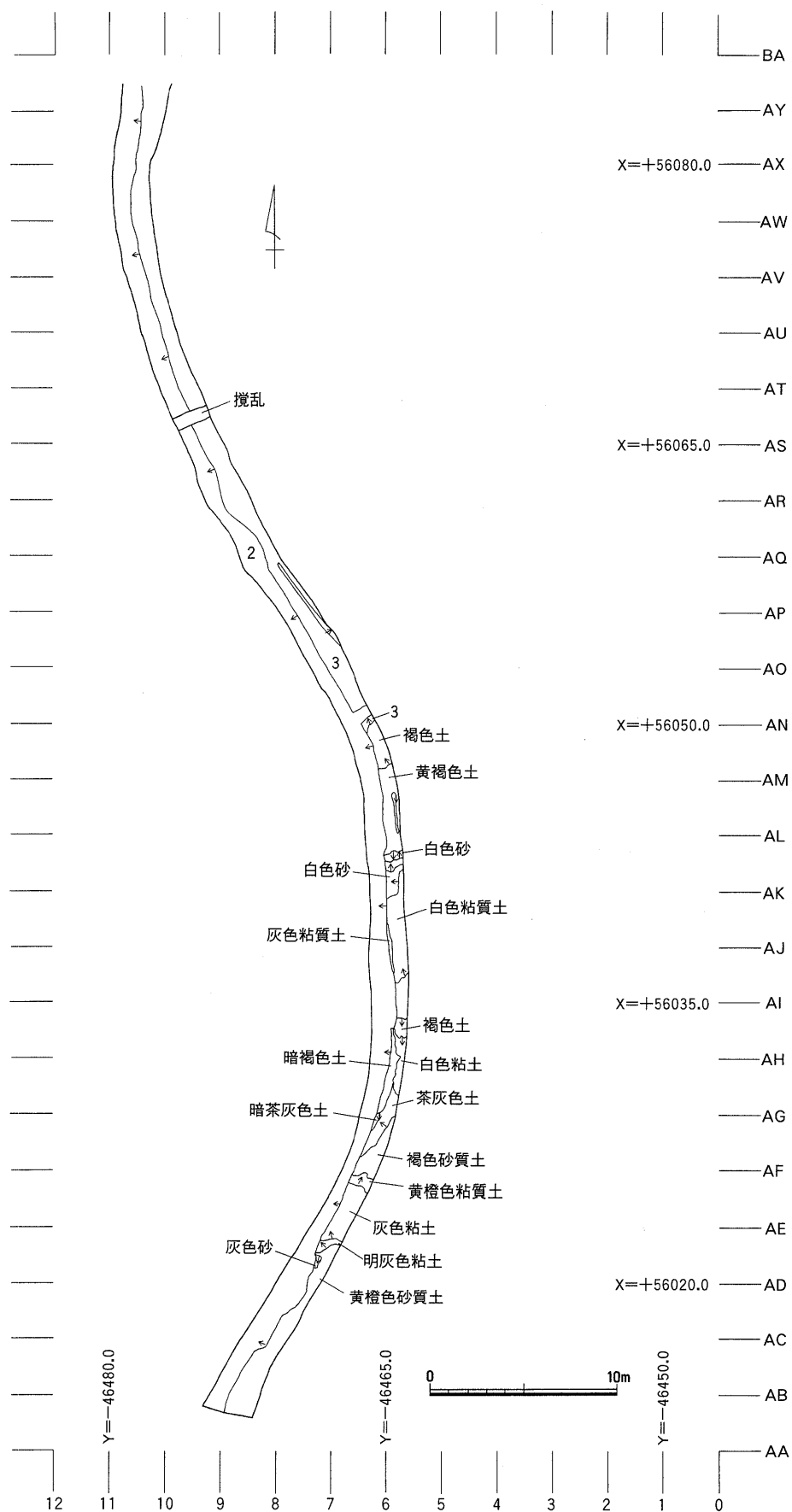
第37図 前田12次出土遺物 1 (1~6-1/4、7~12-1/3)



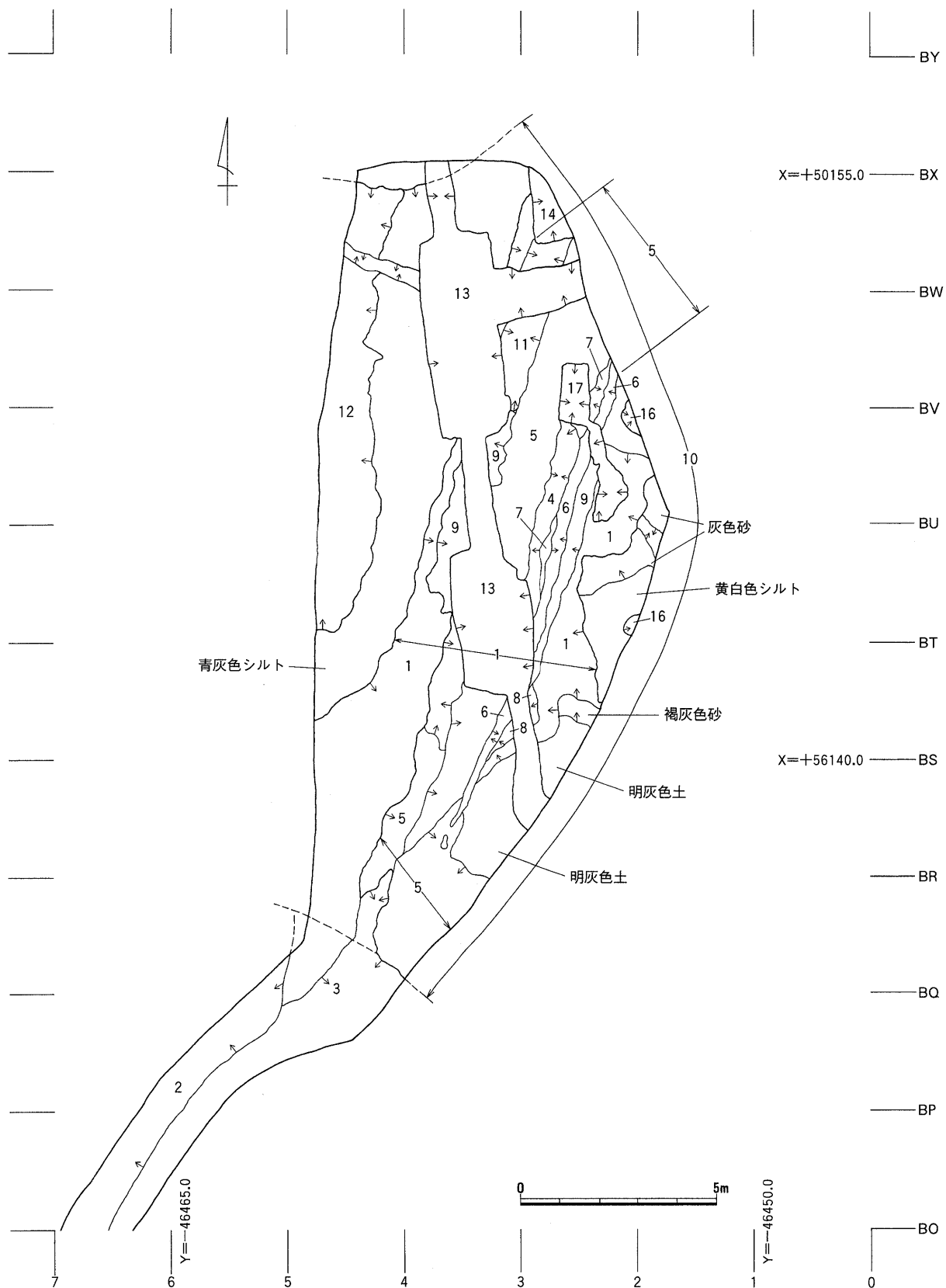
第38図 前田12次出土遺物 2 (1/4)



第39図 前田12次略測図1 (1/350)



第40図 前田12次略測図 2 (1/350)



第41図 前田12次略測図北側部分詳細 (1/150)

前田遺跡第12次調査遺構番号一覧表

S 番号	遺構番号	種 別	地 区
1	12SD001	水路 現代	B S3他
2	12SX002	側溝掘り方 現代	A G6他
3		S－5 構築土	B L6他
4		S－5 構築土	B T2
5	12SF005	道路 現代	B Q4
6		S－5 構築土	B T2
7		S－5 構築土	B T2
8		S－5 構築土	B R3
9		S－5 構築土	B U3
10	12SD010	旧河川 古代	B T4他
11		S－5 構築土	B V3
12		旧水田	B U4他
13	12SX013	水道管掘り方（本管）	B S3他
14		水道管掘り方	B W2
16		水道管掘り方	B T2
17		攪乱	B U2

前田遺跡第12次調査遺物観察表

（ ）は復元値、+ α は欠損、数値単位はcm

出土層位	番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備 考	R 番号	図版
暗灰色砂	1	弥生土器	甕	(49.6)	9.9+ α	—	内外面赤彩	R-008	第37図
暗灰色砂	2	弥生土器	甕	—	10.1+ α	—		R-009	第37図
暗灰色砂	3	弥生土器	甕	—	10.1+ α	—		R-010	第37図
暗灰色砂	4	弥生土器	甕	—	5.9+ α	—		R-011	第37図
暗灰色粘土	5	弥生土器	壺	—	5.0+ α	(9.0)		R-001	第37図
暗灰色粘土	6	土製品	支脚	—	7.5+ α	—		R-007	第37図
暗灰色砂	7	青磁	椀	—	—	—	(龍泉) C-Ⅱ (上田分類)	R-002	第37図
暗灰色砂	8	国産陶器	坏	—	1.9+ α	(4.4)		R-001	第37図
暗灰色粘土	9	白磁	椀Ⅳ類	—	2.2+ α	(6.6)	Ⅳ類	R-002	第37図
暗灰色砂	10	瓦質土器	鉢	(30.0)	10.5+ α	—		R-005	第37図
暗灰色砂	11	瓦質土器	擂鉢	—	2.7+ α	(15.5)		R-001	第37図
表 土	12	瓦	棧瓦	14.0+ α	4.5+ α	3.8+ α	縦×横×厚さ 均整唐草文 「上曰佐々木製」	R-006	第37図
暗灰色砂	13	瓦	丸瓦	41.0	16.0	2.3	縦×横×厚さ	R-003	第38図
暗灰色砂	14	瓦	平瓦	21.8+ α	28.4	2.8	縦×横×厚さ	R-004	第38図

前田遺跡第12次調査遺物一覧表

S-1 暗青灰色粘質土

須恵器	蓋c、蓋3、甕
土師器	片
瓦類	平瓦（近世～）
石製品	棒状石製品
肥前系陶磁器	染付筒茶碗、染付徳利
国産陶器	播鉢、土瓶
国産磁器	小坏
弥生土器	壺

S-1 白色砂

須恵器	甕
瓦類	平瓦（近世～）
国産陶器	甕
国産磁器	徳利

S-1 青灰色砂

須恵器	坏c3、甕
土師器	坏a
瓦類	棧瓦（現代～）
石製品	剥片（黒耀石）
肥前系陶磁器	染付蓋、染付小碗、染付徳利
国産陶器	碗、甕、土瓶
国産磁器	紅皿
その他	ビール瓶

S-2 暗褐色土

須恵器	蓋3、壺d×f、壺（古墳時代）
土師器	坏、甕
石製品	剥片（黒耀石）
国産陶器	甕（常滑）、甕
弥生土器	壺×甕（後期）、片

S-2 暗灰色粘土

須恵器	坏c3、甕
土師器	甕
瓦類	軒平瓦（近世～）、道具瓦
石製品	砥石、剥片（黒耀石）
土師質土器	七輪、土管
瓦質土器	甕×火鉢
肥前系陶磁器	染付筒茶碗（印判）、染付碗、碗、染付丸碗
国産陶器	瓶、土瓶、土管
国産磁器	片（近代～）、小瓶
白磁	碗；IV（1）、片（2）
弥生土器	壺（前期～）、片

S-2 暗灰色砂

須恵器	坏IVB、蓋c、蓋3、皿a、小甕、壺、壺a×c、壺d×f
土師器	小皿a（イト）
龍泉窯系青磁	碗；C-II（上田分類）（1）
瓦類	丸瓦（無文）、丸瓦（縄）、平瓦（無文）、丸瓦（格子・須恵質）、フランス瓦（青色釉）
石製品	剥片（黒耀石）
瓦質土器	火鉢、播鉢、鉢、大鉢、羽釜、鍋

肥前系陶磁器	染付蓋、染付小坏、染付丸碗、丸碗（印判）、筒茶碗（青磁）、染付皿、染付中皿、染付鉢
国産陶器	坏、碗、丸碗、菊皿（瀬戸系）、播鉢（無釉）、鉢（刷毛手）、壺×鉢、花瓶大（高取系）、酒瓶、土瓶（緑釉）、徳利
国産磁器	小坏（青磁）、菊皿、壺形容器
弥生土器	甕（後期）、大甕（後期）、壺（後期）、支脚、片
その他	コンクリート片

S-3 褐色土

須恵器	片
瓦類	軒丸瓦（巴）、平瓦（縄）
肥前系陶磁器	染付碗、染付丸碗（蒟蒻版）
国産陶器	碗×壺、壺
国産磁器	紅皿
白磁	碗；IV（1）
弥生土器	器台

S-4 白色砂

須恵器	甕
瓦類	平瓦（無文）（近世～）
国産陶器	坏×鉢、土瓶

S-5 褐色灰色砂

須恵器	坏c3
瓦類	平瓦（近世～）
石製品	剥片（黒耀石）
肥前系陶磁器	染付碗、染付碗（端反）
国産陶器	碗×壺、甕×土管

S-6 灰色土

土師器	片
瓦類	片（近世～）
石製品	剥片（黒耀石）
肥前系陶磁器	染付筒茶碗

S-8 黄褐色土

須恵器	片
土師器	坏a（イト）
国産陶器	坏×碗
金属製品	鉄釘

S-9 明灰色砂

土師器	片（弥生×土師器）
-----	-----------

S-10 淡灰色砂

須恵器	甕
-----	---

表土

須恵器	坏c1、坏c3、蓋3、甕
土師器	小皿a（イト）
瓦類	棧瓦（印刻入）、軒丸瓦（巴）
石製品	剥片（黒耀石）
土師質土器	釜
瓦質土器	大甕
肥前系陶磁器	染付丸碗、筒茶碗、皿、小壺、徳利、人形、ほう皿
国産陶器	甕×瓶、播鉢、土瓶

第V章 ま と め

日焼遺跡第3次調査（以下、日焼3次）では後期旧石器時代から近現代までの遺構・遺物が検出された。遺構では竪穴住居2軒（日3SI005・日3SI020）、掘立柱建物2棟（日3SB025・日3SB119）、土坑7基（日3SK015・日3SK042・日3SK051・日3SK129・日3SK147・日3SK149・日3SK167）、官道側溝（日3SD010）溝2条（日3SD043・日3SD172）が検出されているが、調査面積から見れば遺構密度は希薄であるといえる。その要因として、調査区のほぼ中央に位置し大きな面積を占める旧河道（日3SD001）の存在が、弥生時代以降に展開する遺構群の形成に大きな影響を及ぼしたものと考えられる。

前田遺跡第12次調査（以下、前田12次）は主に近現代の遺構の調査となったが、古代関連では、調査区北端部で日焼遺跡から連続する旧河道（前12SD010）が確認されたことは地理的環境の復元において大きな成果であった。

本章ではこれまでに報告されている周辺域の調査成果を踏まえ、日焼遺跡を中心に検出された遺構・遺物から本調査区を概観してまとめとしたい。

後期旧石器時代～縄文時代

後期旧石器時代から縄文時代の遺物は、旧河道（日3SD001）の覆土中、並びにその外縁部に存在する遺物集中区（日3SX169・171～173）から検出されている。遺構は確認されなかったが、トレンチ調査の結果、1～4・6トレンチにおいて旧河道あるいは谷地形と推定される範囲から、水際部分が干上がって形成されたと考えられる干裂状地形が認められた。1トレンチの土層観察の結果、旧河道（日3SD001）の形成時期が縄文時代後半期におかれるため、干裂状地形はそれ以前に形成されたと考えられる。

遺物は、調査区南側の一部でロームの再堆積土中から出土しているものを除けば、干裂状地形または谷を埋める砂質系土壌を主体とした沖積層中より検出されている。後期旧石器時代の遺物では、細石刃2点および細石刃石核1点、尖頭器2点が検出されており、周辺域の調査では前田7次において三稜尖頭器が3点出土している。縄文時代では早期押型文土器および前期曾畑式土器の小破片が数点、後・晩期に属する粗製および精製の鉢が確認され、石器では石鏃、石匙、磨石等が検出されている。

佐野地区周辺では、これまでも縄文時代のほぼ全時期にわたる遺物が検出されているが、遺構は原口遺跡において焼土と土器を伴う小規模のキャンプ地的な様相を有するものが確認されているにすぎない。今回の旧河道やその周辺の遺物の在り方から判断すると、遺構は河道または谷上方の西側の丘陵地に生活域を想定することが妥当と思われる。

弥生時代～古墳時代

この時代は、縄文時代後半期以降に形成された旧河道（日3SD001）が調査区中央に存在し、氾濫等による土砂の堆積と小規模な流路の形成を繰り返しながら埋没していった時期と考えられる。該期に比定される遺構は弥生土器の小片が検出された日3SK051のみであり、遺物は旧河道内で出土した以外ではあまり検出されていない。本遺跡の南東部側に位置する前田遺跡では、竪穴住居や掘立柱建物、貯蔵穴を伴う弥生前期から後期にわたる集落が展開しており、本遺跡とは様相が大きく異なっている。その要因としては旧河道の氾濫領域であったために自然環境による制約が大きかったからと思われる。また、河道の存在から水場等の土地利用を想定できるが、これを裏付ける遺構・遺物は検出されなかった。

古墳時代では円筒埴輪の破片が出土している。前田第1・5・7次調査においてもその出土は知られており、前田7次調査の溝（前7SD095）は円墳の周溝が想定されているが、今回の調査では古墳に関連

する遺構は確認できなかった。

奈良時代以降

旧河道（日3SD001）がほぼ埋没して湿地化が進んだ段階と考えられ、小規模な流路が断続的に形成されている。特に丘陵部西側の旧河道との境界付近からは8世紀代を主体とする多量の須恵器が検出されており、この時期にはほぼ河道の勢いが衰えていたものと想定される。

日焼3次の調査区は、これまで前田遺跡および日焼遺跡で検出されてきた水城西門に通じる古代官道の延長部分にあたり、路面は削平を受けていたため確認されなかったが、調査区北側では西側の側溝（日3SD010）を約40mにわたって検出することができた。北端部における側溝の断面形は緩やかな「V」字状を呈し、プランも直線的であるのに対して、南側では本来の形状が崩れた不定形となっている。前田5次の官道側溝（前5SD100）の調査では、埋没途中の段階において側溝の肩部を削り落として溝幅を拡張する掘り直しが確認されているが、今回の調査でも同様の所見を得ることができた。

その他、調査区の西側テラス面で竪穴住居2軒と掘立柱建物2棟が検出されており、いずれも出土遺物が小片のため時期の特定は困難であるが、散在的な遺構の在り方は前田遺跡とは大きく異なるものであった。

出土遺物では8世紀代の須恵器が主体的に認められるが、その中には焼き歪みや須恵器同士が溶着しているものも存在し、加えて本遺跡の西側一帯には古墳時代後期から奈良時代にわたる複数の窯跡が調査された宮ノ本丘陵が位置することから、調査区外の西側斜面上方には8世紀代の窯跡や灰原の存在が想定されよう。

また、この段階には旧河道内に小規模な流路が形成され、黒色粘質系土壌を褐色砂等が挟んでいる状況が看取されたが、これらは一度の大雨によってでさえ形成され得ることと、トレンチにおけるセクションの観察ではこれらが埋没時に多数形成されて同一面で検出されるとは限らないため、流水の方向を判断する手がかりとはなるが、自然流路からの時期的変遷を追うことは不可能であった。また、旧河道内の中央付近で確認された黒色シルトや黒色粘土の安定した堆積状況から判断すると、旧河道一帯は湿地化が進んでいったものと想定され、日焼3次では田下駄が出土していることから水田としての土地利用も考えられる。

特殊遺物では、日3SD174から出土した「湊水」と判読される墨書土器の存在が注目される。「湊」は河や河口・海などの水の出入り口という意味もあることから旧河道との関連を推定した。また、付札状木製品としたものや転用硯の存在から、一般集落とは異なる官的要素を見てとることが可能である。

中世以降は、出土遺物も減少の一途をたどり、遺構では同様に日3SD043の区画を意識したと考えられる溝（灌漑水路か）以外は存在せず、現代に至る耕地化した景観が確立されたものと思われる。

付編 日焼遺跡第3次調査出土木製品の樹種同定

はじめに

日焼遺跡第3次調査で出土した木製品の木材利用状況を確認するために樹種同定を実施する。なお、表1に示した番号は、第28図に準じており、完形品のために分析試料が得られなかった3については樹種同定は行っていない。

1. 試料

試料は、旧河道（日3SD001）から出土した木製品7点（試料番号1・2・4～8）である。

2. 分析方法（表1、図版19）

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1、図版19に示す。木製品は全て針葉樹材で3種類（スギ・ヒノキ・スギまたはヒノキ科）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・スギ（*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don）スギ科
スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2－4個。放射組織は単列、1－15細胞高。

- ・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb.et Zucc.) Endlicher）ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1－3個。放射組織は単列、1－15細胞高。

- ・スギまたはヒノキ科（*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don or Cupressaceae）

試料は早材部のみで、晩材部および年輪界を欠く。軸方向組織には仮道管と樹脂細胞が認められる。樹脂細胞は、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に1－3個。放射組織は単列、1－15細胞高。

4. 考察

樹種同定を行った木製品は、付札状木製品、火鑽臼、大足、田下駄？、用途不明に分けられるが、全て板状の製品である点で共通する。これらの木製品は、全て針葉樹で、スギ、ヒノキ、スギまたはヒノキ科に同定された。スギとヒノキは、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易で耐水性もある。スギまたはヒノキ科は、今回の樹種同定結果を考慮すれば、スギかヒノキの可能性はある。

表1 樹種同定結果

番号	器種	樹種
1	付札状木製品	スギまたはヒノキ科
2	火鑽臼	スギ
4	大足（足板）	ヒノキ
5	用途不明（田下駄？）	ヒノキ
6	用途不明	スギ
7	用途不明	ヒノキ
8	用途不明	ヒノキ

付札状木製品、火鑽臼、大足、田下駄については、これまで行われた樹種同定結果でも地域に関わらずスギ、ヒノキ属（ヒノキ・サワラ）、アスナロ、モミ属等の針葉樹材の利用が多い傾向があり、広葉樹材の利用は少ない（島地・伊東 1988、伊東 1990、伊東・久保 2002）。この背景には、木材の加工性や加工技術との関係が推定される。日本に縦挽きの鋸が入ってきたのは中世であり、それ以前の木材加工は楔等を利用して割り取る方法が主であったとされる（成田 1996）。したがって、板状の木製品を製作するためには割裂性の高い木材が適材であり、割裂性および加工性が高い針葉樹材が選択されたと考えられる。また、火鑽臼では、加工性の他、発火具として重要な発火性等も重要な条件と考えられる。日本産の主要な木材について行われた引火点（口火を近づけると引火する温度）の調査では、スギが240℃、ヒノキ・ツガが253℃、アカマツが263℃、ケヤキ264℃、カツラ270℃等となっており、スギが最も引火点が低く、次いでヒノキ・ツガとなる（有馬 1982）。この結果から、火付きの良い木材を火鑽臼に利用したことが推定される。

本地域では、7世紀末～8世紀前半の古植生を明らかにした例はほとんど無いが、8世紀末～9世紀の古植生については大宰府史跡第170次調査等で実施した例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社 1997）。その結果では、常緑広葉樹のアカガシ亜属、シノキ属、針葉樹のマツ属が多くを占めている。今回確認された樹種では、スギ属が低率で検出されているが、ヒノキを含むヒノキ科・イチイ科・イヌガヤ科の花粉化石は全く検出されていない。この結果をみる限りでは、本地域にはスギやヒノキはほとんど生育していなかった可能性がある。この場合、木製品は他地域から搬入された可能性が高くなる。しかし、現時点では資料が少ないため、今後さらに古植生や木材利用に関する資料を蓄積して判断する必要がある。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

- 有馬孝礼 1982 「防火」『木材の事典』浅野猪久夫（編）朝倉書店 297-301
- 太宰府市史編集委員会 2001 『太宰府市史 環境資料編』太宰府市 521 p
- 伊東隆夫 1990 「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ」『木材研究・資料』26 京都大学木質科学研究所 91-189
- 伊東隆夫・久保るり子 2002 「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅲ」『木材研究・資料』38 京都大学木質科学研究所 39-217
- 成田壽一郎 1996 『曲物・箆物』理工学社 205 p
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1997 「大宰府史跡第170次調査の自然科学分析」『太宰府の文化財第36集 大宰府史跡 学院中学校整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』太宰府市教育委員会 121-126
- 島地 謙・伊東隆夫（編）1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 296 p

版 圖



日焼 3 次調査区遠景（南から）



日焼 3 次調査区遠景（東から）

図版 2



日焼 3 次調査区北側全景（右下が北）



日焼 3 次調査区南側全景（右が北）

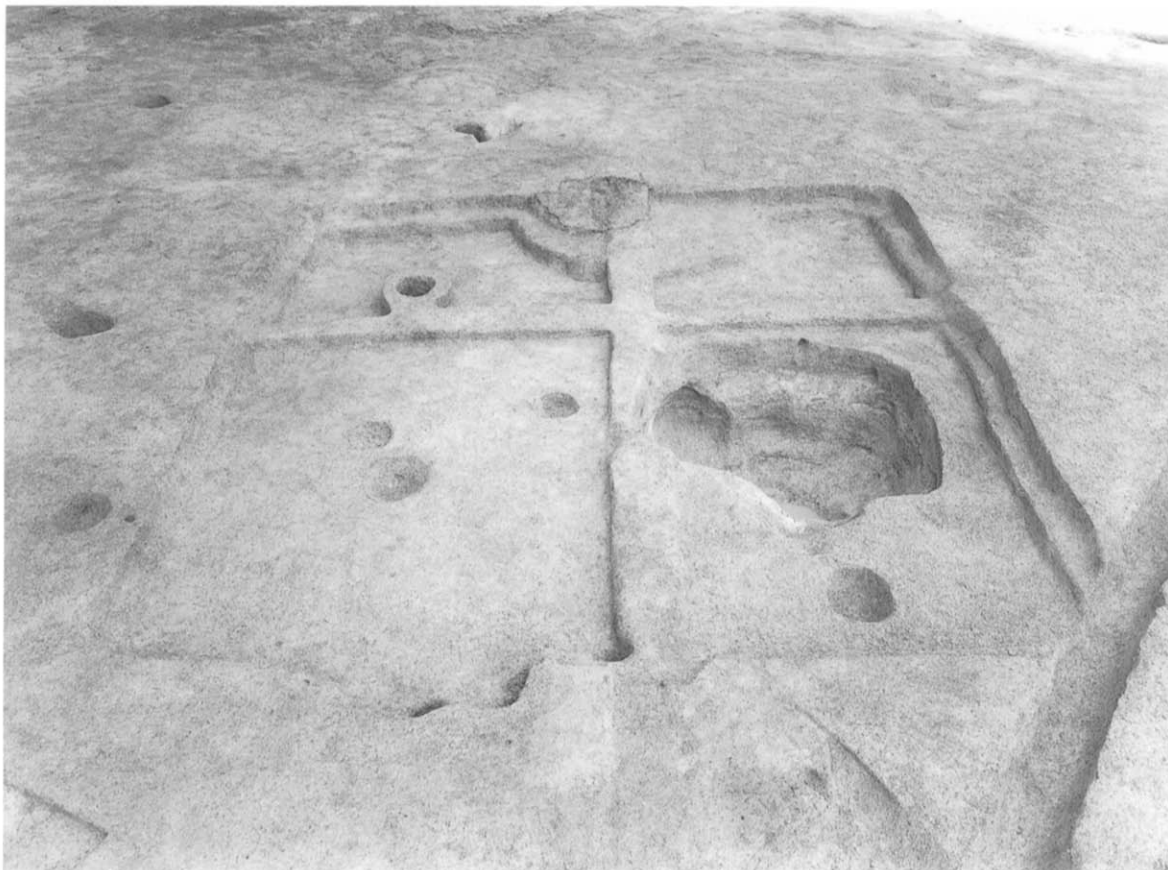


日焼3次調査区東側全景（北から）



日焼3次調査区南端部分全景（西から）

図版 4



日焼3SI005全景（南東から）



日焼3SI020全景（南西から）



日焼3SB025全景（南東から）



日焼3SX104遺物出土状況（西から）



日焼3SK015 (南から)



日焼3SK147 (南から)



日焼3SK051 (東から)



日焼3SK149 (南から)



日焼3SK129 (南から)



日焼3SK167 (北から)



日焼3SD010（南から）



日焼3SD043（西から）



日焼1 トレンチセクション (西から)



日焼8 トレンチセクション (北西から)



日焼2トレンチセクション（北西から）



日焼11トレンチセクション（南西から）



日焼2トレンチ干裂状地形（東から）



日焼1 トレンチ全景（北から）



日焼3 トレンチ全景（東から）



日焼4 トレンチ全景（北から）



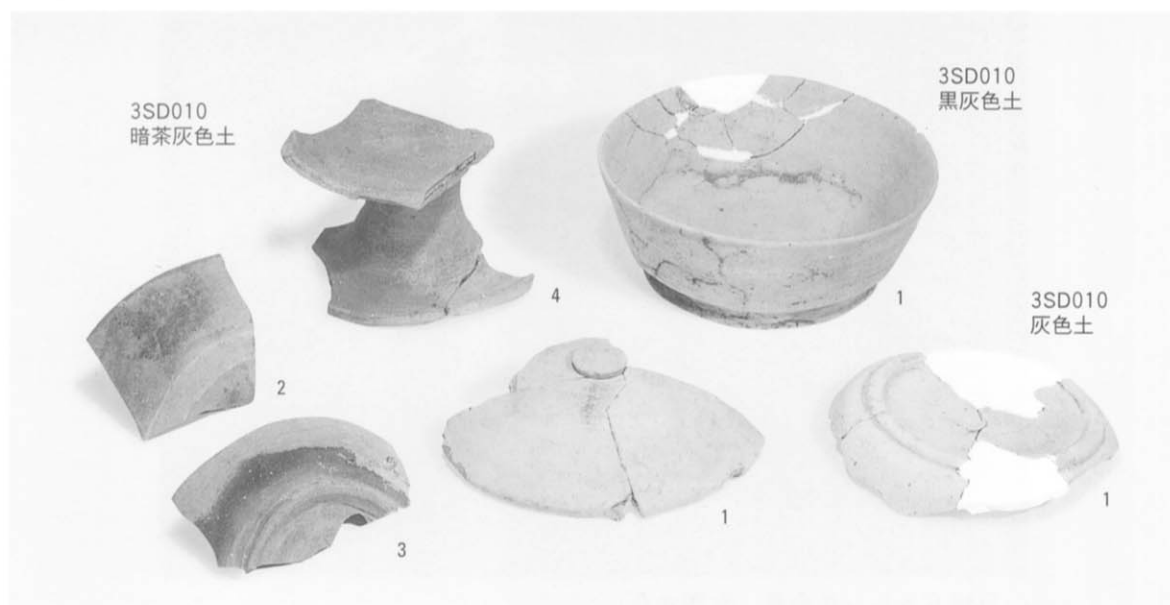
日焼6トレンチ全景（北西から）



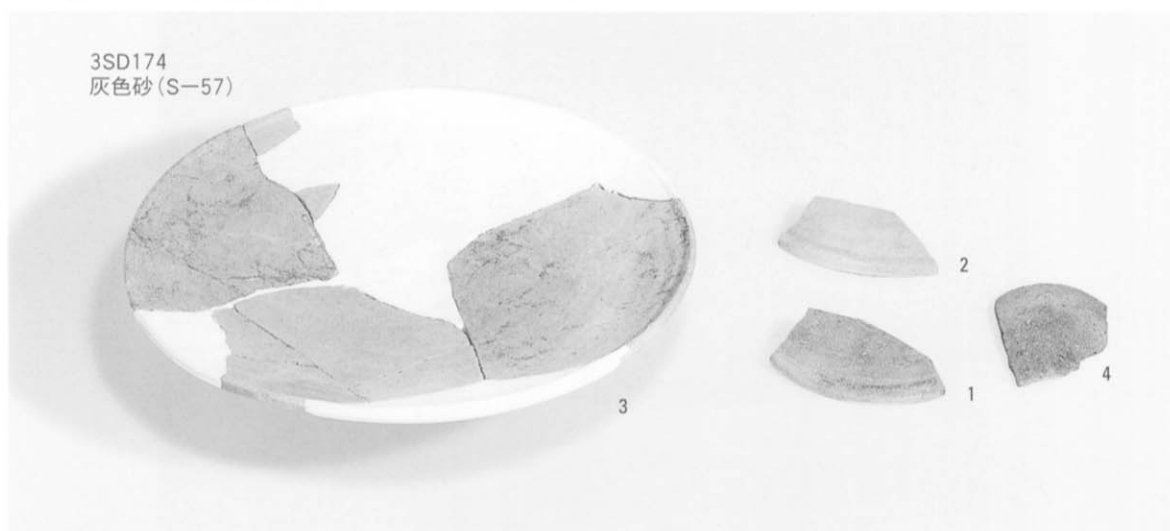
日焼7～9トレンチ遺物出土状況（北から）



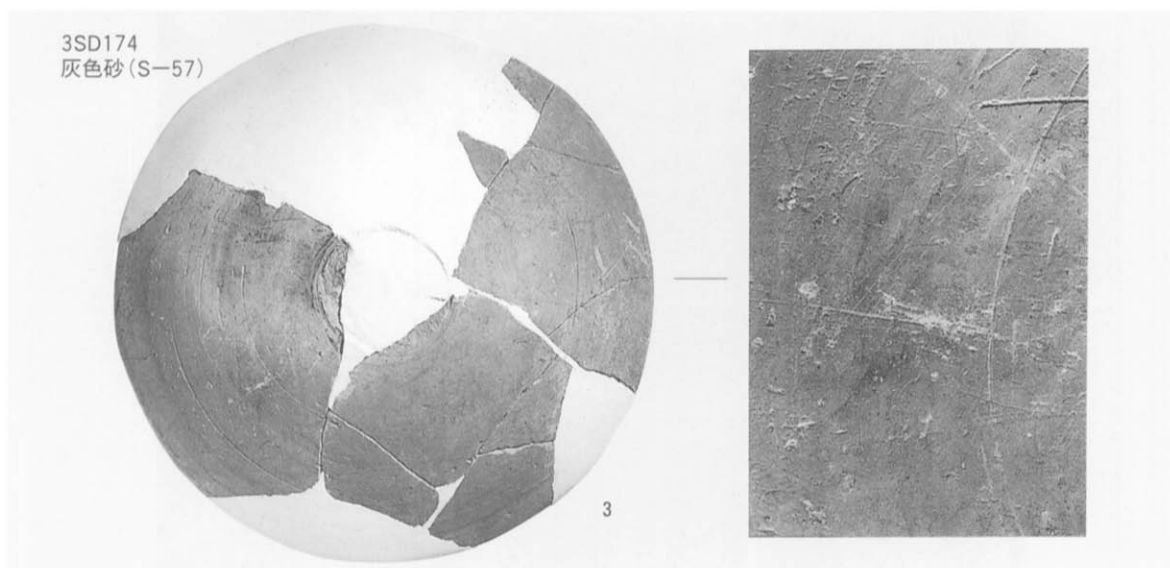
日焼10トレンチ遺物出土状況（西から）



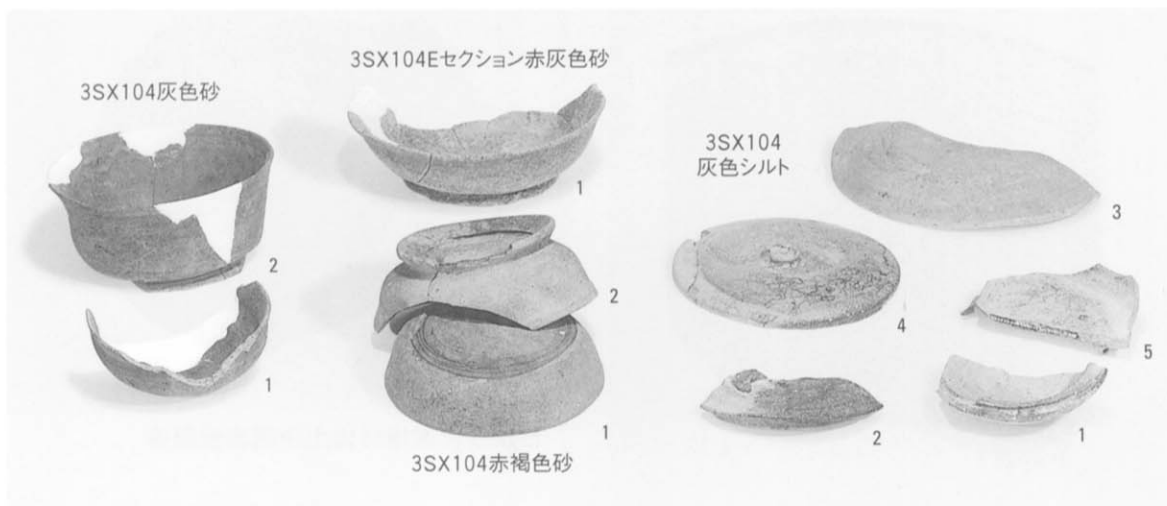
日焼3SD010出土遺物



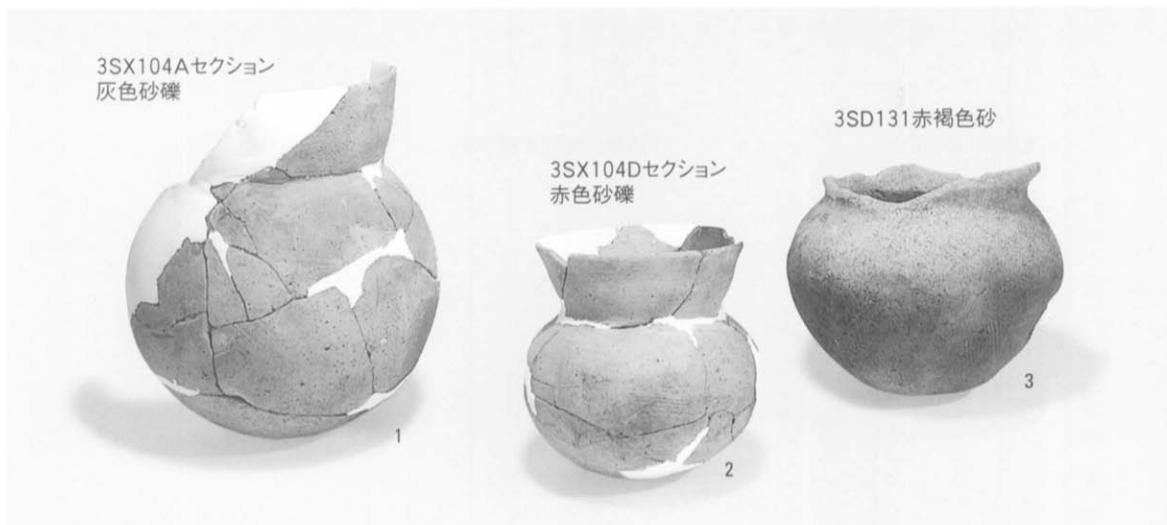
日焼3SD174出土遺物



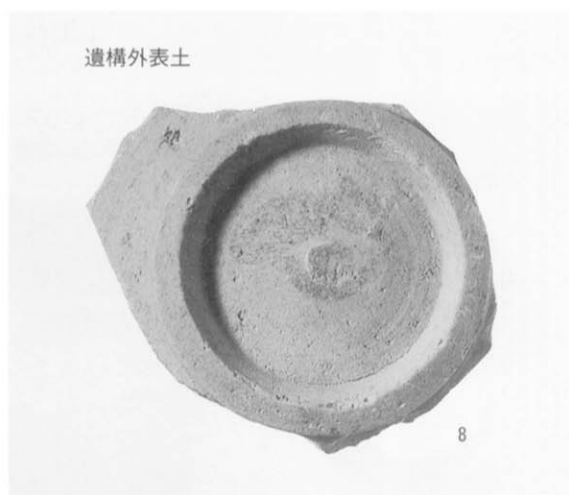
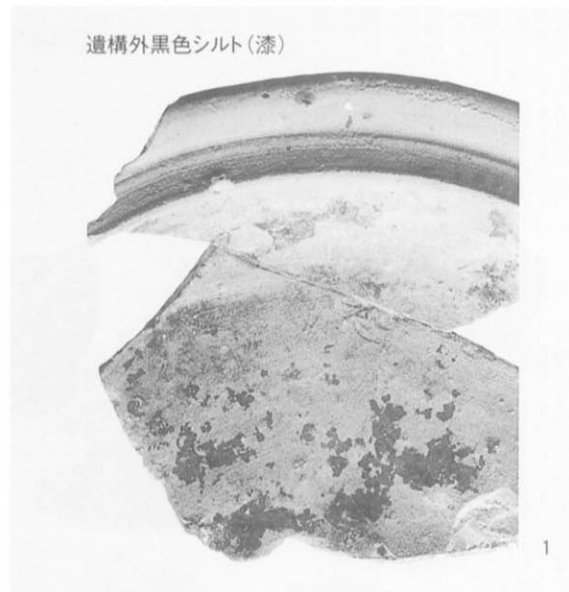
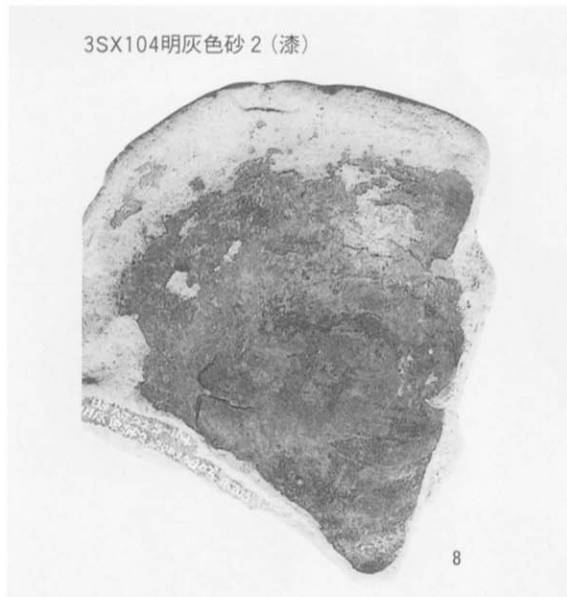
日焼3SD174出土墨書土器



日焼3SX104出土遺物



日焼3SX104、3SD131出土遺物

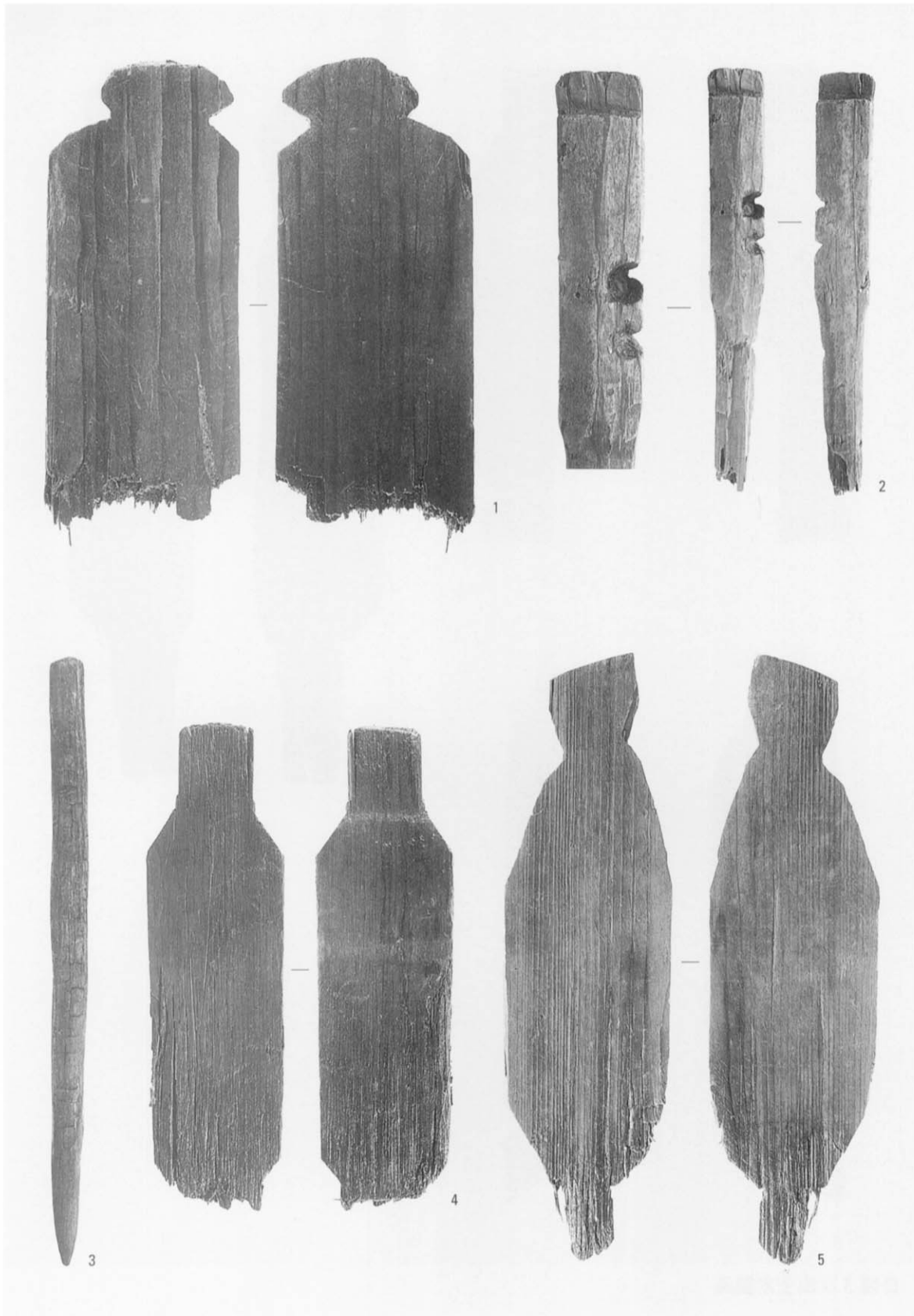


日焼 3 次遺構外出土白磁底部墨書

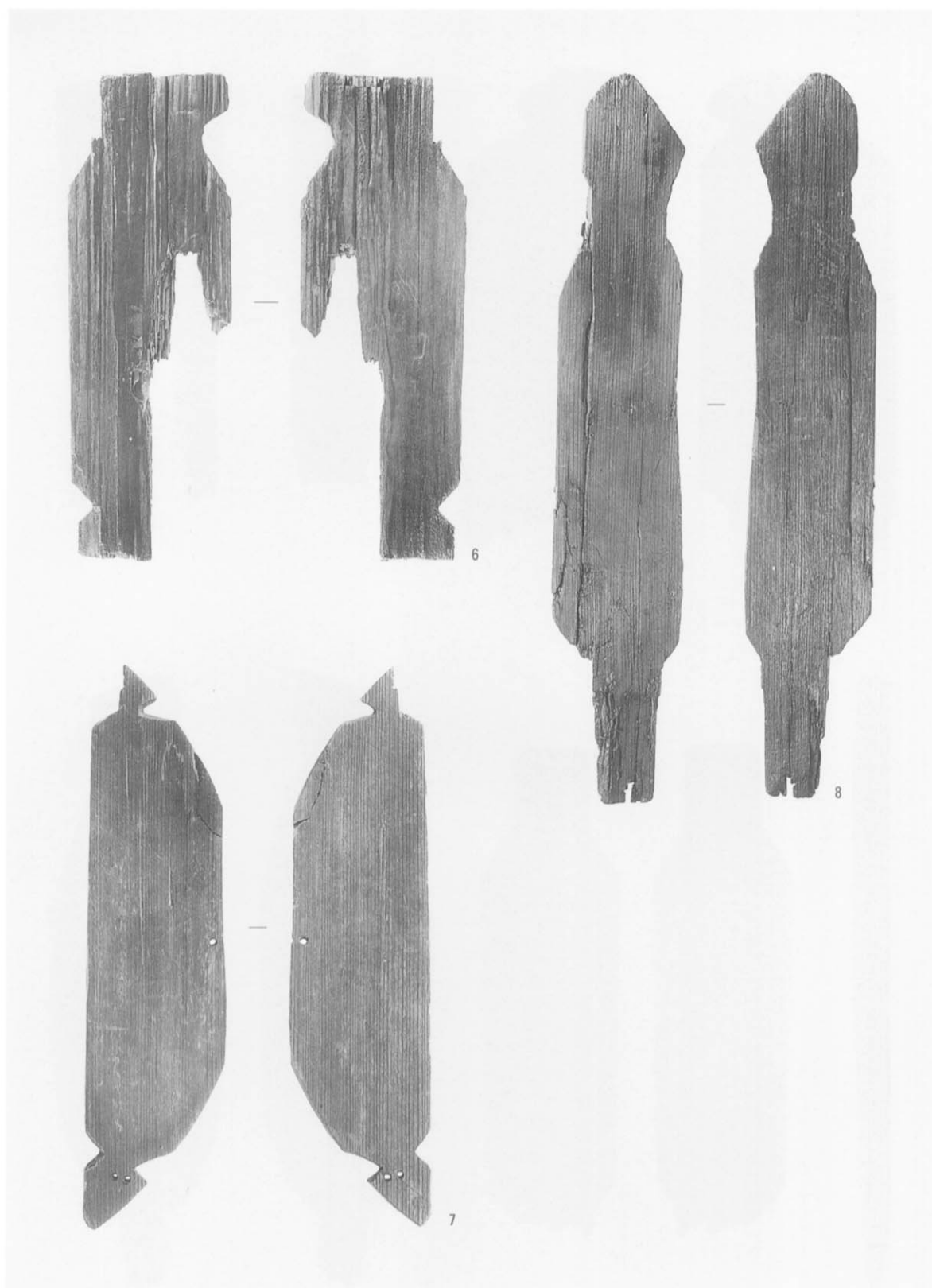
日焼3SX104、日焼 3 次遺構外出土土器漆付着・墨痕



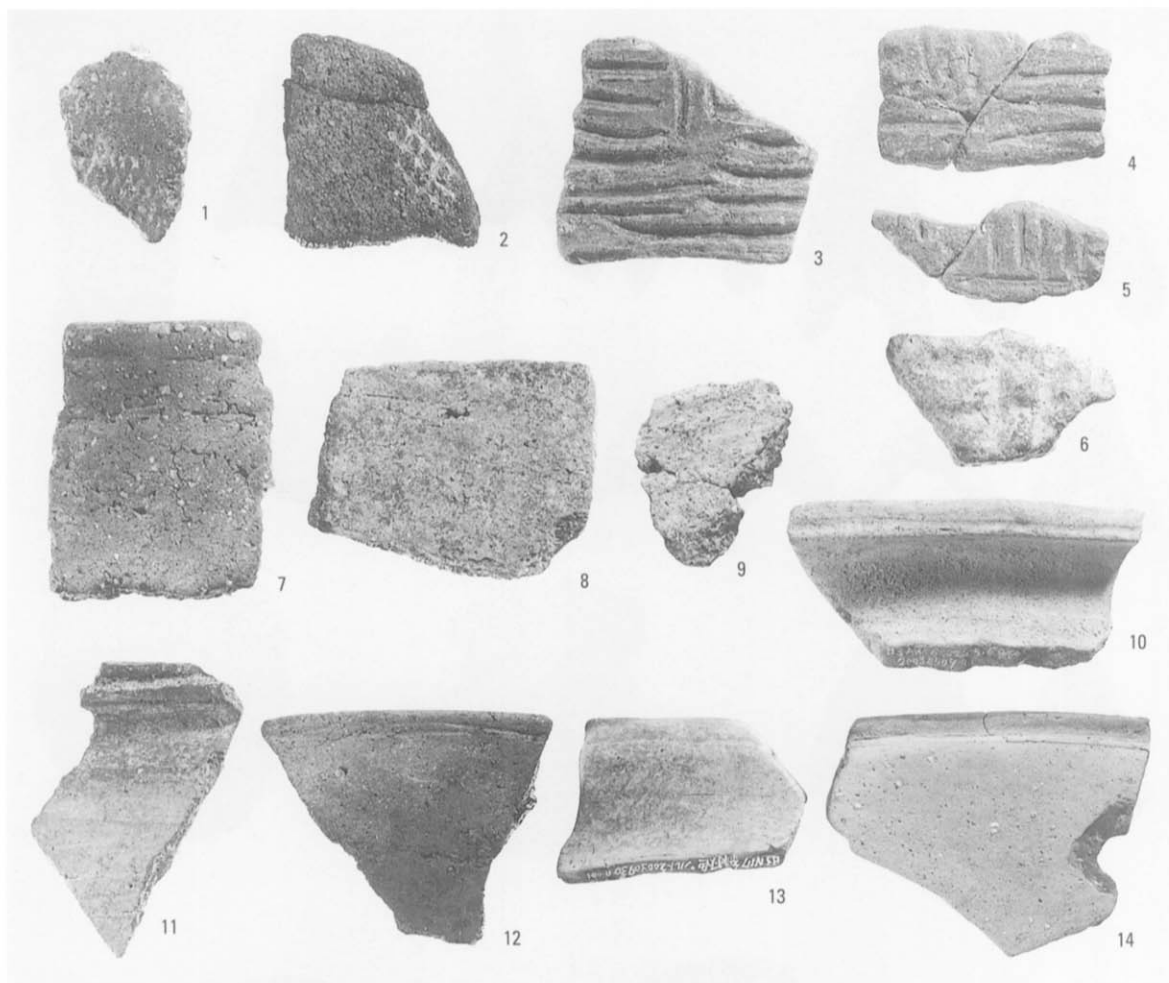
日焼 3 次出土埴輪



日焼3次出土木製品



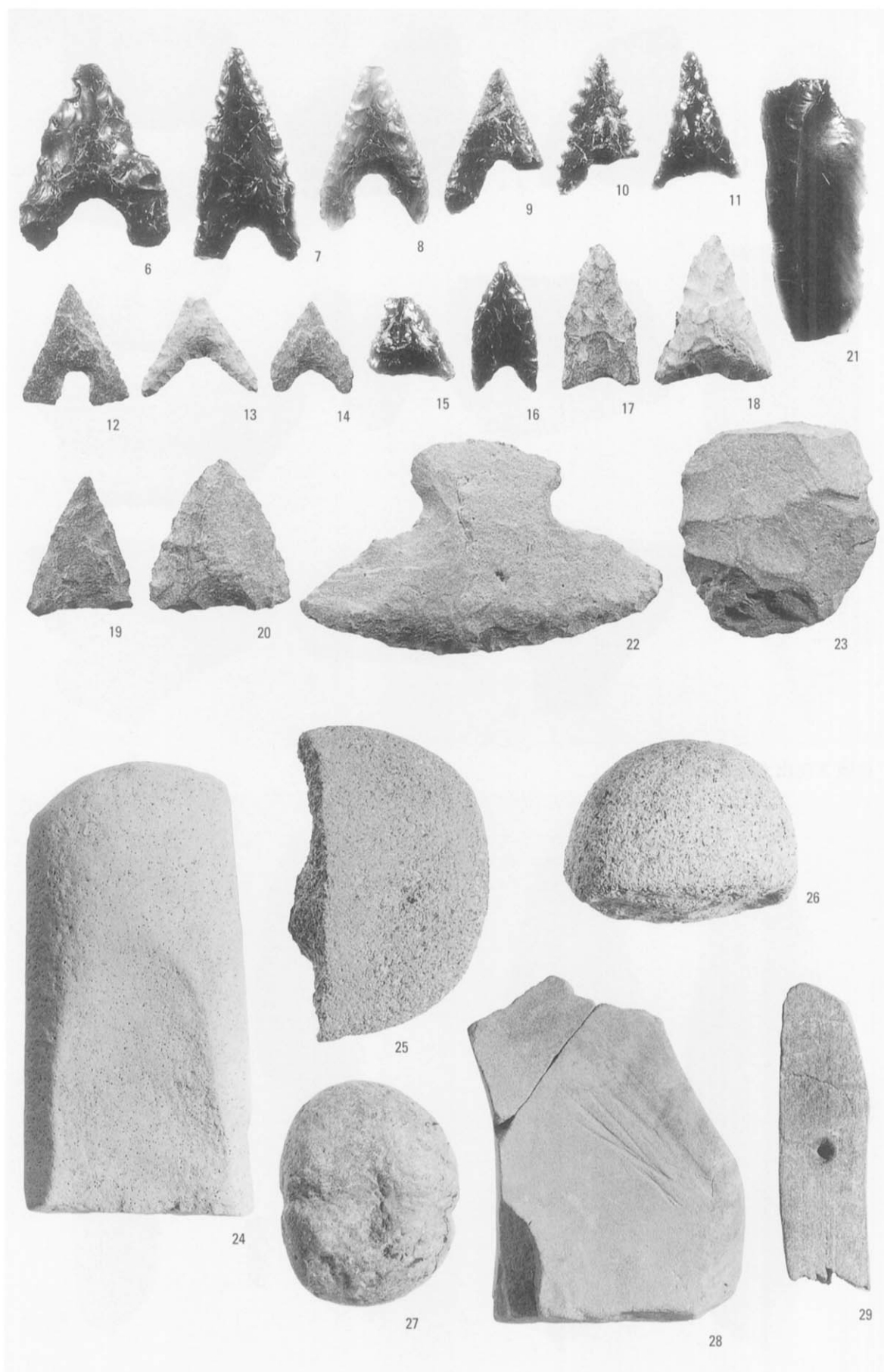
日焼 3 次出土木製品



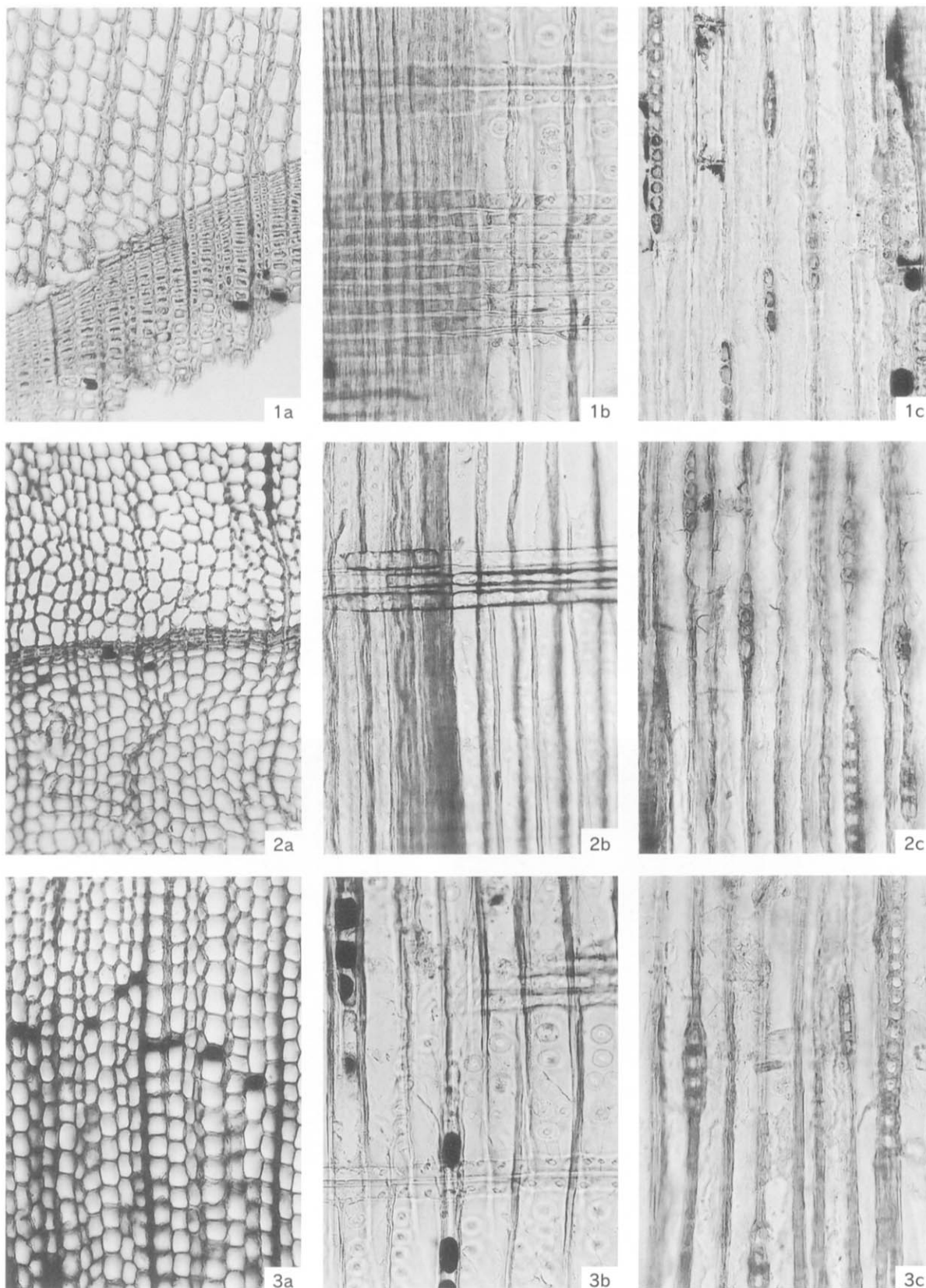
日焼3次出土縄文土器



日焼3次出土石器



日焼 3 次出土石器

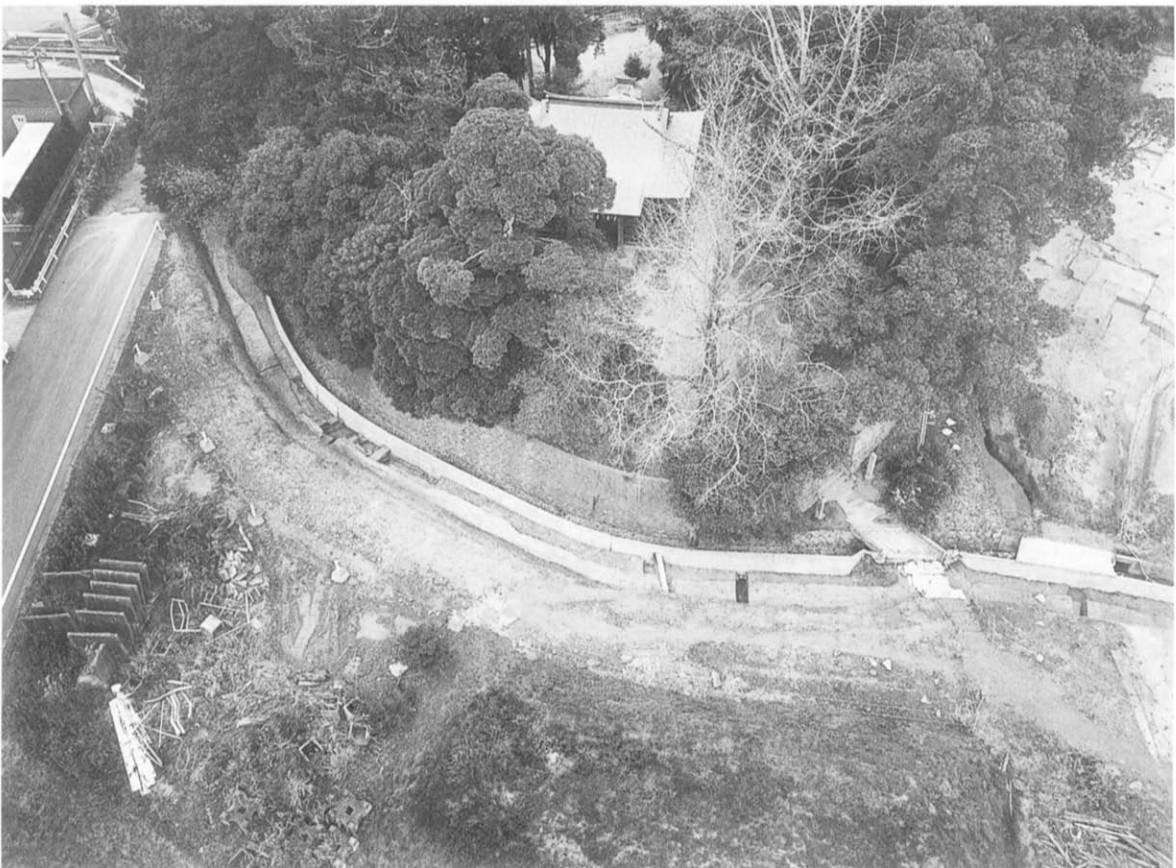


1. スギ (試料番号 6)
 2. ヒノキ (試料番号 4)
 3. スギまたはヒノキ科 (試料番号 1)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m:a
100 μ m:b,c



前田12次調査区北側全景（右下が北）



前田12次調査区南側全景（右が北）



前田12次調査区北側全景（北から）



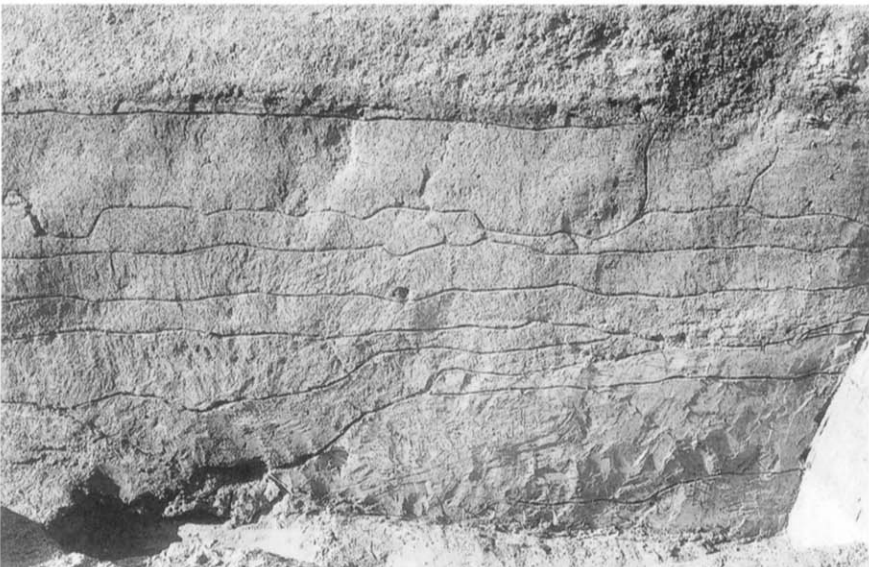
前田12次調査区北端部全景（左が北）



前田12SX002セクション (南から)



前田12次1 トレンチセクション (南から)



前田12次3 トレンチセクション (東から)



前田12次出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん 18									
書名	太宰府・佐野地区遺跡群 18									
副書名	日焼遺跡第3次調査・前田遺跡第12次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	第74集									
編著者	佐々木竜郎、バリノ・サーヴェイ株式会社									
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所									
所在地	太宰府市教育委員会 〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1-1-1 TEL092-921-2121 玉川文化財研究所 〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9 TEL045-321-5565									
発行年月日	2004（平成16）年3月10日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所 在 地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
ひやけいせきぐん 日焼遺跡第3次	条坊外	だざいふし 太宰府市 おおあざむかいざの 大字向佐野	402214		+56120.000	-46525.000	20030305	20031128	7062	区画整理事業
まえだ いせきぐん 前田遺跡第12次	条坊外	だざいふし 太宰府市 おおあざむかいざの 大字向佐野	402214		+56140.000	-46456.000	20031125	20031219	398.76	区画整理事業
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構			主要遺物			特記事項	
日焼遺跡第3次	集落	旧石器時代～古代	竪穴住居 掘立柱建物 古代官道側溝 自然河川			細石器 須恵器 土師器 付札状木製品			墨書土器等古代文字 資料が出土	
前田遺跡第12次	交通	古代 近現代	自然河川 水路 溝 道路			須恵器 土師器 国産陶磁器 瓦				

太宰府・佐野地区遺跡群 18

太宰府市の文化財 第74集

佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

日焼遺跡第3次調査・前田遺跡第12次調査

平成16年3月

発行 太宰府市教育委員会

〒818-0198 太宰府市観世音寺1-1-1

編集協力 玉川文化財研究所

〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1-8-9

印刷 株式会社アルファ

〒250-0001 小田原市扇町5-25-23